
アクレニア戦記 ～二つの決意～

フリーナ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アクレニア戦記 二つの決意

【Nコード】

N4662Z

【作者名】

フリーナ

【あらすじ】

天空に輝く、紅と蒼の月が浮かぶ世界『アクレニア』。
その世界は、魔法による栄華の極みにあった。
そんな世界に忍び寄る影。

これは、その影と戦う少年少女の決意の戦い。

プロローグ

天空に輝く、紅と蒼の月が浮かぶ世界『アクレニア』。

そんな世界には、大きな大陸が二つあった。北と南。一つの大きな大陸が、まっすぐ横に分断されたように別れた大陸に、二つの国があった。

北の大陸に居を構える『エスカレルニア王国』。

南の大陸に居を構える『フォーゲルノート帝国』。

二国は独自の発展を遂げながらも、お互いを尊重し敬った。時折現れる、魔物からの恐怖を協力して打ち払い、手を取り合いながら生きていた。

森羅万象の理を統べる、魔法と呼ばれる力によって世界は繁栄の極みにあった。

そして、その魔法が扱える者の事を、『魔導師』と呼ぶ。

だが、魔導師は一人では魔法を扱うことができない。

その森羅万象の理を統べる存在として、世界を構築する者の一つに『聖霊』と呼ばれる者たちが存在しているからだ。

聖霊とは、魔法を生み出すに当たって必要不可欠である、魔力の流

れを制御するもの達である。

人と聖霊、この二つが協力してこそ魔法は生まれ、力を扱うことが出来るのだ。

さらに、聖霊は森羅万象という人智を越えた力を扱うがために、種族が分けられていた。

炎の聖霊『フレイヤ』。水の聖霊『アクティア』。氷の聖霊『アイシー』。風の聖霊『ウィンディア』。土の聖霊『ロイス』。雷の聖霊『サンディア』。光の聖霊『ブリネスア』。闇の聖霊『ダルネスア』。時の聖霊『エヴィデンス』。

九つの存在へと分かれた聖霊は、人々に九属性と呼ばれて敬われていた。

そして、人々は穏やかに聖霊との調和の生活を維持しながら、平和の時を過ごしていた。

だが、そんな平和に影が落とされる。

エスカレルニア王国の辺境の農村が魔物に襲われたのだ。

その事件については、あまり珍しい事ではなかった。魔物が村や町を襲う事などは頻繁にあったからだ。

しかし、襲われた村の住人は口を揃えてこう言った。

『あんな魔物は見たことが無い。まるで、騎士団のように統率されていた』と。

無論、誰もがそんな話を信じるはずがなく、事件は有耶無耶のうちに時の流れに飲み込まれていった。

その影で、暗く、深い闇の思惑が蠢く事も知らずに。

これは、二つの異なる輝きを持った月と、魔法と呼ばれる森羅万象の力によって栄える世界、『アクレニア』で起こる、一人の少年の決意と一人の少女の断罪の物語。

憂鬱の理由

パラ…パラ…パラ…

心地よい風の吹く部屋の中、一人の少年が頬杖をつきながら本のページをめくっていた。

年は若い。体軀は細く、身長も少し小柄である。

水色に染まった短めの髪を横に流し、さながら美少年と言った風貌の青黒い瞳の色をした少年だ。

豪勢な装飾に彩られた部屋の中に、ただ一人退屈そうに本をめくっている。

「…はあ…」

しまいには大きなため息まで出してしまう始末である。

すると、少年は本をめくっていた手を止め、すっと立ち上がった。

辺りを見渡し、これまた豪勢な本棚に手をかけて、とある本を引っ張り出した。

その本の表紙にはこう書かれていた。『帝国王家の歴史』と。

少年はその本をやや乱暴ぎみに今まで向かっていた机の上に置き、ページを広げた。

ペラ…ペラ…ペラ…

今度も大した意味は無いようで、退屈そうにページをめくる。

そして、そのページの枚数が無くなるかというとき、少年のいる部屋の中に一人の女性が入ってきた。

「シオン殿下。そろそろお時間になります」

「…はい。…んんー」

恭しく礼をした後、特徴的な色合いのメイド服を着た女性は、自らが仕える少年に告げた。

シオンと呼ばれた少年は気だるそうに返事をした後、大きく背伸びをする。

体中にあるもの全てを絞り出すかのように大きく背伸びをした後、話しかけていた女性に声をかけた。

「あのー、リサーナさん？ 別にこう言う場では『殿下』って呼ばないでって言ったと思うんだけど…」

殿下という言葉を強調していったシオンに、リサーナと呼ばれた女性には薄く笑いながらその言葉を否定した。

「いえ、言われておりませんよ？ その前に、あなたはフォーゲルノート帝国の王子なのですよ？ いい加減、慣れてもらいませんか」

「うーん、そうなんだけどねー…」

彼女の頭に生えている垂れた犬耳を見ながら、シオンは軽く唸ってしまう。

この世界アクレニアには、シオンのような『ヒューマティア』と呼ばれる種族と、リサーナのような『ビルスティア』と呼ばれる亜人の種族、『スピリティア』と呼ばれる魔法の扱いに長けた長命の種族が住んでいる。

『ヒューマティア』と呼ばれる種族は、他の種族の者たちと比べて秀でた所はなく、万能型の種族と呼ばれ、聖霊に魅入られた者は魔法を扱うことも可能な種族だ。

『ビルスティア』と呼ばれる種族は、体力や力と言った身体能力に優れており、特攻型の種族と呼ばれている。だがその反面、魔法を扱うことは不可能といった面がある。

『スピリティア』と呼ばれる種族は、魔力や知能といった精神的要因が絡む事柄に強く、保守型の種族と呼ばれている。種族全体が聖霊に魅入られており、魔法を扱えない者はいないとも言われている。

さらに、この三つの種族を見分ける最大の特徴は、耳を見ることがある。

ヒューマティアは普通の大きさの耳。ビルスティアは獣の耳と尻尾。スピリティアは横に張り出した尖った耳。

と言うように、簡単に見分けることが可能なのである。

そして、シオンの目の前にいるビルスティアの女性は、ビルスティ

アの一番の特徴である尻尾を揺らめかせながら、シオンの態度を咎めた。

「シオン殿下：そのような煮えきらない態度はよろしくないと、前にも忠告させていたいただきましたよね？」

「うん：確かに言った。でも、これからの事を考えると、正直憂鬱だよ：」

はあ：と大きなため息を吐くシオン。心底憂鬱そうである。

だが、リサーナはそんな事もお構い無しに言葉を続けていく。

「憂鬱だろうが何だろうが、出ていただきます。今日は記念すべきシオン殿下の戴冠式なのですからね。もっとシャキツとしてもらわないと困ります」

戴冠式。それこそがシオンをここまで憂鬱にさせるものの名前だった。

戴冠式とは、文字通り冠を戴く儀式である。すなわち、それを受けた者は『王』となるのだ。

シオンの年は、数えること十八回。そして、この戴冠式が終わり王位につく頃には十九を向かえている。

若すぎるという声上がるのは当然だが、シオンのいる帝国王家の慣わしではこう決められていた。

『王位を継ぐ者、十九回目の節目を向かえるまでに冠を被るべし』

と。

この慣わしを受け、シオンは今まさに戴冠式を行おうとしていたのだ。

シオンがいる場には聞こえてこないが、外では期待のあまり熱狂の渦が巻き起こっている。

そんな事を露ほども知らないシオンは、もう一度大きなため息を吐いた後、リサーナに確認を求めた。

「そう言えば、リサーナさんは前の…父上の時の戴冠式の話は聞いていないんだっけ？ 父上には聞けないし、他の忠臣達に聞いても何も教えてくれないし…」

「さんなどいりません。お言葉ですが、私はあなた様とさほど年は変わりませんよ？ それに、戴冠式の様子を伝えることは許可されておりますので」

「え？ なんで？」

「クルト様のご意志です」

「ああー、そういう事」

リサーナの言葉に、ポンと手を叩きながら納得するシオン。

だが、リサーナはそれを見ることなくシオンの肩を掴んでいた。

「ささ、ここで長話をしている場合ではございません。早くお着替

えを」

「え？ まさか、あれを着るの？」

リサーナの言葉に、シオンはひどく怯えた様子で言葉を発する。

「当然です。さあ、お手伝い致しますので」

「いやいやいや、自分で脱げるからー！」

有無をいわさぬリサーナの言葉と行動に、シオンは軽く悲鳴をあげながら抵抗する。

だが、結局は為す術なく、身ぐるみを剥がされてしまうシオンだった。

民衆の中で

ガヤガヤガヤガヤ：

ポポンッパパパンッ

フォーゲルノート帝国の首都、センシミアの街は、かなりの人で溢れ返っていた。

王宮のある街の中心部を、円上に取り囲むように出店が出回り、周囲にはめでたい日を祝う人が酒盛りをしている。

そう。ここは戴冠式が行われる会場であり、皆新しい王を祝うために集まっているのだ。

人の出生が絡んでいるということもあり、戴冠式はかなり不定期に行われる。

最低でも十八年というスパンがあるため、国民はかなりこの儀式という名の祭りに敏感なのだ。

そして、ここにも戴冠式という名の祭りを楽しむ者の姿があった。

年は若く、今まさに戴冠式を浮けようとしている少年と同じくらいであろう。

長い金髪の髪を黒いリボンで二つにまとめた、落ち着きの感じられる翡翠色の瞳を持った少女だ。

そんな少女が、目の前にいる自らの友達であろう小柄な少女を見て
こう言った。

「ちょっと、ミーナ。あんたハシヤギすぎじゃない？」

「えー、そうでもないよ？　ってか、ユフィーが全然ハシヤいでない
んだってば。愛しの王子様がいるかもしれない場所にいるのにさ
ー」

「なっ！　ミーナ、何を言って…！　あ、あたしはそんなのなんか
…！」

ミーナと呼ばれた小柄な少女は、ユフィーと呼んだ金髪の少女をか
らかうように舌を出して言う。

その言葉を聞いたユフィーは、ひどく狼狽しながら手を前に突き出
して否定しようとする。

だが、薄緑色の長めの髪を指先で弄びながら、ミーナは最後の言葉
のストレートを言い放った。

「えー、いいじゃんいいじゃん。好きな人がいるって言うのは良い
事だよー」

「……／＼／＼」

「わー、顔真っ赤ー！」

「…っ／＼／＼！　…こ、の！　待ちなさい！」

それにボンツと言う音が聞こえてきそうなほどに顔を真っ赤にさせてしまうユフィー。

だが、ミーナが言ったからかいの言葉に腹を立てたのか、顔が真っ赤のまま手が振りかざしてミーナを追いかける。

ミーナはそれが分かっていたようで、すぐに踵を返して逃げ出していた。

「うわーユフィーが怒ったー逃げろー」

「棒読みで、言うな！」

ガツンツ

「いだっ！」

振りかぶっていた手を、ミーナの頭の上に綺麗に振り下ろす。

すると、決して人の頭から出てはいけないような音と、女の子らしくないような声をミーナがあげた。

殴られた頭をさすりながら、ミーナは恨めしそうに青紫色の瞳に涙を溜めながら、ユフィーを見つめてこう言った。

「うー。何も本気で殴らなくなったっていいじゃん…」

「あのね、本気で殴らないと意味ないでしょう？」

殴った手をプラプラと振りながら、ユフィーはミーナにそう言う。

その発言にミーナは気に食わない所があったらしく、ユフィーに食ってかかった。

「いたいけな少女にその発言！ 許されないと思うのは私だけではないか！？」

「知らないわよそんなの。だいたい、いたいけな少女って何よ」

「あー！ もう！ 今までもの凄く可愛かったデレてるユフィーはどこ行っちゃった！？ ツンデレって疲れるんだよ！？」

ドカツ！

「キュウウ…」

かなり大きな音と共に、ミーナが呻き声をあげながら沈黙する。

その頭に、大きなたんこぶをつけて。

そして、そのたんこぶを作ったユフィーは、ミーナとは逆の方向を向いていた。

腕を組んで顔を背けてはいるが、耳の先まで真っ赤にさせているのを隠すことはできていなかった。

突然の襲撃

「……わー……」

シオンは、自らの姿が写った鏡を見て自分の意識が飛びそうになるのを感じていた。

「…似合ってます、よ？ ええ、似合ってます似合ってます！」

その後ろに控えているリサーナも、必死にシオンに励ましの言葉をかける。

だが、シオンの半眼に開かれた両目が戻ることとは無かった。

「……派手っていうか…モサモサしてるっていうか…重いっていうか……なんなの？ これ」

シオンが今着ている服装は、戴冠式用に詔えられた服装だ。

肩元にはありえないほど盛られた白色のファー。天空に浮かぶ月をなぞらえた紅と蒼が混ざった色合いの重めのコート。そして、胸の中央部分に大きく縫われた帝国王家の紋章。

はっきり言って、シオンが着たくなかった理由がよく分かる。

ダサすぎなのである。

「いえいえいえ、これが戴冠式には必要なのです。本当ですよ？」

焦った様子で、シオンのかなり盛り下がってしまった気分を戻そうと、リサーナが必死に取り繕う。

だが、リサーナの必死の励ましも虚しく、シオンはかなり沈んだ気分のまま戴冠式を向かえたのだった。

「あーあー、聞こえてますかー？ …よし、では……これより、戴冠式、並びに王位継承式を執り行いたいと思います！」

わあああー！！

街のあちこちに付けられた使用者の声を拡散させる魔法具から、若い男の宣言が飛び出す。

その声を聞いた民衆たちは、雄叫びのような声を一斉にあげた。

民衆達から上がった声は、明らかに度を越した大声ではあったが、この際誰も気にしていないようである。

それは、端の方でその一部始終を眺めていた少女達も例外では無かった。

「わー！　ねね、ユフィー。始まるってさ！」

「聞こえてるわよ。あまり騒がないで」

「えー、いいじゃんか。私達がど突き漫才してたから、真ん中の方に陣取れなかったのは事実だけどさー」

「ほとんどあんたの所為でしょうが」

「たはは…返す言葉もございませーん」

「…はあ」

全くと言っていいほど悪びれる様子の無いミーナに、ユフィーはため息を吐いた。

だが、すぐにその憂鬱な気分は打ち消されることになる。

なぜなら――

「おお！　シオン殿下が出てきたぞ！」

「キャー！　シオン様ー！」

「王子様ー！ 王様になっても、ウチの店に来てくれよー！」

フォーゲルノート帝国第一王子、シオン・セナ・ファルカス、今回の戴冠式の主役が現れたからだ。

先ほどまで、嫌そうな顔で自らの写った鏡を見ていたシオンだったが、今この場ではそんな事を微塵も感じさせない佇まいになっていた。

少々歩く時に不便そうではあるが。

それでもシオンは、かけられる言葉の一つ一つに答えながら、王宮の門の前に作られた台座へと向かって行った。

「ほえー…。さすがは人気の王子様だねー。全部好意的な声しか上がってないよー」

「ま、それもそうでしょうね。わざわざ私達の村まで来るような奴だし…」

ユフィーとミーナの関心の言葉通り、シオンは今までに例を見ないような人気ぶりを誇る王子だった。

シオンは王宮の外、つまりは民衆の暮らしに深く興味を持っていたため、頻繁に王宮の外を出歩いていた。

その行為に王宮にいる忠臣たちは頭を痛めていたのだが、シオンに『王になるんだったら、民衆の気持ちをよく分かっているなければならない』と言われ、ぐうの音もでなかった。

そして、その行為が幸いしてか、帝国に住まう者たちの中では知らない者はいないと呼ばれる存在となっていたのである。

「うんうん。あの時はビックリしたよねー。ただの男の子かと思っただけど、実はびっくり王子様って、普通じゃないよねー」

「ええ。それに、最初の言葉が『泊めてくれ』だものね。その時は呆れて物も言えなかったわ」

「確かにねー。でもその後に、な・ぜ・か・私の所に来たよねー？」

悪戯っぽい笑みを浮かべながら、ユフィーに近寄るミーナ。

だが、ユフィーは今度は冷静に対処していた。

「あのねえ、あれはあたしの家に泊まることになったから、仕方なくあんたの家に行っただけでしょう？」

「うわ、冷静に返されたよ…」

呆れたように言うユフィーに、ミーナは若干面白く無さそうに呟いた後、シオンの向かう台座へと目を移した。

何の変哲もない、ただ他の台からは高く作られた装飾の施された台座。

そこには、早くも戴冠式の準備のために立っている忠臣の姿があった。

「シオン様。この度は私が進行役をやらせて頂く事になりましたん

でえ、どうぞ、よろしくお願いいたしますねえ」

「あ、そうなんだ。じゃあよろしく頼むよ、ピラーさん。あ、でも、喋り方は普通にしてね？」

かなり喧嘩を売っているような喋り方だが、これがこの男の普通の喋り方である。

ブレイク・ピラー。主に帝国の執政を任せられ、参謀長とまで呼ばれているほどの男だ。

見た目的には、緑色の髪を逆立て基本的にいつでも喧嘩腰と、かなり素行の悪そうに見える男なのだが。

だが、シオンはブレイクの態度には慣れっこなので、あまり気にせず言葉を使った。

その言葉を受けたブレイクは一度苦笑すると、大きく息を吸い込んで宣言した。

「ははは…それを言われちゃ仕方ありませんねえ…。…では…これより、戴冠式を執り行う！ 皆の者、静まれい！！」

大音量で発せられた言葉に、先ほどまでの興奮は嘘だったかのように会場は静まり返る。

そして、ブレイクは式の進行のために声をあげていく。

それは主に、ほとんどが式の意味や執り行い方、その他諸々の雑務処理であったため、シオンの緊張は言葉を聞く度に高まっていった。

「——である！ では、これより我らが国王、クルト・シン・ファルカス様が御登場なされる！ 皆の者、控えよ！」

そのブレイクの威厳のこもった言葉に、民衆たちは頭を垂れていく。それはブレイクも例外ではなかったが、唯一シオンだけがそのまま立っていた。

そして、そこに現れたのは豪勢なローブを着込み、シオンよりも暗めの水色の髪を伸ばした無精髭の男。

威厳が溢れるような佇まいで、ゆっくりとシオンのいる台座へと、忠臣たちを後ろに連れたまま近づいていく。

シオンは、近づいてくる父親の姿を認めながら、緊張のピークを迎えていた。

はっきり言って、シオンは父の事が苦手だった。

絶大な権力を持ち、この帝国の行く先を牛耳る国王。これだけなら、ただの王となんら変わらない。だが、父の自分に対する態度が苦手だった。

一歩後ろに下がった状態で息子の調子を窺う父。全ての台詞が作られたものに感じ、今まで一度も腹を割って話した事は無い。

それがシオンとクルトの関係だった。

だが、今だけは違っていると、シオンはなぜかその時確信していた。

この戴冠式が終われば、シオンは父親と同じ位に、王となるのだ。そうすれば、父の気持ちが分かるかもしれないと思ったからだ。

「…シオンよ…。よくぞここまで成長したな」

「父上…。まあ、年月が経てばそうなりますよ。それに、僕が何をしてもあまり興味を示さなかった父上のおかげでもありますけど」

「そうか…。やはり、母は強いという事か…」

「え？ 母上がどうかしたんですか？」

シオンには母親がいない。シオンが生まれて数年後に死んだと父から聞かされていた。

そのため、シオンには母親の記憶という物がほとんど無い。

だからこそ、いきなりこの様な場でクルトがそんな話を持ち出したのか分からなかった。

「お前の母、エレインに言われていたのだ。『この子は賢い子です。だから、この子が興味を持ったこと、なそうとしている事があった時には、暖かく見守っていてください。それが、この帝国王家に光を灯すことになるでしょうから』とな」

遠くを見つめ、その時の言葉を思い出しているのだろう。

クルトは、王としては絶対に見せることのない、家族を思う父親の顔をしていた。

「…そう、ですか…母上がそんな事を…。…なら、僕は父上と母上、両方に感謝しないといけませんね」

その顔を見たシオンは少し驚いていたが、すぐに自らの顔を引き締め、クルトへと話し出す。

「母上の言葉があったから、僕は自由に行動する事ができた。父上の存在があったから、僕は不自由無く暮らすことができた。…僕も、そんな家族が作れるでしょうか？」

シオンの決意に、クルトは一瞬呆気にとられた後、苦笑しながらこう言った。

「…馬鹿者…。家族の前に、お前には重大な役割がある」

「はい、分かっています。…立派な王になる、ですよネ？」

「そうだ。では、始めるとするか。いつまでも民や忠臣たちの頭を下げさせている訳にもいかんしな」

「あ、そうですね。分かりました」

「…ブレイク、始めてくれ」

王に戻ったクルトの声が、頭を垂れていたブレイクを動かす。

弾かれたように立ち上がったブレイクは、止まっていた式を進行させるために声を張り上げた。

「…これより、戴冠の儀を行う！ 皆の者、頭をあげて礼を行え！」
ブレイクの言葉により、民衆は一斉に頭を上げて手を前に差し出して組む。

そして、後ろに控えていた忠臣たちの中から、大きな王冠と、王位継承の証の指輪が運ばれてきた。

その二つを手にとったクルトは、シオンに向かってこう言った。

「…シオンよ。これらを身に着けた時、お前はこの国の王としての証を得る。…お前に、その覚悟があるか？」

静かだが重みのこめられた言葉に、シオンは一泊置いてから自らの決意を口にした。

「…はい。僕は、僕にはその覚悟が――」

「ギャアアア！！！！」

「っ！」

だが、その言葉は途中でかき消されてしまった。

巨大な魔物の、鳴き声によって。

騒乱と決意

「うわあああ！！！」

「きゃあああ！！！」

混乱。

先ほどまでの静けさとは打って変わって、戴冠式の会場は混乱の渦に飲み込まれた。

それは当たり前だろう。

普段は誰も聞く事が無い魔物の鳴き声と、その大きな巨軀を目の前にしてしまっは。

山のような巨軀に、天に向かってまっすぐに伸びた三本の角。四本足で立つ朱色の魔物と、それに従うように動く黒色の異形の鳥に、皆が恐怖を覚えていた。

「くっ、『エルブレイア』と『ヒーナス』だとお！ 守衛の騎士団は何をしていたあ！！！」

ブレイクの焦りの声が響く。

やはり、帝国の参謀長と呼ばれる彼であっても、この出来事は当然のように想定外の出来事であった。

そのためか、いつもは喧嘩腰で飄々とした雰囲気で命令を下すブレイクの姿はどこにも無かった。

しかし、この場には王が、クルトがいた。

「静まれ！ 騒いでいるだけでは大局は見えん！ 民たちの避難と、騎士団の集結を急がせろ！ ブレイク、お前はここにいる忠臣たちを連れて魔物の討伐を急げ！」

「しかし、それでは王が…！」

「くどいぞ！ 私の命よりも、民の命だ！ それが分かればさっさと行け！」

「はっ！」

クルトの命令に、一時は食い下がったブレイクだったが、すぐに忠臣たちを引き連れて魔物の方へと向かう。

それを見届けたクルトは次の指示を飛ばすと、シオンへと向き直った。

「ふう…。いきなりこのような事になるとはな…。せっかくの晴れ舞台が台無しだ」

「いえ、それより、早く逃げないと！」

「お前は逃げろ。民たちを置いて、私だけ先に逃げる訳にはいかん」

「そんな！ 父上も一緒に！」

「お前はまだ王子の身だ！ このフォーゲルノートの国を治める資格があるのは、お前だけなのだ！」

シオンの悲痛の叫びに、クルトは怒鳴り声をあげる。

その声に、シオンは軽く体を強張らせる。だが、シオンにも引けない理由があった。

本来なら、戴冠式の際に言っていたはずの決意。それが、シオンを駆り立てていた。

「そんな事言ったって、僕にはまだ、父上から学ばなければいけないことがたくさんあるんです！ だから、僕も戦う！」

目の前で誰かが戦っている。そして、自分はそれを見ていることしかできない。

シオンは、もう守られる関係は嫌だった。どこに行っても『ファルカス』の名前が付き纏う。

なら、自分が誰かを守れる存在になりたい。誰かのために、自分の存在を生かしたい。

それが、辺境の村で出会った少女との出会いによって芽生えた、シオンの決意だった。

「…そうか。お前も、見つけたのだな。自分の信念を、覚悟を、決意を…」

自分を見つめる息子の姿に、クルトはそう呟く。

子供はいつの間にか成長する。それこそ、親などすぐに飛び越えて。その事を、クルトはこんな状況だというのに、シオンの目を見て確信していた。

「…なら、お前も戦え。己の決意のために。守りたいものを、守ってみせよ！」

心配する父親の顔ではあったが、クルトはシオンにそう言った。

せっかくの晴れ舞台。こんな事になってしまったが、シオンの意見は優先してやろう。

そんな思いで、クルトはシオンに言葉を投げかけたのだ。

「はい！」

そんな思いに気づいているのか、シオンは元気よく、そして嬉しそうに答える。

その息子の声を聞いたクルトは、周囲の者に向かって呼びかけた。

「誰かある！ 『リーンプル』と『カテドラル』をここに！」

「はっ！」

クルトの声に答えたのは、メイド服の肩の辺りに鎧を取り付けたリサーナだった。

そしてその手には、左右の大きさが違う翼のついた変則式のボウガンと、綺麗な装飾がなされ、手甲の部分に大きな窪みのある双爪が握られていた。

リサーナは、その二つの武器をクルトへと掲げ、跪いている。

「よし。シオン、行くぞ」

『リーンプル』を手を取ったクルトは、そのボウガンに矢を込めながらシオンを急かす。

だが、シオンは自らの武器である『カテドラル』を取ろうとはしなかった。

それよりも気になることがあったからだ。

「リサーナさん？ 何でここに…って言うか、どうしてリサーナさんが僕と父上の武器を？」

頭に？マークを浮かべたシオンだったが、すぐにクルトとリサーナの言葉によりその疑問は解消された。

「何を言っているのだ。リサーナはメイド長であり、武器の管理を任せている者だ。ビルスティアの身体能力の高さはお前も知っているだろう？」

「そうですよ、シオン様。さすがに魔法は扱えませんが、戦力にはなります」

そう自身たつぷりに言うと、リサーナは自らの獲物を引き抜いた。

『ナーヴィメア』。先がかなり鋭利に尖っており、その先を見ることはかなり難しいほど細くなっている短剣だ。

不敵に笑うリサーナに、シオンは半ば諦めた形で自らの武器を取った。

チャリ：

爪同士を触れ合わせ、金属同士の不協和音を奏でると、シオンは真っ直ぐに前を向いた。

その目の前に移るのは、シンセミアの街に近づく『エルブレイア』の巨躯と、もう既に街に入り込んでいる『ヒーナス』の姿。

生まれ故郷が蹂躪されようとしている姿に、シオンは唇を噛み締めた。

そんなシオンの強張った肩に、クルトの手が置かれた。

「案ずることはない。お前の武芸、見せてもらうぞ」

「なら、私はお零れを貰いますので、思う存分暴れてきてください」
言葉は違うがクルトとリサーナの信頼の言葉に、シオンは笑いながらこう言った。

「はい。いってきます！」

これから始まる、自らの決意を示す戦いに、彼は一步を踏み出したのだ。

目覚める力

一人の少年が決意を表した時と同じ時刻、二人の少女は隠れていた。

全くと言っていいほど知らない首都の街並みだったが、辺境の村に生まれ育ち、魔物とも何度か遭遇した事のある彼女達にとっては、得に何ともないことのはずだった。

目の前で、人が魔物に喰われる人の姿を見なければ。

「ねえ、あ、あの人、死んだ？ 死んだよね？」

「落ち着きなさい！ あんたが暴れても、何も変わらないの！」

偶然鍵の開いていた民家の中に逃げ込んだミーナとユフィーは、目の前で見てしまった惨劇に怯えていた。

ヒーナスの鋭く尖った嘴に貫かれ、魔物特有のビッシリと生え揃った牙に喰われる男の姿。

魔物に出会ったことがあるといっても、年端のいかない少女達に、人がボロボロになりながら喰われる姿は強烈だった。

目の裏に焼き付いて離れないその光景に、ミーナはただ怯えながら現実から逃げ、ユフィーはミーナを諭しながらもその体は震えていた。

「な、なんでこんな事になっちゃったの？ 首都って一番安全なんでしょう？ 騎士団って言うのがあって、首都を守っているんですよ？」

錯乱気味に自らが涙を流していることも気づかずに、ただ呆然と言葉を紡ぐミーナ。

情報と記憶が混濁しているようで、言っていることは支離滅裂である。

「首都にいるのは王家の親衛隊よ。騎士団はここにはいない。今も魔物と戦ってくれているわ」

ユフィーも体が震えているのを止められてはいないが、ミーナを落ち着かせるために努めて冷静な声を出す。

だが、外から悲鳴と魔物の鳴き声が聞こえてくるためにあまり意味はなさなかった。

「：私たちどうなっちゃうんだろうね。：何も持ってないんだよ？ 武器も、魔法なんか使えない。：無理だよ」

「無理なんか言わない！ 大丈夫だから。絶対に誰かが助けてくれる。あの時みたいに：」

「無理だよ！ 今はあの時とは違う！ 人がいっぱいいるもん！ 私たちがいることすら知らないんだよ！？」

「：じゃあ何を信じて待ってろって言うのよ！」

ミーナの台詞に、ユフィーの怒りが爆発する。

いや、怒りではないはずだ。不安、恐怖と言った負の感情。その類の物の爆発だ。

こんな状況で平静を保ってられる者などいない。彼女達は武器はおろか、魔法すらも扱えない、ただの人間なのだ。

そして、ユフィーやミーナのように、ヒューマティアの種族は魔力を持って生まれてこなければ、魔法を扱うことはできない。だが、その魔法と魔力を扱う上で重要な、『聖霊』との接点を持っていないければ、魔法は扱えない。

その事が分かっているからこそ、ユフィーとミーナも不安なのだ。

自分たちには、助けを待つ事しかできないのだと。

「…ごめんなさい。すこし、取り乱したわ」

「…いいよ。私も悪いんだし」

そんな想いのまま叫んでしまった事を、ユフィーは詫びる。ミーナも想いは同じなので、その事を許すことができた。

だが、その所為なのか、二人の間に微妙な沈黙が起きる。

「…でも、本当にどうしようかしら。こんな所にいつまでもいたら、見つかるだけ……!」

そんな空気を払拭しようと、これからの事についてユフィーが話し

出す。

だが、その言葉はすぐに途切れることになった。

ドガシヤア！

大きな音を立てながら、ユフィーたちの隠れている民家の屋根が崩落する。

そして、土埃の舞う中から現れたのは魔物、ヒーナスだった。

「ひっ！」

突如目の前に降り立った異形の鳥の魔物に、ミーナが小さく悲鳴をあげる。

その悲鳴に反応したのか、ヒーナスが鋭利に尖った嘴を二人に向けた。

そこから覗く、ビッシリと生え揃った黒い牙に、二人は恐怖のあまり動けなかった。

「ええい！ こっちこないでよ！」

「ユフィー！？ なにしてるの！？ 早く逃げないと！！」

「腰が抜けて立てないくせにそんな事言ってるんじゃないの！ あんな一人をおぶって逃げるなんて、あたしには無理！」

ゆっくりとだがしっかりと近づいてくるヒーナスに、ユフィーは若

干腰が引けながらも身を挺して追ひ払おうとする。

そんなユフィの行動を、ミーナはひどく慌てた様子で咎めた。

だが、その咎めの声をユフィは即答で返した。

事実、ミーナは完全に床にへたり込んでしまっているのだ。

さすがにミーナが小柄といっても、ユフィの華奢としか言いようが無い体では、おぶって逃げれる訳が無かった。

「あんたが立てるようになるまでぐらいなら、時間稼いであげるから！ さっさと立ちなさい！」

「でもでもでも！ そんな事言っただって、ユフィはどうするのさ！」

「何とかなるわよ！ あんたよりあたしの方が運動できるんだから！」

「だからって……っ！ ユフィ、後ろ！」

こんな場面に慣れていないのだろう。ユフィは重大な失敗を犯した。

敵に背中を見せ、それでいて注意を逸らすなどという愚行を。

ミーナの警告に気づいたときにはもう遅かった。

ドカツ！

「かはっ！」

完全に無防備の背中に、ヒーナスの嘴がぶつかる。

だが、ミーナの警告のおかげで少しでも体を捻っていたため、その鋭利な嘴が刺さることは無かった。

しかし、刺さらなかったといっても嘴は鈍器のように固い。

思いつきり殴られたような衝撃と共に、ユフィーはヒーナスが現れたときにできた屋根の瓦礫に吹っ飛んでいった。

「ユフィー！」

未だに腰が抜けたままのミーナは、何とか体を這ったまま動かし、ユフィーの元へと移動する。

だが、吹き飛ばされたユフィーの意識は、既に闇に飲まれていた。

「……うう……」

うめき声と共に意識が覚醒する。

「……ここ、は……？」

あたしは確か、ヒーナスに吹き飛ばされて、そこから――。

目を覚ましたユフィーがいたのは、周囲に何も存在しない、暗く冷たい氷の世界。

前後左右、どこを見ても終わりの見えない氷の世界に、ユフィーはいた。

「…お主、力を欲するか？」

キヨロキヨロと辺りを見渡していると、急に声が聞こえてきた。

若く、ハキハキとした女性の声だが、どこか深い感覚のある声が響く。

「誰っ！」

「…お主、力を欲するか？」

出所の分からない声にユフィーは声を荒げるが、その女性の声はもう一度同じ質問を繰り返す。

「力？ 何の事を言ってるの？ いい加減姿を現しなさい！」

「…お主の中に眠る、冷やかでありながら荒れ狂う魔力。…妾はそれが欲しい」

「魔力？ 一体何の事を…」

「…妾の名前はアイシー。氷を統べる聖霊」

突然の自己紹介と共に、氷の世界に変化が起きる。

氷の世界に色がつき、形をなしていく。

そして、困惑するユフィーの目の前に現れたのは淡い水色のローブを着た、一人の女性だった。

「…あ、あんたが、聖霊…？」

「…さよう。妾たちはお主たち人が呼ぶ、魔法という名の力の管理者。そして、選定者」

「…選定者…。ふん、ならあたしはあんたのお眼鏡に叶ったと言うこと？」

突如告げられる言葉の数々にユフィーは困惑しながらも、気丈な態度を崩さなかった。

だが、その態度はすぐに崩れ去る事となる。

「…そして、これがお主の運命。抗う事のできない、運命…」

「っ！ あ、頭が…っ！」

アイシーがゆっくりと手を掲げる。

そして、掲げられた手と共に紡がれた言葉を聞いたとき、ユフィーの頭に激痛が走った。

激痛に苛まれる中、ユフィーの脳裏に現れたのは、先ほどまでいた

はずの壊れた民家の中の光景だった。

その妙に鮮明な映像には、床を這ったまま動くどこか虚ろな目をしたミーナの姿が映っている。

助けを求めるように伸ばされた右手には、血がついていた。

そして、その後ろにはユフィーを吹き飛ばし、意識を失わせたヒーナスの姿が。

ヒーナスは一声鳴いた後、這って移動を続けるミーナの足にその嘴を突きつけた。

映像からは音が入ってこないのか、ただ泣き叫ぶミーナの姿がユフィーの脳裏に焼き付いていく。

「…お主の友人は、今この場で命を失う。魂の輪廻に定められた、運命なのだ」

「…こ、こんな、事って…」

アイシーの言葉は最早耳には届いておらず、脳裏に焼き付いたミーナの絶望の顔がユフィーを苦しめていた。

下を向いて涙を流すユフィーに、アイシーは今までと変わらない口調で話しかける。

「…だが、救う手立てはある。そのために、お主をここに呼んだのだから」

「…え？」

信じられない言葉を聞いたように、ユフィーが涙に濡れた顔を驚愕の色に染めながらアイシーを見た。

「…力を欲せ。さすれば妾はお主の剣となり盾となる。だが、誓え。力には代償が付き物だ。それが大きかれ小さかれ、決して下を向くでない」

威厳のこもった声で、アイシーはユフィーの涙に濡れた顔を見つめる。

その言葉に、ユフィーは涙に濡れた顔をこすりながら、こう答えた。

「…力を、欲す…。欲しい…欲しいわ。…ミーナを救えるだけの力が！　そして誓うわ。下を向かず、前を見据えることを！」

顔をしっかりと上げ、きちんと立ち上がったユフィーの顔に、もう迷いは無かった。

「…よかろう。ならば使え、妾の力を。そして覚悟せよ。お主の目の前に広がる、絶望と希望の光と闇に…」

その言葉を聞いたとき、再びユフィーの意識は闇に飲まれていった。

ユフィーが目を覚ました時、一番初めに感じたのは、埃の匂いに混じった血の匂いだった。

「…ユフィー…よかった…。死んじゃったかと思ってたよ…」

そして、ユフィーの耳には力無いミーナの声が届いていた。

「っ！ ミーナ、足が！」

「…へへへ…食べられちゃったよ…。…あーあ、もう二度と歩けないのかなー…」

ユフィーが目にしたのは、ズタズタに引き千切られたミーナの両足だった。

脳裏に焼き付いていた光景が思い出され、その時のミーナの恐怖の表情を思い浮かべてしまう。

だが、ミーナはユフィーの心配とは裏腹に、薄く笑いながら今後の心配をしていた。

「バカ！ そんな事言ってるんじゃないの！ 早く止血を！」

「…もう、助からないよ…。ほら、あそこにいるもん…。助かりっこないよ…」

投げやりげみに言うミーナの言葉に、ユフィーは確信してしまった。

ミーナの命は守れても、ミーナの生きる気力は取り戻すことができないことに。

それほどまでに、ミーナの心は壊れてしまっていた。

「…この、バカ…。…なんで…結局、助けられないじゃない…」

ミーナの頭を抱きしめながら、嗚咽を漏らすユフィー。

そんなユフィーに、ミーナはただただ優しく微笑んでいた。

「…っ…掃除は、しないといけないわね…。…ミーナの分も…！」

涙をふき、すっと立ち上がったユフィーは、こちらを不思議そうに眺めているヒーナスを睨みつける。

そして、自らの中に眠る力を解放した。

パキパキパキパキ…

静かだが冷たく、それでいて固く荒れ狂う魔力が、ユフィーを中心として吹き荒れる。

そして、その魔力は床を徐々に凍らせていった。

「…あたしのせいで、ミーナは壊れた。…力もなにもないくせに、守ろうと思って前に出た。…だけど、それが間違いだったの」

ジワジワと周囲が氷の世界に変わっていく様を見ながら、ユフィーは淡々と語り出した。

自らの無力を嘆き、浅はかさを呪い、過ちを認める。

ユフィーが語る独白は、どこか影を帯びたものであり、そして断罪

のようでもあった。

「…だから、あたしは、強くなる…。…守れる力を手に入れて、もう二度と、同じ想いをしたくは無いから」

そのユフィーの決意とも断罪ともとれる言葉が終わった時、氷の世界が完成した。

瓦礫ごと凍らせたために、異常なまでに突起物の多い氷。

だが、その歪な氷の柱はユフィーにとって武器だった。

「…一応初めてだから、加減はできないわよ？ 覚悟しなさい」

その言葉と共に、歪な氷の柱が半ばからへし折れる。

そのまま重力に従って落ちると思われた氷の柱はふわふわと浮き、ユフィーの手元に移動した。

そして、そのふわふわと浮かぶ氷の柱をユフィーは手に取ると、そのままヒーナスに向かって投げた。

だが、相手は仮にも鳥の姿をしている化け物だ。

黒く染まった翼を大きく広げ、軽い突風を巻き起こしながら飛び上がる。

しかし、それこそがユフィーの狙いだった。

「氷の聖霊よ。我が求めに答え、力を与えよ。咎を受けるべき者に、

永遠の冷たき地獄を！ 『地獄の氷吐息』！」

ヘル・インプレス

狙いを定めるように手をヒーナスに向かって掲げ、聖霊と同調し力を発動させる鍵である魔導呪文を唱えるユフィー。

そして、その掲げられた手から現れたのは、真っ白な霧。

だが、その霧は触れた相手に地獄を与える地獄の氷吐息だった。

空気すらも凍らせながら進む霧に、ヒーナスは一声鳴いてようやく身を翻した。

「…無駄よ。この霧は絶対にあんたを捉え、そして凍らせる。生きたまま、一瞬でね」

頭を抱えながら、ユフィーは逃げ惑うヒーナスに向かってそう言った。

だが、逃げ惑うヒーナスは驚くべき行動に出る。

生き物としての生存欲求が働いたのか、それともこんな時でさえも食欲を優先するバカな者なのか。

どちらなのかは分からないが、倒れているミーナに向かって突撃してきたのだ。

しかし、ユフィーがそんな事を許すはずは無かった。

「…あんた、いい加減にしなさいよ…？ あんたはもう、ここで死ぬのよ…」

ガンッ

見えない壁に激突したかのように、大きな音を立てながら墜落するヒーナス。

そして、真っ白な霧に捕まってしまい、その体を氷へと変えた。

生きた氷の標本となったヒーナスを見つめながら、ユフィーはたいして表情を変えないままミーナの元へと向かう。

「ミーナ。もう、あいつはいないわ。…あたしが…倒したから」

倒すという言葉が出るのに時間がかかりながらも、倒れて目を閉じるミーナに語りかける。

だが、ミーナが起きることは無かった。

それもそうであろう。両足が千切れ、そこからかなりの出血があったのだ。

ショック死していてもおかしくない状況なのである。

「…ねえ…起きてよ…また、あんたの笑ってる顔を見せてよ…もう、殴らないから…」

嗚咽混じりにもう一度同じようにミーナの頭を抱きしめる。

ミーナは一瞬前に見せた薄く笑った表情のまま動かない。

完全に冷たくなってしまった友人の体を抱え、ユフィーは叫んだ。

「…っ…う…わあああああー！ー！！！」

思い切り泣いた。

周りの事など気にせず、ただ自らの感情のままに。

そして、これが彼女の断罪の旅の始まりだった。

激動の再会

シオンは、戦っていた。

空を飛び回り、急降下しながらこちらを襲うヒーナスを、寸での所で回避して双爪の一撃を加える。

そんなカウンターの行動を、シオンはずっと繰り返していた。

日頃行っていた武芸の鍛練のおかげで、動くことはできる。

だが、初めての実戦、初めての相手の命を奪うという行為は、シオンの心を蝕んでいた。

「…はっ！」

もう一度カウンターを加える。

そのカウンターを喰らったヒーナスは、力無く地上へと落下し、絶命した。

「…はあ…はあ…はあ…。…っこれでようやく十匹目…。…くそっ、後何匹いるんだ…！」

空を蔽う無数の魔物の影に、シオンは知らず知らずのうちに悪態をつく。

「…これじゃあジリ貧じゃな——」

ビシュン！

「うわっ！」

空を眺めていたシオンの目の前に、一本の矢が通過する。その矢は空気を切り裂きながら空の黒い点を射抜く。

その光景に、シオンは驚きながら落ちてくる死骸を避けた。

「…殿下！ 俺も加勢します！」

「トラヴァス！ 来てくれたんだね！」

死骸を避けていると、若い男の声がシオンへとかかる。

その声の主を認めたシオンは、声の主の名前を呼びながら手を振った。

真紅の髪をまっすぐ腰まで伸ばした、中世的な雰囲気醸し出す少年。

シオンとたいして年齢は変わらないようで、敬語と普通の言葉が入り混じってしまっている。

「ええ。クルト様から言われ、馳せ参じました。トラヴァス・サーヴィー、只今より殿下の援護を行います」

手に持った長弓『シェインゲリタ』をシオンの前に差し出しながら、臣下の例をとる。

だが、その姿にシオンは軽く吹き出した。

「ぷっ…。やっぱり、トラヴァスはそういうの似合わないよ。それに…そんな畏まってる女の子に見えちゃうよ？」

「な！？ お、俺は男です！ 殿下は知ってるでしょ！ 俺が女に間違えられるのが嫌いだって事ぐらい！」

禁句である台詞を言われ、絶対服従の関係を忘れて捲し立てるトラヴァス。

しかし、シオンは怒られながらも、その笑いの姿勢を崩さなかった。

「…うんうん。やっぱりこうじゃないとね。せつかくの同い年なんだからさ、もっと気楽にいこうよ」

「で、ですが…」

「それに、今はこんな話をしてる場合じゃないみたいだよ？」

意見を言おうとするトラヴァスを手で制し、シオンは頭上で鳴き声の大合唱をしているヒーナスを指差す。

その指先にあるものを見たトラヴァスは、やれやれと言った様子で首を振った。

「…そうですね。この突然の来賓にはご退場願いましうか。エルブレイアの方は、他の騎士団以下、参謀長たちが頑張ってくれてい
るみたいなんで」

「そっか。なら、父上とりサーナさんもそこに？」

「ええ。その通りです、よ！」

シオンの疑問に答えながら、トラヴァスはシェインゲリタの弓を引き絞る。

三発続けて放たれた矢は、正確に三匹の獲物の胸を貫いた。

「…やっぱり、トラヴァスの弓はすごいね…。これは、僕も頑張らないと……ん？」

自らも、両手につけたカテドラルの自由可動する爪を動かしながら、ヒーナスを睨みつける。

だが、シオンの耳には聞き捨てならない声が飛び込んできていた。

「…これは、声？ …いや、叫び声…どっちにしても、行ってみないと…！」

「殿下！？ …どこに行かれるんですか！」

「声が聞こえたんだ！ …まだ生きている人がいるかもしれない！」

トラヴァスの心配する声にそれだけ返すと、シオンは走り出した。

シオンは確かに聞いたのだ。

慟哭の声を。

「……うう…」

ユフィーは未だにミーナの体を抱きしめながら泣いていた。

もう動くことは無いと分かっているのに、体を離すことができなかった。

ただ、そこにあっただはずの命の名残りを惜しむように、ただ泣いていた。

ガシャン！

だが、その空間の中に入ってくる音と、人の気配がユフィーを刺激した。

「…っ！」

弾かれるようにその音がした方向から遠ざかり、ミーナの遺体を自らの背中に隠す。

もう二度と、誰にも触れられないようにと。

しかし、そのユフィーの懸念とは裏腹に、かけられた声は必死なものだった。

「——大丈夫！？ 結構大きな声が聞こえたんだけど……いてっ

「！」

凍った床に足をとられ、ツルツと言う音を出しながら転けてしまう少年。

ぶつけた腕や足を擦りながら立ち上がると、その少年は苦笑いになりながらも一度繰り返した。

「ははは…なんか格好つかないね…。で、大丈夫？」

「……………」

心配そうに問いかける少年だったが、ユフィーはその人物に驚いて声が出せないでいた。

だが、少年はそんなユフィーの驚きに気づいていないのか、よく分からないという顔をしている。

「？ ……あ、そういえば君って、あの時の女の子？」

「…シオン・セナ・ファルカス……………なんで……………」

噛み合っているようで噛み合っていない不思議な言葉を、二人の若者は発した。

「……………」

シオンは戸惑っていた。

目の前で泣いていた少女が、自分の顔を見た瞬間、突然顔を真っ赤にさせてしまったことにだ。

さらには、そこからもう一回泣き出してしまう始末で、シオンはどうしていいか分からなかった。

「…えーっと、とりあえず泣き止んでくれると…」

「…やっと、会えた…」

「へ？」

自らの言葉に、泣いていた少女がいきなり被せてきたことに、シオンは間抜けな声を出してしまう。

だが、少女はそんな事は気にせずに言葉を続ける。

「…あの時のお礼が、やっと言える」

「あの時？　　もしや、君ってシーファスさん？」

「そうよ。でも、名前でいいって言わなかった？」

若干こめかみを震わせながら凄む少女。

その迫力に、シオンは顔を引きつらせながら答えた。

「あーっと、じゃあ、ユフェルニカさん？」

「…ユフィー…」

「え？」

「ユフィーでいいって言ったの。あたしの名前は長いから」

あ、この子はあまり慣れてないんだな。と意味の分からない解釈を心の中でしながら、ユフィーの赤く染まった頬を無視した。

ユフィーの心中としては、そんな事では全然無いのだがシオンが分かるはずもなかった。

「じゃあ、ユフィーさ…」

「ユフィー」

「……じゃあ、ユフィーで。僕の名前は知ってるよね？ さっきもフルネームで言われたし…。ま、シオンって呼んでよ」

「いいの？ 今日は戴冠式のはずで、王になったんだったらそんな口の利き方ではいけないんじゃないかって？」

当然の疑念を口にするユフィー。

王様の名前を呼び捨てで呼ぶ民衆。確かに示しはつかなくなるだろう。

だが、ユフィーの疑念をシオンは笑いながら返した。

「いいんだよ。だって、堅苦しいのは嫌だし、それに同年代の友達ってなかなかできないんだよね。王族ってさ」

シオンから出た思わぬ答えに、ユフィーはただ苦笑するしかなかった。

だが、次にシオンが発した言葉にユフィーの笑顔は文字通り凍りついた。

「で、さ。つかぬ事を聞くけど、ユフィーの後ろにいるのって…ルナーシアさん？」

「っ！ そう、よ。…あそこにいるのはミーナ。でも、もう動かない…。…助けられなかったの…」

消え入りそうな声でそう答えるユフィー。

その壊れてしまいそうな雰囲気にはシオンはどうすることもできず、ただ謝るしかなかった。

「…ごめん。そんな事があったなんて…」

「いいの。私が弱かったからよ。…心も、力も、何もなかったのに…」

「力…？ 君には力があるじゃないか」

「無いわよ！ この力でさえも、守ることができなかった！ 魔物一匹殺すのは造作もないのに、友達一人も守れない力なんていらない！」

拳を握り締めながら悲痛の声をあげるユフィー。

何もできない力なんていない。守りたいものを守れない力なんていない。殺すだけの力なんていない。

そう強く願うユフィー。だが、その願いは願えば願うほど彼女を縛る鎖になる。

その証拠に、ユフィーの長い爪が手に刺さり、手からはだらだらと真紅の血が流れ始めていた。

だが、その手をシオンは何も言わずに手に取った。

そして、その手を優しく握りながら言う。

「…なら、強くなろうよ。守りたいものを守るように。僕も、守られるだけの関係は嫌なんだ。守りたいものを、僕自身の手で守りたい。だから僕は、強くなる」

固く握り締められた拳を解くように、一本一本指を外していくシオン。

そして、自らの服を千切り——戴冠式用の服は重いからと言って脱ぎ捨てている——ユフィーの手に巻きつけた。

「ユフィーたちと出会ったあの時、僕は何もできなかった。その時に思ったんだ。王様になるのなんか嫌だったけど、それが守ることになるのならいいかって」

「……………」

簡易的な治療を終えた手を胸の所に持ってきたユフィーは、ただ無言でシオンの話を聞いていた。

恥ずかしそうに頬を掻きながら、シオンは言葉を続ける。

「だから僕は強くなる。この手で全てを守れるようになって傲慢なつもりは無いけど、それでも願わずにはいられないんだ」

ユフィーとは正反対の願い。

力が欲しい。だけど、それは大切なものを守れるようになりたいから。

同じなようで違う願いは、両者の決意の質を示していた。

ただ、守りたいがために力を欲す。シオンにとってはそれだけだった。

その言葉を受けたユフィーは、ただ静かに涙を流した。

「…強いわね…あんたはとても…」

「強くなれないさ。ただ、ようやく守りたいものができた。それだけだよ」

そう決意の理由を語るシオンの顔は、優しく微笑んでいた。

「…そう…。…なら、その守りたいものにあたしも入れてくれる？」

「もちろん」

俯きながら出たユフィーのその言葉に、シオンは自信を持って即答した。

そしてこれが、ユフィーにとっては憧れの少年との出会いであり、シオンにとっては覚悟を与えてくれた少女との再会だった。

旅立ち

再会を果たした二人は、民家の外へと繰り出していた。

ミーナの遺体は民家の中にあつた布で包み、ユフィーの水で氷漬けにした。火葬ならぬ氷葬である。

その際、ユフィーはミーナの着ていた服を千切り、新たな髪止めと
してきつく結び止めていた。

今回起こったことを、忘れないために。自らの、決意と共に。

「…なによ…この魔物の量は…」

「…ははは…やっぱりそう思うよねー…」

空を覆い尽くさんばかりのヒーナスの量に、ユフィーは信じられな
いといった顔をする。

その反応を予想していたのか、乾いた笑い声をあげるシオン。

だが、すぐに自らの武器を構えて戦闘の準備を行う。

「行こう、ユフィー。トラヴァスがまだ戦ってるはずだから、とり
あえずそこで合流しよう」

「トラヴァス？ 誰よそれ？」

「騎士団にいる人だよ。弓の腕がすごいんだ」

賛辞の言葉を述べながら、シオンは目的の場所へと走り出した。

ビシュンッ

一本の矢が空を切り裂く音と共に飛ぶ。

狙い変わらず、矢はヒーナスの胴体に刺さりその体を地面へと落下させる。

その様を見て、真紅の髪を持った少年、トラヴァスはため息を吐いた。

「はあ…これじゃ、いつまで経っても終わんねー、よ！」

愚痴を零してはいるが、その動きを休めることはない。

帝国を守る者としての責務。ただそれだけが彼の原動力だった。

だが、そんな彼の後ろから、待ち望んでいた声が上がる。

「トラヴァス！ 加勢に来たよ！」

「シオン殿下！？ 助かります！」

現れたのは、落下しながら襲ってくるヒーナスを両手の双爪で叩き

落としているシオンだった。

その後ろには、そのシオンに守られるような形で走っているユフィーがいる。

「もう一人いるから！　ね、ユフィー！」

「…そんな期待の目で見られても困るんだけど」

無事合流を果たしたシオンは、後ろにいるユフィーに振り返ってそう言う。

声をかけられたユフィーは、口から出た言葉とは裏腹に少し嬉しそうな表情をしていた。

そして、そのまま自らの魔力を練り上げていく。

ピキピキピキピキ…

その練り上げていく過程の副産物なのか、ユフィーの周囲の大気が凍り始める。

「げ！　で、殿下！　離れていないと俺たちも凍りますよ！？」

普通では滅多に見る事のできない現象に、トラヴァスは焦りだす。

だが、その騎士団の少年とは裏腹にシオンはいたって冷静だった。

「大丈夫だよ。ね、ユフィー」

落ち着いた表情で言うシオンだったが、間髪入れずに返ってきたユフィーの言葉に、その表情は崩れ去った。

「無理よ！ 今だって完全に手探りのの！ まだ完全にコントロールできないんだから！」

「…え…」

「凍てつく世界に住まう、唯一の絶対者。氷の女王よ、我が呼びかけに答え、その冷たき体で我が脅威を抱け！ 『氷の抱擁』^{インプレス・フリーズ}！」

「うわあああ！！！」

焦った声から出たのは、魔法発動の呪文。

その呪文によって制御されたユフィーの膨大な魔力は、辺り一面を巻き込む巨大な吹雪となった。

そして、荒れ狂う吹雪は空へと舞い上がり、一面を蔽っていた黒色と激突した。

「…あれ…生きてる…」

不格好ながらも頭を抱えて伏せていたシオンは、自らの体が無事であることを確認すると安堵の息を吐いた。

だが、急激に下がった気温に体を震わせた。

「さむっ…！ どうなった…の？」

体を震わせながら起き上がったシオンは、目の前に広がっている一面の銀世界を見て言葉を失った。

先程までの現状からは想像できない、真っ青な空。地面に転がる、無数の氷塊。その中に佇むユフィー。

そして、極めつけは見渡す限りの白色だった。

その異質な光景にシオンが言葉を失っていると、どこからか出てきたトラヴァスが声をかけてくる。

「…殿下、ご無事で？」

「…う、うん…。…でも、すごい…これが、魔法…」

「俺もここまでの物は初めて見ましたよ。騎士団の中でも少ないですからね、『魔導師』は」

「確かにそうだね。『聖霊の力を借り、己が魔力を持って森羅万象の断りを崩す者』か…」

シオンは、これまで読んだ書物の中に書かれていた言葉を思い出す。

魔法を発動させる条件は大きく二つある。

魔力を持っていること。聖霊に魅入られることの二つだ。

魔力を持つということは種族上の関係もあるので、一概には簡単とは言えないが、それでも難しいのが聖霊に魅入られることである。

どこにいるのかも定かではない聖霊に出会い、尚且つ気まぐれな聖霊のお眼鏡に叶わなければならないのだ。

聖霊の力を借りない状態で魔法を発動させることも可能だが、それには尋常では無い精神力が要求される。

そのため、実質上聖霊の助力無しには人は魔法を扱うことができないのである。

「…大丈夫だった？」

いつの間にか二人の元に歩いて来ていたユフィーが、申し訳ないと言うような顔で声をかけてきていた。

「…うん。なんとかね」

「…そう。それならよかった。…まだ制御しきれないのよ、これ」

手を前に突き出しながら、再度魔力を練るユフィー。

その魔力の流れに従うように、手の周りの空気が凍っていく。

そして、その事を確認したユフィーは手をプラプラと振る。

すると、凍っていた空気が嘘のように晴れ、元に戻った。

「…すごいな。やはり、魔法を使う者には勝てる気はしないな」

「……なに？」

トラヴァスの口からこぼれ出た賛辞の言葉に、ユフィーは冷たく言葉を発しながら眉をひそめる。

その反応の意図を悟ったトラヴァスは、ただ肩を竦めるだけだった。

「…まあまあ。…でも、ここらにいる魔物は全部片付いたのかな？」

その重くなってしまった空気を払拭しようと、シオンが手と声をあげる。

その言葉通り、周囲には魔物の気配は無かった。人の気配もだが。

「そうですね。俺もたいがいは堕としましたが、ほとんどはこの人がやりましたからね」

「……ふん」

トラヴァスのどこが気に入らないのか、ユフィーは彼を視界に入れないように体の向きごとそっぽを向いてしまった。

「…殿下。俺、何かしました？」

「…ユフィーはこう言う子なんだよ。我慢我慢」

小声でそういうトラヴァスに、シオンもそれに習うように小声で返す。

そんな男二人がひそひそ話をしているとき、街の外側から魔物の声が聞こえてきた。

「ギャアアア…」

「！ この声はエルブレイア？」

「…そのようですね。それに、この声は断末魔です。多分、やったんでしょう」

突然響いた鳴き声にシオンは慌てるが、トラヴァスは冷静にその声を聞き分ける。

そして、城門側にいる仲間を思って安堵の言葉を零した。

「じゃあ、僕等は王宮に向かおう。そこで皆と合流だ」

「分かりました。なら、俺は先に向かいますので」

「うん。おい、ユフィー！」

今後の方針を話し合った後、トラヴァスと別れたシオンは、いつの間にか遠くに歩きだしていたユフィーに声をかける。

「…ん？ あいつは行ったの？」

「あいつ？ ああ、トラヴァスカ。うん、行ったよ？ そして、僕等も移動しよう。王宮にね」

「そう。でも、少しだけ待ってくれない？ …少し、したいことがあるの」

「？」

シオンに了承を求めると、ユフィーは地面へと跪き手を組んで礼を行う。

その意図を理解したシオンは、自らも同じ行動を取った。

「…ミーナ。…あたしは、強くなるわ。もう二度と同じ経験はしたくないから。…だから、見ててね…あたしが強くなる所を…」

そう決意の言葉を口にするユフィー。

その言葉と顔を見て、シオンも新たに決意を固めるのだった。

「……ねえ…あたし、場違いじゃない？」

緊張のためか、体を小刻みに震わせるユフィー。

隣の豪勢な椅子に普通に座っているシオンに、そう頼り無さげな声でユフィーは助けを求めている。

「大丈夫だよ。僕の友達って事でさ」

「そんな簡単に言わないでよ！」

ちなみにこのやりとりはかなりの小声で行われている。

なぜなら、二人がいるのは王宮の中にある謁見の間だからだ。

蒼を基調とした色使いの豪勢な家具に、高そうなランプの数々。

辺境の小さな村に住むユフィーにとっては、ありえない世界だった。

ギギィ…

「…ひゃっ…」

突然響いた扉の開く音に、緊張のピークを向かえているユフィーは変な声をあげてしまう。

その姿を見たシオンが笑いを堪えていると、開かれた扉から入ってくる人の影があった。

「シオンよ。よく生き残ったな」

現れたのは、クルト以下数名の忠臣達だった。

その中にはなぜかリサーナの姿もあり、シオンはその面々に似合わないメイド姿に驚いていた。

「ええ。でも、トラヴァスが来てくれて助かりましたよ。それに、ユフィーもいましたし」

「ほう？ 隣にいる者か？」

クルトの言葉に立ち上がりながら、シオンは淡々とだが、しかし少し嬉しそうに答える。

そして、その気分のまま隣に座るユフィーを示した。

その息子の言葉に、クルトは若干眉をひそめながらもその方向を向く。

「は、初めまして！ ユ、ユフェルニカ・シーファスです！」

言葉をつまらせながらも、何とか自分の名前を名乗ることに成功したユフィー。

すぐさま立ち上がって、綺麗なお辞儀を決める彼女の姿は、普段のユフィーを知る者にとってはかなり新鮮なものであった。

まあ、自国の王様に対して敬語も何もないのはおかしい話であるのだが。

「シーファス殿か。此度は王子と共に魔物の撃退に尽力してくれたこと礼を言う」

だが、クルトにとってはその慌てぶりを見るのは慣れているのか、至って平静に言葉を返す。

しかし、ユフィーにとってはクルトの告げた礼の言葉がいけなかったであろう。

あたふたと手を振りながら、再び慌てだしてしまった。

「い、いえいえいえ！ そ、そんな礼を言われるようなことなんかにしてないですよ！ …あ、あははは！」

どこか気でも狂ったのか、なぜかそんな高笑いを始めてしまうユフイー。

これにはクルトも驚いたようで、他の者共々固まってしまった。

「…と、とりあえずユフイーはこのままで放っておいて。…ゴホン。父上、お話があります」

隣にいたシオンも半ば慌てていたが、胸の中にしまっていた疑念をぶつける事にした。

「なんだ？ 話してみろ」

「今回の魔物の襲撃…王国側で報告された襲撃事件と似ていませんか？」

「…ふむ。なぜそう思うのだ？」

シオンの切り出した話題に、クルトは記憶を探るように顔をしかめた後、シオンの言葉の続きを待った。

「僕はエルブレイアと戦っていないから分かりませんが、ヒーナスの方なら分かります。普通なら、共食いを初めてもおかしくないほどの量です。ですが、それをしている所は一度も見ませんでした」

そう深刻な表情で言うシオン。

本来、魔物は群れて行動することはない。それは利害の一致があったとしてもだ。

群れたとしても同族でのみ。それ以外は食料としか見えていないのが魔物なのである。

そして、空腹の限界にきた魔物は、たとえそれが何であろうと食する。それが同族でも。

だからこそシオンは疑問に思ったのだ。堕ちていた死骸は、全て武器屋魔法による傷しかついていないことを。

「：確かにそうであるな。エルブレイアに関しては単独行動であったため、断言は出来ぬが：」

先程の戦闘を思い出しながらクルトは悩み出してしまう。

だが、その後ろから小さく手を挙げる者の姿があった。

「：あのー、少しよろしいでしょうか？」

「ん？ 何だリサーナ、申してみよ」

「はい。私はシオン殿下の言う通りだと思っています。私のスタイルは基本的に遊撃なので、ヒーナスとエルブレイアの動向に疑問を思っていたんです」

「疑問？ 何かあったの？ リサーナさん」

クルトの許可を得たりリサーナは、恐縮ですというような風に遠慮がちに発言する。

だが、その発言された言葉に興味を持ったシオンは、さらに発言を

促していく。

「まず、ヒーナスはエルブレイアのお零れを貰うために行動していたはずです。ですが、そんな素振りは一切見せずに我々を共に攻撃してきました。…息が合っているかのように」

「まさか！ そんなことがある訳ねえだろう！」

「ですが、それしか考えられません！ そうでもなければ、このシンセミアの街にこうも易々と踏み入られるなど…！」

リサーナの分析した発言に、今まで静かにしていたブレイクがガラの悪い声をあげる。

だが、リサーナはその声に屈することなく自らの意見を主張した。

「ええい！ 私たちがここで悩んでいても意味があるまい！ 民たちの避難は大丈夫なんだろうな？」

「…はっ！ 既に近隣の村や街に避難しております。連絡も取れており……」

クルトの苛立ちのこもった声に、リサーナとブレイクはバツが悪そうに黙ってしまう。

その間に、後ろに控えていた忠臣から報告がなされていく。

伝えられた報告には悲惨な物も混じっていたが、民たちが無事という報告を聞いてクルトは安堵していた。

だが、今まで何かを決めかねるように思案していたシオンが、唐突に顔をあげてこう言った。

「父上、皆、僕の話聞いてほしい。…僕は、王国に向かってみようと思うんだ」

「な！ 正気ですか殿下！」

「僕は正気だよ、リサーナさん。父上、いいですか？」

唐突なシオンの発言に、リサーナは声を荒げてしまう。

そんなお抱えのメイドの姿に、シオンはごくごく普通に言葉を返し、クルトに答えを求めた。

「…理由を、聞いておこうか」

クルトは数瞬悩んだ後、そう切り出した。

「まずは情報収集です。王国側の事件と照らし合わせることで、何かが見えてくるかもしれません。そして、王国王家に協力を申し込めます。もう一度こんな事があったとき、どうあっても一国の力じゃ足りませんから」

真剣な表情で告げるシオン。

その決断と意志のこもった目に、クルトは何度目かの衝撃を覚えていた。

「（…ふ…恐ろしいものだな。成長という物は…）…よかろう。だ

が、お前一人で行くというのか？」

「いえ、ユフィーも一緒に」

「ひゃう！ え、あ、あたしも！？」

「うん。だって、魔法が扱える人材なんて、そうそういないからね！」

急に話題に出されたユフィーは、変な声をあげながらひどく狼狽してしまう。

だが、シオンは満面の笑みでユフィーを見ながら言い切ってしまった。

「…ふむ。シーファス殿は魔導師であったか。ならば任せられるな」
クルトも顎に手を当てながら、感心するようにうんうんと頷いてユフィーの同行を許可してしまう。

「え、いや、ちょっと！ あ、あたしなんてまだ魔法使えるようになったばかりなんだからね！ それに、今さっきの奴でも——」

「ほう。ならば…リサーナ！ シーファス殿にアレを！」

「はっ！」

ひどく狼狽したまま、ユフィーは自分自身の状況を説明しようと喋り始める。

だが、クルトはそんなことはお構い無しにリサーナに指示を飛ばす。その指示を受けたりサーナは、軽く一礼した後部屋から飛び出して行った。

「お持ちして参りました」

「「はやっ！」」

部屋から出てそんなに時間が経っていないというのに、リサーナが大きな布に包まれたものを持って返ってきたことに、シオンとユフィーは同時に突っ込んでしまう。

リサーナはその手に抱えたものをクルトに渡すと、礼をして後ろに控えた。

「魔導師であるなら、媒介の杖は必要であろう。これを持っていくがいい」

布を剥がした先に現れたのは、ゴツゴツとした印象を受ける長杖だった。

宝玉が幾つも散りばめられ、その一つ一つの宝玉が鈍く輝く杖を、クルトはユフィーに向かって差し出した。

「名を『スターレイン』という。いつまでも肥やしにしておくのは勿体ないのでな。受け取ってくれ」

「『スターレイン』……」

ユフィーは差し出された杖を手取る。

意外なことにユフィーの身長にじっくりとくる杖の長さに、ユフィーは驚きながらもその感触を確かめていく。

ほんの悪戯心だったのだろう。その杖に対してユフィーは魔力を込めた。

シオン…

「キャッ！」

「うわっ、綺麗な宝玉になった！」

その魔力が宝玉に吸い込まれ、宝玉の鈍い輝きが薄い水色の輝きに変わる。

突然の出来事に、シオンはただ単に驚きの声をあげたが、ユフィーの方は面白いぐらいに驚いていた。

「その杖は所持者の魔力を封入し、魔法の発動を早めることができる」と聞いたことがある。今の輝きは、それがなされた証だろう」

その現象を冷静に分析するクルト。

はっきり言って、ユフィーにはそんな言葉は聞こえてはいなかったのだが、ユフィーはクルトに向かって笑いながらこう言った。

「…気に入った。気に入ったわ。…これ、貰ってもいいんですよね？」

「もちろんだ」

「…なら、ユフィーの武器も手に入っただし、早速行こうか！」

満足そうに頷いたクルトを見て、ユフィーはスターレインを背中に抱える。

それを見たシオンは、早々と部屋を後にしようとする。

「待たんか。せめて今日の疲れを癒し、明日にでも出発しろ。その間に、私が信書を書いてやる」

「信書…：そうですね、分かりました。なら明朝、僕等は王国に向かって出発します」

「うむ」

クルトはそれだけを答えて、部屋を後にする。

他の忠臣たちもそれに習い、そろそろと部屋から出て行く。

そして、部屋に残ったのはシオンとユフィーとリサーナだった。

「ふう…。じゃあ、僕等も明日に向けて休もうか。リサーナさん、ユフィーに部屋を用意してあげて」

「はい、分かりました。では、どうぞこちらへ」

「…シオン！」

リサーナにユフィーのことを頼むと、シオンは部屋から出て行くこうとする。

だが、ユフィーは歩き出しているシオンを呼び止めた。

「ん？　なに、ユフィー？」

「あの、えつと……ありがとね」

顔を真っ赤にしながら、消え入りそうな声でお礼の言葉を言ったユフィー。

そんなユフィーに、シオンは苦笑しながらこう返した。

「…どういたしまして。じゃ、また明日」

そう言って、シオンは自分の部屋へ向かって行った。

チュンチュンチュン…

いつもと変わらない、鳥の鳴き声が響く静かな朝。

だが、周りには以前崩れた瓦礫と、魔物の亡骸が残っていた。

そんな朝の空気の中、ユフィーは案内された部屋につけられた鏡を見ていた。

いつもと違う、金色の髪を下ろした状態で鏡をまっすぐ見つめている。

「……………」

そして、無言のままに髪を結っていく。

左には黒い色のいつものリボン。右には――

「…ミーナ…。…あたし、頑張るね」

青緑色のリボン。

固く結ばれた決意のリボンは、ユフィーの心を表していた。

「…よしっ！　行きましょうか！」

頬を両手でパシリと叩くと、後ろの壁に立てかけてあったスターレインを手取る。

そして、もう一度鏡を一瞥した後、ユフィーは部屋の扉を開けた。

「よし。行こうか、ユフィー」

「ええ。行きましょう」

シオンとユフィーの二人は城門の前に来ていた。

シオンは腰にカテドラルを吊り、ユフィーは背中にスターレインを背負っている。

そして、その二人の前にはクルトとリサーナ、トラヴァスまでもがいた。

「…リサーナさんとトラヴァスは分かるんだけど、どうして父上までここに？」

王であるクルトが、こんな時に出てきていいわけではない。

クルトとしては、ただ単に息子を見送りたかっただけだったが、シオンはその意図に気づかなかった。

だからこそ、クルトは無言で一步前に進み、シオンにあるものを手渡した。

「…これは？」

シオンに手渡されたのは、質素な銀色のネックレス。

丸形のプレートに十字架が彫られた、何の変哲もないネックレスだ。

「これは『時の証』エヴィデンス・クロックという。帝国王家に伝わる秘宝だ。お前を守ってくれるだろう」

「『時の証』…。ありがとうございます」

シオンは時の証を首にかけると、クルトに向かって礼を言った。

その礼をクルトは再び無言で受けると、後へと下がった。

「じゃあ、行ってくるね。リサーナさん、トラヴァス、父上」

「はい。お帰りをお待ちしております」

「頑張ってください。俺も待ってますから」

リサーナとトラヴァスは、それぞれの言葉でシオンたちを送り出す。

そして、その言葉を背にシオンとユフィーは歩き出した。

この旅が、自らのためになるものだ信じて。

それぞれの揺るがぬ決意を持って、二人の若者は歩き出したのだ。

旅路

まだ日が高い、そんな時間帯のとあるフォーゲルノート帝国の街で、真っ黒なローブに身を包んだ人が歩いていた。

その足取りは遅く、殆どの者が避けて抜き去っていく。

ローブを頭の先まで被っているため、まったく身なりが分からない。性別すらも分からぬ人影は、そのゆっくりとした足取りのまま、薄暗い路地へと入った。

「…首尾はどうだ？」

人影が入った路地に、暗く重い、そんな印象を与える声が響いた。

突然響いた言葉に、人影は特に驚く様子も見せずにこう言った。

「…問題ありません。今すぐにも決行できます」

「…そうか。…なら、貴様はこのまま待機している。動いてもいいが、見つかるな」

「…了解しました」

それだけを言うと、路地の中を支配していた重苦しい空気が霧散する。

そして、そう呟くように言った人影は、またその重い足取りで歩き出す。

しかし、その人影が数歩歩いたとき、その人影は元からそこにいなかったかのように消え去ってしまった。

朝の光に照らされた朝露の輝く森の中を、シオンとユフィーは歩いていた。

二人共あまり会話が無く歩いているが、これは専らユフィーのせいであった。

パキン！

パリパリパリ…

バリイン！

「…ちよつとユフィー。音だけ聞くとすんごく何やってるか分からないよ」

「仕方ないでしょ。これの使い方を覚えなさいいけないんだし」

隣から聞こえてくる不吉な音の連鎖に、たまらずシオンは内心ビクビクしながら声をあげる。

だが、ユフィーは手に持つスターレインを示すと、再び魔力を練り

上げていく。

ユフィーが行っているのは、自らの魔力の制御と杖の効果を見極める行為だ。

戦っている最中に突然ぶっ倒れても、誰も助けてくれはしない。

まあ、お人好しのシオンならば助けるかもしれないが、あまり褒められたことではないからだ。

それに加え、スターレインについている宝玉は魔力を内包できる能力がある。

この能力を見極めるために、ユフィーは少しずつ魔力を流しているのだ。

ちなみに、今の宝玉の色は全て淡い水色に光輝いていた。

「うん。それは分かってるんだけどね？　…こう…何て言うかさ…」

「なによ。はっきり言いなさいよ」

歯切れの悪いシオンの台詞に、ユフィーは苛立ちを隠せない。

そこでシオンは、渋々と言った様子で周りの惨状を示した。

「…これはちょっと、やりすぎなんじゃないかなー…って僕は思うんだけど」

シオンの周りには、氷漬けにされた魔物や、木々の数々が広がって

いた。

周囲の気温もそれに従って下がっており、シオンは着ていたコートを深く着直している。

「あら、いいじゃない。魔物に関しては、未曾有の悲劇を防げただて事で」

寒そうにしているシオンを尻目に、ユフィーはまったく寒そうにしていなかった。

シオンより、かなりの薄着に見えるはずなのだが。

「未曾有って何さ……。でも、魔物の量が多いことは確かだよね」

「ええ。馬引きもないから、多分魔物が多いせいなんじゃないかしら」

馬引きというのは、この世界での長距離の移動手段である。

馬が数十頭集まって、一般的な大きさの民家を引っ張るのである。その民家の中に人々を収容し、目的地まで運ぶのが馬引きの仕事なのだ。

街の外に出ると必ず見かける馬引きがないと言うことは、魔物の量が多く運行ルートが取れないという事と、天候状況の二つがあげられる。

そして、今の状況としては魔物が多いせいだろうと思っている二人なのであった。

「でもまあ、そのせいで歩いてるんだけどね。僕達は」

「…それを言わないでよ」

「…方向さえ間違わなければ、三日後には多分大陸の端に着いてるよ？」

「…三日、ね。…三日」

「…うん、三日…」

「「…はあ…」」

道のりがまだまだ長いことに、二人は同時に大きなため息を吐く。

だが、今の二人の状況では、ゆっくりと落ち込んでいる暇など無かった。

ガサガサガサ…

「方向を間違わなければ三日よね…？」

「…確かにそう言ったけど？」

「…魔物に襲われてたら三日以上かかるんじゃないの？」

「あ。…確かにそうだね」

「グルルル…」

二人がそんな会話を交わしていると、ユフィーの心配通りの事が起こった。

とは言っても、まだ凍らせていない茂みが不自然に動いたことを見ていたからなのだが。

「あの長い爪は『クローウルフ』ね。いい感じに食料になりそうよ？」

「え？ 食べれるの？」

「当たり前じゃない。ちよつと臭みはあるけど、きちんと焼けば食べれるわ」

「へえ、そうなんだ」

思わぬ所で聞けた食事情報に、シオンは感嘆の息を漏らす。

そんな二人の会話など理解もできないクローウルフは、自慢の長い爪を剥き出しにしながら跳びかかってきた。

シオンは、その跳びかかりを真っ向からカテドラルで受け止め、器用にクローウルフを打ち上げる。

そして、完全無防備になったクローウルフの腹を貫いた。

「…やるわね」

その技を見ていたユフィーは、少し悔しそうな表情で呟く。

普通、刃物で何かを受け止めるのは尋常では無い技量と精神力がいる。

刃物によって対象が切れるか、刃物が刃毀れするからだ。

その心配を微塵も感じさせないシオンの動きが、ユフィーは面白くなかったのである。

「はい。どうするのこいつ？ どこか食べられない所とかってあるの？」

突き刺さっていたクロールウルフの死体をカテドラルから引き抜き、足を持った状態でユフィーにそう聞くシオン。

ユフィーはそのクロールウルフの死体を見ながら、状況を冷静に分析していく。

「そうね。とりあえずは皮を剥いで、内臓を全部取り出す。爪に関しては、あたしたちの村では調度品になっていたんだけど、今は必要ないわね」

指で状況を指差しながら、ユフィーは的確に指示していく。

その様を見て、シオンは再び感嘆の息を吐いた。

「へえー。僕はこんなの見たこと無いから、よく分かんないや」

「それはそうでしょう。あなたは王子なのよ？ こんな事知ってる方がおかしいわ。普通、きちんと料理された物が出てくるんだから

ね」

少しばかりの皮肉を込めながら、ユフィーはシオンに向かって言い放つ。

そのものズバリなユフィーの言葉に、シオンはぐうの音も出なかった。

「ま、後はこれを焼くだけだから簡単なんだけれどね」

「あ、そうなんだ。じゃあ、僕は薪でも集めに……」

そこまで言って、シオンは綺麗に固まってしまった。

振り返る所は振り返り、振り返っていない所は振り返っていない。

そんな奇妙な体の向きのままで。

「なに？ どうしたの？」

そんな奇妙な形に固まったシオンを訝しみながら、ユフィーはとりあえず質問をする。

その質問に、シオンは呆れたような声を出しながらこう言った。

「…木とか葉っぱとか、全部凍ってるんだけど」

「……………／／／」

そう。ほとんどの木々は、ユフィーの実験のために凍らされてしま

っていたのだ。

その事に気づいたユフィーは、顔を真っ赤にしながら下を向いてしまふ。

「…ま、少しだけ歩こうか。後には戻れないけど、先に行けばあるはずだからさ」

「…ええ。そうしましょうか」

顔が真っ赤のままだが、ユフィーは前を進むシオンの後を追いかけて行った。

ド天然

ぐぎゅるるるる…

「はうう…」

盛大な腹の音が、森の中に響く。

小刻みに鳴る腹の音に、その腹の持ち主はお腹を押さえながらとぼとぼと歩く。

「…お腹空きましたあ………」

お腹を押さえながら嘆く声の発信源は少女。

白銀の髪を頭の後ろで一つに纏めた、真剣さがうかがえる青い瞳を持った少女である。

そして、その腰には少々不釣り合いな長剣が吊るされており、ガシヤガシヤと音を立てていた。

そんな少女が、羞恥に顔を赤く染めながら森の中を彷徨い歩く。

「…ううー…ここはどこなんですかー…」

さらには、完全な迷子になってしまっているようである。

決して暗くはないが、人里離れた雰囲気のある森の中に少女が一人。

かなり危ない状況である。

だが、この少女はそんなことが微塵も頭の中に無いのか、ただ悲壮感漂う歩き方で森の中を歩いていた。

「…ん？　これは…クン、クンクン…」

しかし、この少女は運だけは持っているようだった。

突如として香ってきたおいしそうな肉の匂いに、鼻をヒクつかせながらその出所を探す。

そして、その匂いが出ている所に向かって、だらしなく開けた口から涎を垂らしながら向かって行った。

「いやー、ちゃんと燃やせる枝が見つかって良かったねー」

「…それはあたしに対する当てつけと取っていいのかしら？」

パチパチパチパチ…

炎がそんな音を出しながら燃えていく。

その炎を囲むように、シオンとユフィーは少しばかり大きな切り株の上に座っていた。

シオンは手に持った木の棒で、炎の調節のために燃えている枝を突

いている。

その間に、ユフィーはクロールフを解体して調理できる大きさに小分けしていた。

「そういえばさ、このままこういう役割がつきそうだね。僕が火とかの雑用管理で、ユフィーが調理役みたいな」

「…あたしは最初から何となくこんな感じがしてたけどね。王子様が料理なんかできる訳ないもの」

「確かにそうなんだよねー。結構僕は何でもやらせて貰えたんだけど、料理場だけは入れてくれなかったからね」

「面目がたたなくなるからじゃないの？」

そんな話をしながら、ユフィーは作っておいた台座に肉の塊を乗せ始める。

串のようにした、肉がついた棒も一緒に炎の周りに突き刺していく。

後はこれを焦げないように放っておくだけだ。

「あ、いい匂いしてきたねー」

「そうですよ！ あー、早く食べたいです！」

「うん。僕ってこういうお肉の形って食べたこと無いから、楽しみだよ」

「私ですよー！」

「ん？」

そこまでいって、シオンは初めて首を傾げる。

自分はいったい、誰と喋っているのだろうか。

「…あんた…誰？」

そして、ユフィーのかなり不機嫌な声が響く。

その不機嫌な声を聞いたシオンと、もう一人の声の主はお互いを見つめあった。

「うわぁ！」

「キャア！」

叫び声を上げ、二人共その場から飛び去ってしまう。

どうでもいいがこの二人。かなり身体能力が高い。

飛び去ったシオンは尻餅をつきながら、その侵入者に向かって指を指した。

「だ、誰！？」

「すみませんすみません！ いい匂いがしたものでして決してやましい思いがあったからではなくお腹も空いていて迷子にもなってい

て人がいるという事に感動を覚えてしまったけなんです！ あ、私はリィナ・ハーキュリーって言います。以後お見知りおきをお願いします」

凄まじい勢いと、ほとんど一息で言っているような言葉に、二人は気圧されてしまう。

後退りしながら地面に減り込む勢いで土下座する、リィナと名乗った少女の姿に苦笑いしか出てこなかった。

「え、えーっと…とりあえず頭を上げてくれると…」

「何でそんなに申し訳なさそうなのよ、あんたは」

「なんとなくだよ、なんとなく」

「…まあいいけど」

シオンはそんな下手に出た対応で、土下座し続けるリィナに話しかける。

「すみません…。私、色々と混乱して…」

ぐぎゅるるるる…

「…はうー…／／／」

自分では制御する事のできない腹の虫の叫び声に、リィナは顔を真っ赤にさせてしまう。

そんなリィナを哀れに思ったのか、シオンはタイミング良く焼けていた肉をリィナに差し出した。

「…食べる？」

「…いただきます」

顔が真っ赤な事をごまかすかのように、リィナは一気に肉にかじりついた。

協力関係

モグモグモグ：

「へー、そんなことがあったんだ」

「そうなんですよー。で、ここってどこなんですかね？」

「ここはフォーゲルノート帝国の首都、シンセミアの近くの森よ。あたしたちはそのシンセミアから出てきたの」

簡単な自己紹介をした後、すっかり小さくなってしまった炎を取り囲みながら、三人はリィナの迷子になってしまった経緯を聞いていた。

リィナの話を纏めるとこうなる。

剣士になる夢があるが、お家柄ということもあり女の身ではなれない。

その事で親と喧嘩し、無我夢中で走ってきた。

途中でこの森に迷い込み、食料も何もない状態で彷徨っていたという訳だ。

そこまでならいい。ただの無謀な家出少女というだけだ。

だが、珍しく親切なユフイーの言葉を聞いた途端、リィナは唐突に叫び声を上げた。

「…へ？　ここって、帝国…？　……ええー！ー！ー！！！」

「「っ！」」

突然の大音量の叫び声に、シオンとユフィーは二人揃って耳を押さえる。

リイナはそんな事が目に入らないのか、急に立ち上がると辺りを忙しなく見渡しだした。

「な、何で私帝国に来てるんですか！？　私は王国にいたはず…っというか、初めて来ましたよ帝国なんて！！」

「ちょ、ちょっと！　落ち着きなよ！」

「…凍らせましょうか？」

「って、ユフィー！　怖いこと言わなくていいから！　そりゃ額に青筋立てたくなるのは分かるけど！」

騒ぎ出したリイナを止めようとしたシオンだったが、スターレインを構えて魔力を練るユフィーにそれ所ではなくなってしまう。

ユフィーとしてはイライラを発散させたかっただけなのだが、そのやり方が悪い。

それに加え、ユフィーは気に入らない人間——初対面も含まれるが——にはかなり冷たいのだ。

それが分かっているシオンは、何とかユフィーを宥めようとする。

「…うるさい奴には死刑よ。勝手に騒ぎ立てる奴にもね」

「両方じゃないか！ もう、初対面の人にばっかこんな事してると、いつか刺されるよ？」

「ふん。やれるもんならやってみなさい」

「いやいやいや、女王様なんかにならなくていいから」

軽くふんぞり返ってしまったユフィーに、シオンは完全に呆れ返ってしまふ。

だが、何とか意識を逸らすことには成功したようで、スターレインを構えている事は無くなった。

それを認めたシオンは、次にリィナの状況を確認するために声を上げる。

「…で、落ち着いた？」

「はい。とても落ち着きました」

「そう？ ならいいけど…。…でさ。リィナ、これからどうするの？
と言うか、どうやってここに来たか分からないの？」

「うーん。無我夢中でここまで走って来たので、あんまり経過はよく覚えていないんですよ」

むむむと言った風に首を捻って考え込んでしまうリィナ。

だが、その話を聞いたシオンはありえないという顔をしていた。

それもそのはず。リィナが本当に王国に住んでいるのなら、走って来たという言葉はおかしい。

シオンたちが目指している場でもあるが、北と南の大陸の間には大陸間に亀裂が走ったような海溝、レミアルナ海溝が存在しているのだ。

帆船でなければ乗り越えることのできない大きな海溝を、とても走ってきたという言葉では言い表わせないのである。

「…ほんとに走ってきたの？　帆船には乗らなかったの？」

「帆船？　あ、やっぱり帝国には情報が行き渡っていないんですね。…今、王国側から帆船は出ていませんよ？」

「え？　どういうこと？」

突然知らされた知らせに、シオンはかなり驚いてしまう。

もちろんその発言もユフィーは聞いており、問い詰めるような形ではあるがリィナに質問する。

「あたしも聞きたいわ。あたしたちは王国に向かってる。それに、帝国側からの帆船は出ているはずよね？　ならなぜ王国側は帆船が出ていないのかしら？」

なぜかリィナの襟首を掴みながら、凄むように質問していくユフィー。

しかし、端から見ているシオンは、小柄なユフィーがごくごく一般的な身長のリィナの襟首を掴む姿は、なんというか滑稽だった。

だが、そんな事は睨まれているリィナには関係なかった。

「な、何か怖いんですけど…。えっとですね、今王国では魔物の襲撃が頻発しているんです」

リィナの口から発せられた言葉は、奇しくも二人の報告すべき事柄と一緒にだった。

「魔物の襲撃…」

「はい。そのせいで騎士団が出ずっぱりで、定期連絡も行えない状況です」

リィナの口から伝えられた単語に、ユフィーの記憶が蘇っていく。

ユフィーが苦虫を噛み潰したような顔をしていると、代わりにシオンが喋り出した。

「…僕等も昨日、魔物に襲われたんだ。帝都はほぼ壊滅状態。みんな『帝都崩落』って言う名前をつけて呼んでる」

「そうだったんですか…。でも、王国も帝国も魔物の襲撃に悩んでる。…どうということなんですかね？」

「どうもこうもないわ。ただ、襲われている人々を救えばいいのでしょうか？ やってやるわよ」

「…そう簡単に事が運ばいいんだけどね」

「どういうことよ。魔物を滅する。もう二度と、同じ思いをする人を無くすために…」

断罪の決意を露にするユフィー。

だが、シオンはそんなユフィーの決意に危うい物を感じていた。

ユフィーの覚悟が、どこか死に急ぐような危険な物に思えたからだ。

「…よく分からないんですけど、王国に向かうんですよね？」

「ああ、うん。そうだよ」

「…なら、私もついて行っていいですか？ 絶対と言っていいほど道が分からないですし、それに自分で言うのは何なんですけど、私は一人で出歩けないんです」

「うん、いいよ。仲間が増えるのは大歓迎……」

「はあ？ 何言ってるのあんた。どこかの箱入り娘なの？」

申し訳なさそうに報告するリィナだったが、それをシオンは快く了承する。

だが、その言葉を述べている最中に、ユフィーの氷の言葉が突き刺

さった。

「いえ、あの、ほんとにすいません」

その言葉の冷たさに負け、もう一度地面に減り込みながら土下座を開始してしまうリィナ。

そのかなり哀れな姿にユフィーはかなり満足しているようだが、シオンはかなり焦っていた。

「こらこらこら。ユフィー、何してるのさ！」

「なに？ 変な事口走ったからでしょ？」

「そんな事したらダメだって！ 思い出したんだけど、ハーキュリーって言えば王国の客員剣士の家系なの！ 箱入りのお嬢さんでもおかしくないから！」

「あら、そうなの？ でも、平民のあたしには関係ないわね」

土下座しているリィナを眺めながら、何とも言えないような表情になっているユフィー。

未だに土下座を続けるリィナは、シオンの言葉に数回微妙に反応しただけで、まったく動かなかった。

「ああもう！ ほら、リィナもいつまでもそんな事に付き合っけないで顔を上げてよ！」

業を煮やしたのか、土下座しているリィナの肩を持って思い切り立

たせるシオン。

「…それに、僕だってあんまり知らないことは多いんだよ？ リイナと一緒にじゃないか」

「え？ 私と一緒に…？」

「そうだよ？ と言うか『ファルカス』って聞いたこと無い？ 自己紹介の時にも言ったと思うんだけど」

そう。シオンは最初の自己紹介のときに、偽名を使わない状態で名乗ってしまっていた。

普通、シオンはこう言う場で名乗りを上げるときは偽名を使う。その方が混乱無く話を進められるからだ。

だが、その時にリイナは何の反応も示さなかったので、内心安堵していたのだ。

しかし、それがリイナの天然によってかわされたと言う事を、シオンは嫌でも知ることになる。

「…ファルカス…んん？ …どこかで…：ああ。帝国王家の姓名です。でも、なんで…：ええええー！！！！ し、シオンさんって王子様なんですか！！？」

再びの絶叫。

だが、今回は息を吸い込む姿が見られたため、二人共耳を塞ぐことができていた。

耳を塞ぎ態々しゃがみ込んでまで、絶叫という名の凶器を回避すると、ユフィーのイライラが爆発した。

「…あんたはあ！　うるさいのよ！　『アイシクル・レゾン氷刃練武』！」

「ちよっ、ユフィー！」

比較的軽い魔法をリイナに向かって放つユフィー。

その様を見たシオンは、慌ててその間に入ろうとするが時既に遅し。

飛来する氷の刃は、リイナに確実に届いていた。

フワッ：

「「「な！？」「」」」

突然吹いたリイナを中心とした小さな竜巻に、氷の刃はすべてすくわれ落下する。

その事に驚きを隠せない二人だったが、その中心となったリイナ自身も驚いていた。

薄緑色に輝く魔法の風は、リイナの周りをくるくると回ると、突然消えてしまう。

その一連の不可解な事に、三人は驚きで声もでなかった。

「……リイナって魔法が使えたの？」

その沈黙を破ったのはシオンだった。

神妙な面持ちでリィナの言葉を待つ。

だが、当の本人であるリィナはかなり困惑していた。

「え？ え？ え？ わ、私が魔法を？ い、嫌ですねー、そ、そんな訳ないじゃないですかーあはははははは…」

「…壊れたわね」

「…うん、確かに」

壊れたというより、信じられない物を目にしたというような現実逃避の笑い声を上げるリィナ。

だが、いつまでもこうする訳にもいかない。今この瞬間も、時間は刻一刻と進んでいるのだ。

「…ちょっと、いい加減目を覚ましなさい」

ボカッ

「あいたっ」

スターレインを使って、リィナの頭を殴るユフィー。

現実の痛みに引き戻されたリィナは、一度辺りを見渡した後になんと言った。

「…今日もいい天気ですねー」

「…目え覚ませえ！」

ドガッ

「あいたー！！」

朝露の光る森の中、殴られる音とリィナの叫び声が響いた。

ジンジンジン…

「うー、痛いですよー」

「あんたが悪い」

「…はははは…」

三人は未だ森の中を歩いていた。

その間に何回か魔物に襲われそうになるが、シオンの爪技とユフイの魔法、リィナの剣技によって切り抜けていた。

そして、今は魔物に襲われていない状況だが、なぜかリィナが額を擦っていた。

その理由は、先ほどの魔物との戦闘でなぜかリイナがズッコケたのだ。

大方地上に飛び出る木の根に捕まったのだろうが、その転び方が悪かった。

転んだだけなら立ち直るのは容易だ。だが、なぜか両足が器用に絡まったことと、その転んだ先にも木の根があったことで、この様なダメージを被っているのである。

「…だってー、あんな所に木の根っこがあるなんて思わなかったんですもん」

「それでもあたしは言ったはずよ？ 『気をつけなさい』 って」

「うー…。それはそうですけど…」

リイナを苛めるように、ユフィーが言葉を紡いでいく。

その言葉の冷たさに、リイナがどんどん小さくなっていく中、シオンが仲裁に入る。

「まあまあ、もういいじゃんか。次はそんな失敗しないって」

「…あたしは別にそういう意味で言ってるんじゃないの。怪我でもされたら困るじゃない。この傷薬も何もない状況で」

そっぽを向きながら、素直になれない思いを口にするユフィー。

そんなユフィーに対し、シオンは薄く意味のある笑いを向けると、小さくなってしまったリィナを助けるために手を差し出す。

「ほら。早く立たないと、置いてっちゃうよ？」

「そ、それは嫌ですシオン様！」

「様は無し。言ったと思うけどね」

「で、ですが…」

「旅の仲間なんだから、そんな堅苦しいことは無しだって。それに、年も同じなんだし。仲良くいこうよ」

「シオン様…いえ、シオンさん！」

シオンの言葉に感激したのか、なぜかシオンに抱きつくリィナ。

その突然の出来事にシオンはひどく焦り、ユフィーは目を丸くする。

「シオンさんなら、絶対良い王様になります！ 頑張ってください
！」

「う、うん。分かった、分かったから離して…」

「はっ！ すいませんすいません！ いきなりこんな事して…」

「いや、いいんだけどさ……いたたたたっ」

ギユウウ…

「ゆ、ユフィー！ 何するのさ！」

「…知らないっ」

頬を膨らませてそっぽを向いてしまうユフィー。

その目尻にはなぜか涙が溜まっていたが、シオンにはそれを追求する事ができなかった。

「（…シオンのバカ…なによ、あたしには何もないのにさ…）」

「そ、それはそれとしてさ。あそこに見える煙。多分村なんだろうけど、あそこで一泊しようか？」

「んー。私は何も分からないのでついていきますよ？」

「あ、あたしもそれで」

「よし。決まりだね。なら、行こう」

シオンの掛け声とともに、三人は再び歩き出した。

護るべきもの

パタパタパタ：

豪華な布の敷き詰められた、かなり長めの廊下を走る音が響く。

年はかなり若く、成熟しきっていない幼い風貌の少女だ。

さほど慌ててはいないようだが、その少女の身体能力が高い所為か、かなり足音が早い。

その少女は、ツンツンに逆立たせた青紫の髪と綺麗な三角形の犬耳を揺らしながら、とある部屋の扉をノックして開けた。

「姫ー。起きてますかー？」

かなり不躰だとは思うが、これが少女の地なのだろう。

開け放たれた扉から、キョロキョロと部屋の中を見渡す。

だが、そこにお目当ての人物はいなかった。

「…またですかまたなんですねそうなんです…ん？」

カタカタカタ：

黒いオーラをまき散らしながら、誰もいない部屋を見てみると、彼女の目にある物が止まった。

それは、風に揺れる窓とそこにかかった不自然に捻れた布。

明らかにそこから脱走した形跡に、少女は絶望の悲鳴を上げることになった。

「…何でいつも出て行かれるんですかー！！ 姫ー！！！」

「んー、とりあえず来てみたんだけど、結構大きな町だったみたいだね」

「ええ。警備の者もいるみたいだし」

「ふわー…これが帝国の町並みですかー」

三者三様の感想を漏らしながら、立ち寄った町の中を歩く三人。

「あ、そうか。いくら王国と帝国の国交が正常だといっても、渡航する人間は少ないもんね。僕も王国には行ったことがないし」

「そうなの？ てっきりあたしは王族関連で行ったことがあるのかと思ってたわ」

「無いよ、そんな事は。お金もかかるし、行く理由がなかったんだから」

王様になったら別だけどね、と苦笑しながら言うシオン。

そんなシオンを半ば呆れたようにユフィーは見つめると、隣で目を輝かせているリィナに話を振った。

「で、あんたはいつまで物珍しそうに辺りを見渡してるのよ」

「だって珍しいんですもん。世界は同じでも、住んでる所が違うだけでこんなにも違うんですね！」

「確かに。エスカレルニアは北の大陸だもんね。確か…雪っていうのが降るんだったよね？」

「はい。とっても綺麗ですよ！」

嬉しそうな笑みを浮かべながら、シオンの問いに答えるリィナ。

そしてそのまま小躍りしながら歩いていると、唐突にリィナがこけた。

「いたっ」

「だ、大丈夫？ 見た所、何も無い所でこけたと思うんだけど…」

「…バカ…？」

「うー…足がもつれただけですー！！」

心配しているのだろうが、この二人の台詞はかなり辛辣だった。

顔を真っ赤にしながら立ち上がり、埃のついた服を払いながらそう抗議するリィナ。

その時、リィナがまたもやこけた。

「あたっ」

「…またこけた」

「…いよいよバカね」

「ち、違いますよ!! 今度は何かに引っ張られて…」

「…………ん」

必死に抗議するリィナが手で送り出したのは、リィナの服の裾を握り締めた小柄な少女。

長い髪の色は紅。至る所にはねっ毛があり、それを大きな髪留めで止めており、黒色の生気の無いような瞳で、シオンたちを見つめている。

「な、なにかな? 親はどうしたの?」

「……………」

一言も発さない少女を心配したシオンがそう声をかけるが、少女は何も返さず代わりにリィナを見上げた。

「どうしたんですか? 私の顔に何かついてます?」

「…………見たこと無い顔」

「え？」

「…………」

リイナが少女に笑いかけると、それを少女は不意に断るようによつぽを向いてしまう。

そして、そのままリイナの服の裾を持ったままだが歩き出していく。

「え？　ちょっ、伸びる伸びる伸びますってー！」

リイナの叫びもお構いなし。

ぐいぐいと引きずるような形でリイナを引っ張っていき、そして唐突に離れた。

ベシヤッ

「…今日はよくこけるね…リイナ…」

「…厄日なんじゃない？」

「…うー…」

盛大な音を立ててこけたリイナを尻目に、少女はそのままどんどん歩いていく。

そしてこれまた唐突に発言した。

「……………来た」

「姫……………!!!!」

大音量の声と共に、凄まじい土煙を上げながら何かが近づいてくる。

いや、声を出しているのだから人間であることに変わりはないのだろうが、それでも上がる土煙の量は尋常ではなかった。

「……………メア、うるさい」

「うるさくしますよ! いい加減一人で出歩くのは止めてください!」

「……………うるさい」

「うるさくします!!」

突然現れたビルスティアの少女の剣幕に三人は呆氣に取られているが、怒られているはずの少女は何事も無いかのように立っていた。

そして最後には、手に持っていたぬいぐるみをメアと呼んだ少女に投げつけてしまう。

「姫!!」

慣れているのか、投げつけられたぬいぐるみを器用に受け止め、少女を追いかけようとするがその少女は近くにあった屋敷の中に入っ

てしまう。

「姫！ 開けてください！」

「……………」

閉められた扉を叩きながら、そう叫ぶメア。

だが、その扉が開かれることは無かった。

その事に落胆し肩を落とすメアだが、その一部始終を三人に見られていた事に気づき、慌ててたたずまいを直した。

「あ、すいません。お見苦しい所をお見せしてしまつて…」

「いえいえ。構いませんよ」

「本当にすいません。あ、私、コロナ・トベルスティア様の従者をやっております、メアと申します。お見知りおきを、帝国第一王子、シオン・セナ・ファルカス様」

シオンの前に跪き、臣下の礼を取るメア。

その礼をシオンは慣れた風に受け取ると、記憶を探るかのように手を口元へと置いた。

「あ、ご丁寧にどうも。確か…トベルスティアって言うと、あの子が遺児って事になるのかな」

「はい、その通りでございます。その節につきましては、王にも参

列いただき恐悦至極でございます」

「畏まらなくていいよ。普通にね」

「ですが…」

「今の僕はただの旅をしてる旅人だよ。そういう権利なんか、全く持っちゃいないんだ」

あっけらかんと自らの権力を捨て去ってしまうシオン。

そのシオンの態度に、メアはどうすることも出来ないと思ったのか、立ち上がって残りの二人に礼をした。

「…そちらのお方も、失礼いたしました。コロナ姫の放蕩加減にはほとんど手を焼いておりまして…」

「構わないわよ。でも、あれくらい元気が無いといけないんじゃないの？ あれくらいの子供には」

「そうですね。やっぱり、子供は元気が一番ですよ！」

「そう言っていたけると幸いです。立ち話もなんですし、お屋敷にいらっしゃってください」

そう言って先ほど閉められた扉を指し示すメア。

だが、その行動に三人の頭には？が浮かんだ。

「…？ ああ、大丈夫ですよ。…えっと…ほら…」

ゴゴゴゴゴゴ：

鈍い音を立てながら地面が割れていく。

突然しゃがんだメアが何かを操作したのだろうが、三人としては地面が割れる光景にただただ驚いていた。

「…ささ。トベルスティア邸へようこそ」

「ふわー…。豪華なお屋敷ですねー」

「ふふ…。ありがとうございます。あのハーキュリー家の人間に出会えるとは思っても見ませんでした」

赤を基調とした豪華な廊下を、四人が静かに歩く。

一度地下にもぐった後、すぐにこの廊下に出てきたため、三人としてはこの変化に驚いていた。

だが、それも一瞬ですぐにリィナ以外は平静を取り戻していた。

「あれ？ ユフィー、あんまり驚いてないんだね」

「…あんな王宮なんか見た後で、あんまり驚けないわよ。それに、毎回毎回驚いてたらついていけないわ」

「そっか。あの面白いユフィーが見れないとなると、残念」

そんな会話がなされているうちに、とある部屋の前にたどり着く四人。

一際装飾の成された、豪華な大きな扉。

その扉を、メアは一息に開け放った。

「ここが先代、旦那様と奥様がおられた部屋です」

「先代？ さっきも何か言ってたけど、なにがあったの？ 遺児とか何とか…」

案内された部屋の説明に不可解な事があったのか、ユフィーがそんな事を口にする。

その質問に、答えたのはシオンだった。

「…トベルスティア家は大地主なんだ。ここ一帯のほとんどの土地を所有してる。でも、つい二年前かな。事故があったんだ」

そこまでシオンが言った後、メアが続ける。

「その事故で姫は大きな悲しみに暮れ、感情を失いました。親や親戚、家族と呼べるものを亡くしたのですから、それも当然と言えば当然なのでしょうが…」

そう言うメアの表情は暗かった。

使えるべき主の悲しみを一心に背負ったような、そんな表情だった。だが、そんな表情のメアに対し、ユフィーはこんな言葉を言い放った。

「…家族と呼べるものを亡くした、ねえ。…ここにも家族がいるのに、なんてバカな子なの？ コロナって子は」

「…ここにも家族がいる？ それはどういう…」

「あんたもたいがいバカね。あの子を大切に思ってるなら、あの子は家族でしょう？ そうじゃないの？」

さも当然かのように自らの持論を披露するユフィー。

その言葉の意味に、メアは黙り込んで考えてしまう。

だが、その答えはすぐに出ていた。

「…はい、そうですね。姫は、私の『護るべき者』なんですから」

一方その頃。

自らの部屋へと戻っていたコロナは、壁にかけられている一枚の絵をただ眺めていた。

何の変哲もない、ただ一組の男女が描かれた絵。

だが、その絵はコロナにとって唯一の両親の形見であつた。

周囲の人間は事故として断定しているが、トベルスティア家を襲つたのは事故ではなく襲撃である。

大地主であることを快く思わない者たちの、心のない襲撃。

その襲撃に巻き込まれ、コロナ自身も大怪我をおつた。

しかし、目を覚ました彼女が見たのは、遺産や大地主の権利を得ようとする薄汚い大人の策略の渦だった。

両親や親戚を一斉に失つた悲しみと、その見たくもなかった陰謀に、彼女は感情を失くしてしまったのだ。

「………」

ただ、眺める。

飽きもせずただひたすらに。

だが、そんな彼女の耳にある言葉が入ってきた。

『…家族と呼べるものを亡くした、ねえ。…ここにも家族がいるのに、なんてバカな子なの？ コロナって子は』

『…ここにも家族がいる？ それはどういう…』

『あんたもたいがいバカね。あの子を大切に思ってるなら、あの子は家族でしょう？ そうじゃないの？』

自らの従者と、先ほど出会った三人のうちの一人の台詞。

その台詞は、本来建物の関係上聞こえるはずが無かった物だが、そんな事は今のコロナには関係なかった。

「……………家族」

「……………メアが」

「……………家族」

その言葉を噛み締めるかのように、ゆっくりと区切りながら言葉にしていくな。コロナ。

そして、少しだけ生気の宿った目を前にしっかりと向け、歩き出した。

だが、不意にくるりと後ろを向くところを咥いた。

「……………ありがとう、聖霊さん」

それだけを咥くと、コロナは踵を返して部屋から出て行った。

「——ありやうやうや、バレてたのかー♪ これはさっさと挨拶にいこっかなー？ でもま、楽しそうだしっか♪」

命をとって

「さてと…あんたの思いも聞けたし、さっさと放蕩娘さんに会いにいかない?」

「姫にですか? 今はどこにいるかなんて分からないですよ」

「なんでよ。部屋にでも行けばいいんじゃないの?」

「鍵がかかってるんですよ。かなり大きめの鍵なので、そう簡単には…」

「あれ? 従者をやってるんなら、リサーナさんから何か教わらなかったの?」

肩を落としかけるメアに、シオンがそんな事を言い出す。

確かにシオンが言うことはもっともで、この国の従者、メイドは一旦王宮にてその術を学ぶことになる。

その時の教官役がリサーナだった事を思い出し、シオンはそう聞いたのだ。

しかし、メアから返ってきた台詞は予想の斜め上に行くものだった。

「アレは犬じゃありません。狼です」

「え? いや、だから解錠の術とか…」

「アレは犬じゃありません。狼です」

「いや、それは分かるけどさ…」

「アレは犬じゃありません。狼です」

「…もういいや」

根負けしたように、メアの怒涛の台詞を回避するシオン。

そしてこの時固く誓った。メアにリサーナの話は禁句だと。

「でも、ほんとにどうするんですか？ 部屋が開いてないんなら、強行突破もできませんよ？」

止まってしまった話を続けようと、リイナがそう話を持ちかける。

「そうですね…姫の事ですから、食事の時間になれば下りて…」

バリイイン！！

メアがリイナの台詞に答えているとき、突然ガラスの割れる音が響いた。

「「「「「」」」」」」

「キャアアーーーー！！」

甲高い声が、ひるんだ四人の耳に入る。

聞き慣れないその声に、シオンたち三人は反応できなかったが、メアだけは違った。

「姫！」

その声を聞き届けたメアは、血相を買えて声の元へと走り出していく。

「え？ さっきのがコロナちゃんの声？」

「まったく分からなかったわ……」

「あんなに高い声が出るんですね……。ビックリしましたよ」

一人呑気な事を言っているが、三人は走り出したメアの後を追いかけて行った。

「ひっ！ こ、こないで！」

「んあ？ んだこのガキ？」

「何ですかあなた。幼女趣味でもあったんですか？」

「違えよクソ野郎……！」

割れた窓ガラスの破片を踏み鳴らしながら、二人組の男がコロナに

近づく。

コ罗纳は突如として現れた男たちに腰を抜かして、わなわなと震えることしかできなかった。

「つたくよお、なーんで俺様がこんな事しなくちゃいけないんだよ」

「黙りなさい。待機もまともに出来ない猪のくせに喋らないで下さい」

「んだとコラァ!!」

他人の家の物を壊して不法侵入しておきながら、この二人の男たちは完全にいがみ合っていた。

一人は完全に喧嘩腰の、ポケットに手をつ込んだままもう一人の男を睨む、斑模様の黄色の髪をした長身の男。

もう一人は、眼鏡に手を当てたまま冷静にツツコミをかます、右側の茶色の髪の毛が異常に長い痩身の男。

その二人の男たちは、今にも殴り合いを始めそうな雰囲気のまま言葉交わしていく。

「その通りの事を言っているんですよ。あの方に迷惑をかけないでください、この無能」

「こ、の…言わせておけばあ!」

チャキッ

瘦身の男の言葉に完全にキレてしまったのか、懷から小さな短剣を取り出してその刃先を向ける長身の男。

向けられた刃を冷やかな目で見つめながら、瘦身の男はぼそりとう言った。

「はぁ…向ける相手は他にいるでしょう？　ねえ？　ビルスティアのお嬢さん？」

「姫！　ご無事ですか！？」

瘦身の男が顎で指し示した先には、息を切らせながら走ってきたメアの姿が。

男たちには目もくれず、床にへたり込んでいるコロナをその両手で抱きしめた。

「姫…よかった…」

「…メ…ア…うわあああん！」

見知った者の顔が見れたせいか、その両手の中で声を上げて泣き出すコロナ。

やはり、この小さな体には大きすぎる衝撃だったようだ。

「けっ。泣かせてくれるじゃないの？」

「無視されましたね…いやはや嘆かわしい」

だが、その動きは男たちの癪に障る行為だったようだ。

静かに怒気を滲ませながらメアたちに迫っていく。

「…まあ、なんだ。お前ら鬱陶しいから死んでくれや」

長身の男は、そう言って手に持っていた短剣を閃かせる。

流れるように繰り出された剣閃は、そのまま真っ直ぐメアの後姿を捉えた。

ガキン！

「なっ！ てめえ！ 何しやがる！！」

「それはこっちの台詞さ！ 君達はいったい何者なんだ！？」

しかし、その剣閃の間にシオンのカテドラルの刃が割り込んだ。

突如として弾かれた刃を見ながら、長身の男はシオンに対して怒鳴り声を上げる。

シオンもその怒鳴り声に負けないよう、声を張り上げて問いただした。

「急に人に剣を向けたりして、一体どういう見なんだ！？」

「はっ！ てめえみたいなガキには関係ねえよ！ 邪魔すんならてめえから…」

「待ちなさいこの猪」

問いただすシオンに長身の男がキレかかるが、それを痩身の男の冷やかな声が止めた。

「ああ！？　なんでだよ！」

「…ターゲットです。彼が」

「え？」

急に向けられた指に、シオンはただ困惑する。

その困惑の表情を好機と見たのか、長身の男が口を釣り上げながらシオンへと迫っていく。

「…へえー…てめえがねえ…。ま、悪く思わないこった。呪うなら運命って奴を呪ってみるんだな」

「なにバカな事を言ってるんだ！　君たちは罪を犯している。しかるべき所でしかるべき罰を受けるんだ！」

「しかるべき罰…ですか。笑わせてくれますね。私たちは、生きていることそのものが罰だというのに…」

「なにを言って…！」

「仕方ありません。今回は御挨拶ということにしておきましょうか。後ろのお嬢さん方にもね」

「…いつから気づいていたの？」

「気配は隠せていたはずなのに…」

ゆっくりと頭を振るように周りを指し示した痩身の男。

その声に反応するように、部屋の影からユフィーとリイナがそれぞれ愚痴りながら出てきた。

「…ほとんど最初から、と言ったら驚きます？　ま、今回は御挨拶です。私は『ヒーナス』と名乗っております」

「俺様は『エルブレイア』だ！　覚えておきな！」

名乗られた男たちの名前の異様さに、シオンとユフィーの顔が引きつる。

ヒーナスといえば、ユフィーの友人、ミーナの命を奪った魔物の名前なのだから。

「どういう事です？　なぜ名前が魔物の名前なんかに…」

その事を知らないリイナが、皆を代表するかのように男たちに話しかける。

「あなた方は知らなくてもよいことですよ。では、私たちはこれにて…」

「…待ちなさい…」

そう言って踵を返してこの場から離れようとする男たち。

だが、静かに重く響き渡ったメアの声はその動きを止めた。

「…姫に手を出して、生きて帰れると思っているんですか…？」

「あ？ 何言ってるんだてめえ？ そのガキは勝手に驚いてこけただけだろうが」

「…姫に手を出す者は…：私が殺す…」

「は？」

ギャリイイン

「ちっ！」

メアがふらりと動いたかと思うと、次の瞬間には『エルブレイア』の男の腹を薙いでいた。

だが、男はそれに反応してまだ隠し持っていた短剣でそれを受け止めた。

「…行きましょう、『風^{ふうりんか}燐華』」

手元に意識を集中し、愛剣の名前を呼ぶ。

薄緑色の光に包まれたメアの両手から現れたのは、抜き身の『刀』と呼ばれる長剣。

薄く、美しい輝きを放つその長剣は、メアの両手に収まると同時に柔らかな風を発した。

「なに!?! 魔剣だと!?!」

「…これは分が悪いですね…。格好はつきませんが、逃げさせていただくことにしましょう」

「逃しません!?!」

「逃してくださいよ。こいつを置いていきますから」

パチン!

そう言った『ヒーナス』の男は、空に向かって指を鳴らした。

不気味に響き渡るその音は、男の思惑どおりあるものを呼び出した。

「ギャアアオオ!?!」

「「「っ!?!」」」

「…グリム、ワイバーン…」

響き渡った魔物の盛大な鳴き声は、耳を塞がなければ意識を飛ばしそうなものだった。

だが、メアだけは例外で、現れた魔物の名前をゆっくりと呼んでいた。

上空に出現した大きな巨躯。人が勝負を挑んでいいはずがない、その神々しさ。深緑色の巨大な体躯に、鋭利に尖った牙と爪。波打つ鱗に、しなやかな尻尾。

魔物の中でも最強の部類に入る、ワイバーンの眷属だ。

「あなた方の相手はこの子が努めますので、どうかお手柔らかにお願いしますね。では、また会いましょう。…時の少年…」

「え？ 今、何て…」

「シオン！ 今はそんな事気にしてる場合じゃないでしょう！？」

「あ！ そうだね、ごめん」

律儀に呼び出した者が離脱するのを待っていたのか、グリムワイバーンは現れたときの対空状態で留まっていた。

だが、すぐに攻撃に転じた。

ゴアアアア！！

大きく開けられた口から繰り出されたのは、暗い紫色の火炎。

広い範囲に拡散する竜の吐息は、確実に五人をとらえていた。

「はあ！！！」

「氷結の氷よ。我らに迫る脅威を破る盾となれ！ 『結晶氷陣』！」

クリシミナル

迫りくる火炎を、メアは風燐華を振ることで暴風を生み出して回避し、ユフィーは巨大な氷の盾を出現させて防御した。

「くっ！　こんな火炎、見たことも聞いたこともないわよ！？」

「止めるんだユフィー！　受け流す方がいいから、力を入れないで！」

「え？　なんで……」

ボゴォオン！

氷は熱せられれば溶ける。そして溶けた氷は水となり、急激に熱せられた水は気化し爆発する。

いくら魔法によって森羅万象の力を得たといっても、万物の法則には勝てないのだ。

それを予見したシオンがユフィーに警告を送るが時既に遅し。

十分に熱せられた氷の盾は、一気に爆発した。

「ちっ。ならもう一個作るだけよ！」

スターレインの宝玉が輝き、無詠唱で同じ巨大な氷の壁が出現する。

その氷の壁は飛び散る氷の破片からシオンたちを守り、消滅した。

「くそっ。空に上がったまんまじゃ、僕等は手が出せない……。ユ

フィーの魔法も、あの火炎とは相性が悪いし…どうする？」

「関係ありません。姫の前に現れる敵はすべて私が殺します。それが私の決意。それが私の生きる意味」

そう言いながら、メアは風燐華を上段に構えてグリムワイバーンに向かっていく。

そして、そのまま風燐華を振り下ろした。

ビシュン！

薄緑色の風の砲弾が、空気を切り裂きながらグリムワイバーンに直撃した。

「ガァァァー！！」

翼部分に当たったらしく、グリムワイバーンは軽い悲鳴を上げながら落ちていく。

「よし！ これなら僕らの攻撃だって当たる！」

「はい！ 行きましょう、シオンさん！」

落下してくるグリムワイバーンの巨躯を冷静に見つめながら、シオンとリィナの前衛組みが呐喊を仕掛ける。

しかし、さすがは魔物の中でも最強の部類に入るワイバーンの眷属。地面へと落下する前にその強靱な尻尾を屋敷の壁へと叩きつけ、屋

敷を破壊する。

「なっ！」

「キャア！」

その屋敷の崩落に巻き込まれ、シオンとユフィーは地面へと瓦礫と共に落ちていく。

「シオン！ リィナ！ くっ、あたしも降りるしか：メアとか言ってたわね！ あんたはその子を安全な所まで退避させなさい！ あたしはシオン達を追うわ！」

「分かりました！ 姫、こちらです！」

「……………」

終始無言だが、コロナはメアの声に従い屋敷の奥へと逃げていく。

それを確認したユフィーは、シオンたちの下へと急ぐ為に駆けていった。

反撃開始

ガラガラガラ…

「いっつ…」

グリムワイバーンが壊した瓦礫と共に落ちたシオンは、あちこちぶつけた体を擦りながら這い上がった。

見た所汚れてはいるが、体の主な所に怪我は無い。

その事を確認したシオンは、未だに軽い土煙の残る周囲をざっと見渡した。

「…被害はあまり無いな…。町の人たちも、やっぱり逃げてくれたんだろうか…」

周囲の異常とも言うべき静かさに、シオンは何か嫌な予感を覚えていた。

だが、今は共に落ちたリィナの発見が先だ。

「リィナ！ 無事かい！？」

「…シオンさん…ここでーすー」

微妙に力の無い声が声を張り上げたシオンの耳に届く。

その声を聞き、シオンはその声の下へと駆け出した。

「リィナ！ 大丈夫！？」

「…大丈夫なんですけど、また厄介なことになってまして…」

「え？ それはどういう…」

ことなのと続ける前に、シオンは気づいた。

自分たちを地上に落とした張本人である、グリムワイバーンがまたもや空に上がっていることに。

「くそっ。僕等じゃどうしようもない。魔法もないし、爪と剣じゃ何もできないよ」

「なんかこう…自分でふわふわっと浮ければいいんですけど…」

「そりゃ無理でしょ。いくらなんでもさ」

体を目一杯使いながら自分の意見を伝えるリィナ。

だが、伝わったことの大きさにシオンは無理だと一蹴してしまう。

それは当然だ。人には翼がついていないのだから。

「…はあ…はあ…はあ…ようやく見つけた…」

「…無事ですか？」

そんな二人の元に、息を切らせて大きく肩で息をしているユフィーと、それとは正反対の涼しい顔をしたメアが合流する。

その態度の違いに、シオンは一抹の不安を覚えながらも二人に聞いてみた。

「…あの、さ。二人共、屋敷から出てきたただだね…。どうしたらそんなに変わるのさ」

「あ、あたしは、体力、無いのよ。…それに、壊れた屋敷の階段なんて、走りにくいっただけだしありやしないわ」

「私は飛び降りてきましたので、最短距離ですね」

「「「はあ!?!」」」

しれっととんでもない発言をするメア。

その爆弾発言に、シオンたち三人の驚きの声が完全に被った。

「…姫を守るためならこの程度造作ありません。ささ、早く無遠慮な来客にはご退場願いましょう」

「そう…なのかな…?」

「…そう言うことにおきましよう…」

「…それが一番だと思います…」

自身に満ち溢れた物言いのメアを見ながら、シオンたち三人は呆れ

ながらも納得するしか無かった。

だが、その事に納得した所で戦況は変わらない。

地上にいる四人に対し、敵は上空にいるのだ。

上手くいけば撒けるかもしれないが、そんな事をした所で意味は無いと四人は分かっていた。

しかしその中で、シオンだけが唯一気づいた。

勝利のためには力を合わせることが不可欠だと言うことに。

「…メア。もう一度さっきの奴、できる？」

「できますが…当たりませんよ？」

「いいんだ。できるだけ弾幕になるように、バラバラにたくさん撃つて」

「分かりました」

シオンに急かされる形ではあるが、メアが風燐華を構え直して力を蓄え始める。

その行動を見届けたシオンは、次にユフィーに話を振った。

「ユフィーはメアの技の後に魔法を。氷の槍みたいなのが出せればいいんだけど…」

「槍？ そんな大きな物を作るの？」

「違う違う。小さくて無数の…そうだね…『針』、かな」

「分かったわ、針ね」

了承したユフィーは、その作戦に答えるために魔力を練り上げていく。

そして最後に、シオンは自らとリィナの作戦を口にした。

「僕等は正直言って待ちだ。空を飛ばれてちゃ、何も届かないからね」

「そうですね。でも、待ちっていつまでですか？」

「その辺はユフィーとメア次第なんだけど…。ま、僕等は落ちてきたらまず翼を切る。面倒だからね、もう一度上がられると」

「はい、分かりました」

大きく頷き、シオンの作戦に同意するリィナ。

そしてシオンは、状況を把握するために空を見上げた。

シオンの目に映るのは、未だにゆっくりと旋回しているグリムワイバーンの姿。

その優雅に旋回を行っている様を見ていると、唐突にシオンが声を張り上げた。

「メア！ 真正面、今だ、撃って！」

「はあっ！！」

シオンの指差した方角に向けて、大きく風燐華を薙ぐメア。

指示通り、一つ一つは小さいが、大量の竜巻が生まれ、グリムワイバーンに向かって進んでいく。

広範囲を覆う竜巻は、お互いがお互いに干渉しあいながら徐々に大きくなる。

それを満足そうに眺めたシオンは、次の指示を飛ばした。

「ユフィー！ あの竜巻に向かって魔法を！ 狙いは竜巻の根元！」

「分かったわ！ 無数の揺らめき、不確かな力。氷よ。その力を束ね、鋭利な矛と化せ！」
デイスайд・スピア『氷決指針』！」

指示に従い、魔法を発動させるユフィー。

発動した魔法は、自らに流れる魔力を外に流し、それを細かく凍らせるという物。

単純だが、シオンの指示の『針』にはなっている。

指向性を持った無数の氷の針は、シオンの指示通り竜巻の根元部分に向かって飛んでいく。

「よし。これならいけるはずなんだ…」

「シオン？ あんた一体何をしようとしているの？」

「まあ見てて。僕の予想が正しければ、直ぐにでも…」

「ギャアアア！！！！」

「な、なに！？」

ユフィーがシオンの行動を問いただそうとすると、突然グリムワイバーンの悲鳴の咆哮が響く。

その音を聞いたシオンは、真っ先に駆けた。

「リィナ！ 行くよ！」

「はい！！」

途中でリィナを呼ぶのを忘れず、落下していくグリムワイバーンの元へと駆けていく。

その動きを呆然と見ることに出来なかったユフィーの隣で、やたら汗をかいたメアがやってくる。

「…あれは風燐華の風にあなたの氷の合わせたんですね…」

「…合わせた？ どういう意味…っ！ あ、あんた、ものすごい汗の量よ！？ 大丈夫なの！？」

メアの体から滴り落ちる、尋常では無い汗の量に、ユフィーはひどく慌てる。

だが、メアは軽く腕を上げてそれを制した。

「…風燐華は魔剣。ビルスティアの私が扱うべき物じゃないんです。魔力の代わりに、尋常では無い体力を消耗するんです。だから…」

ドサッ

そこまで言った後、力尽きるように地面へと倒れこむメア。

その突然の出来事に驚きながらも、ユフィーはメアの体を抱え上げた。

「ちょ、ちょっと！ 本当に大丈夫なの！？」

「…少し、眠らせてください…そうしたら、回復はしているので…」

消え入りそうな声でそう言うと、直ぐに規則正しい寝息を立て始めるメア。

その異常なまでの素早さに、ユフィーは少し呆れてしまう。

「…ビルスティアは、眠ることで体力を一番回復させる術って聞いたことあるけど、本当だったとわね…。まあ、こうされちゃ動けないし…シオン、リィナ、頼むわよ…」

決着

「よし、落ちてきてる。畳み掛けるよ！」

「はい！ ハアッ！！」

地面へと落下して、太く短い足で地面に立つグリムワイバーンを見て、シオンは好機と声を上げる。

その声とともに、リイナは構えていたセントクルセイダースを思い切り突き出す。

先制のために放った一撃は、見事にグリムワイバーンの翼膜を貫いた。

そしてそのまま、リイナは余力を生かして翼膜を引き裂く。

シオンもそれに負けじと、反対側の翼の翼膜をカテドラルの爪でロボロにしていた。

「やりました！ これで飛べないはずですよ！」

「うん。でも油断しちゃダメだよ。だって怒ってるし、火炎だって……」

ゴアアア！！

屋敷の中でも見た暗い紫色の火炎が、シオンの言葉を区切るように放たれる。

その火炎をある程度予想していた二人は、別々の方向に逃げることで回避した。

「わっ！ 私ですか！？」

首を大きく曲げることで、グリムワイバーンは火炎を逃げたリィナに向けた。

再び迫り来る火炎に、リィナは全力で逃げる。

しかし、グリムワイバーンにとってこの行動は間違いだった。

完全にリィナが囷になり、意識から外れることのできたシオンが、グリムワイバーンの足を切り裂いた。

「ギャアアオオオ！！」

足を切り裂かれ、その痛みにもんどり打って倒れるグリムワイバーン。

その間もシオンは手を止めずに、カテドラルの双爪でグリムワイバーンを切り裂いて行った。

「ハアアア！！！！」

雄叫びを上げながら腕を振るう。

右、左、右、左と規則性がありながらも、その切っ先は違う所を切り裂いている。

最近接戦の武器である双爪の、最大の利点が発揮されている瞬間だった。

「よし。私も行きますよ！」

逃げていたリィナが、勇んで攻撃に参加する。

こちらは頭を重点的に狙い、少し出ている角を圧し折る勢いで怒涛の攻撃を繰り返していく。

振り下ろし、振り上げ、薙ぎ、突く。

基本的な動作を、これでもかというほどに叩き込む。

そして唐突に、二人は攻撃を止めて飛びすさった。

「これだけ攻撃してもまだなの…？」

「そうですね…もうとっくに終わってもいいはずなのに…」

まったくと言っていいほど進展の無い攻防に、シオンとリィナは疲れを覚え始める。

さすがに体力も削られ、無意識のうちに肩で息をしているのだ。

不安を覚えないはずが無かった。

そんな時に、もう一度火炎が飛び出てきた。

「くそっ！ リィナ、もう一度だ！」

「…待ってください！ 今回の横に広がってます！」

「なら上に…って、そんな場所はないか…後退するよ！」

周りを見渡した後、退却の指示を飛ばしながら自身も下がるシオン。そして、シオンが一瞬前までいた空間を暗い紫色の火炎が焼き払った。

「…拡散するものも出せるなんて…誤算だったよ」

「どうします？ 迂闊に前に飛び込んだら火炎の中ですよ？」

「…どうしようか。幸い、あっちは警戒して動かないでいてくれるけど…」

「お二人さーん♪ 随分楽しそうだけどー、ボクも混ぜてよー♪」
グリムワイバーンを睨むシオンたちの耳に、そんな楽しげな声が届く。

幼い少年のような声のその異常な響きに、二人は困惑する。

「っ！ だ、誰だ！？」

「ボクはボクだよー♪ ほら、こっちこっち♪」

声の在り処から、薄緑色の光が灯る。

その先ほども見ていた色の輝きに、シオンは驚きを、リイナは感動を隠せなかった。

「ふっふっふー♪ ボクの名前はウィンディアだよ♪ 風の聖霊って言ったほうがいいかな？」

「…風の、聖霊…」

「ふわー…。すごいですすごいです！」

「うんうん♪ でき、楽しいことしてるんならボクも混ぜて♪」

音の旋律を聞いているような、そんな心地よい声の調子。

薄緑色の体全体を覆うローブを着込み、光の当たる角度によってその色味を変える緑色の髪をした風の聖霊は、楽しそうにシオンたちに提案した。

「あ、そうそう♪ そののリイナって子には最初から用があったんだよねー♪」

「…私に…ですか？」

「うん♪ だってボク、君の魔力が気に入ったんだー♪ だから、選定者として君に力を与えにきたんだ♪」

「…選定者？ それはどういう…」

「バァン！！」

「「っ!」」

分からない単語を聞こうとしたリイナだが、突如大きな音が背中
で響く。

その音の大きさと近さに、シオンは武器を構え直し、リイナは体を
垂直に飛び上がらせた。

そのリイナの反応に、ウィンディアは涼やかに笑いながら言う。

「はははは♪ やっぱり君って面白いねー♪ じゃ、結界も持たな
いから説明は後だねー♪」

「ちょっと! 急にそんな事言われても困るって!」

そんな言葉を残し、消えていこうとするウィンディアに対し、シオ
ンは声を出す。

その声に、ウィンディアは手を振りながら楽しそうに言った。

「弱点は目だよー♪ ボクはリイナにプレゼントするものを拾って
くるから、また後でねー♪ あ、まだ魔法は使えないと思うから、
そのつもりで頑張ってるねー♪」

「ええ!?!? どういうことなんですか!?!?」

散々場を引っ掻き回した後、ウィンディアは——エールのつもり
なのだろう——一陣の風を残しながら消えて言った。

その呆気ない伝承の存在との邂逅に、シオンたちは半ば呆然とするが、グリムワイバーンの咆哮によって我を取り戻した。

「弱点は目か……。ま、当然と言えば当然なんだけど……鍛えられないしね」

「でも、どうします？　瞼が開いてるときじゃないと、確実に刺さりませんよ？」

「うん……一応案はある。でも今は攻撃を！」

作戦は後回しに、こちらの出方を伺うグリムワイバーンに斬りかかっていく。

シオンは右、リィナは左からほぼ同時に攻め込む。

相手の甲殻を、鱗を、皮膚を切り裂くために、二人は攻撃を開始した。

だが、相手も死にたくは無いらしい。強靱な尻尾を振り回し、二人の接近を阻む。

それを辛くも回避した二人は、さらに近づいていく。

「リィナ！　足を薙いで！」

「やあ……！」

滑り込みながら、抜き打ちぎみにリィナが太くしつかりとした足を切り裂く。

反対側のシオンは、飛び上がりながら双爪で胸の辺りを切り裂いていった。

綺麗に交差した二人は、リイナは地面に剣を突き立て、シオンは一回転しながら体勢を整える。

体勢を整えたシオンはそこで声を張り上げた。

「リイナ！ 僕が今から突っ込む。リイナは後から目を狙って！」

「ええ！？ 一体どうやって…」

「ごめん！ 今回は丸投げ！」

謝りながら駆けていくシオン。

そして、掛け声とともに普段の彼からは想像も出来ない行動に出た。

「せいやあ！」

ドカツ

双爪を使うのではなく、飛び上がった勢いそのままにグリムワイバーンの首を蹴った。

両足を使って、綺麗にきっちり。

誰もが予想だにしなかった攻撃に、グリムワイバーンの首が弾かれたように曲がる。

そして、その曲がった首の先にある頭は、リイナを向いた。

「ええい！ いっけー！ー！！！」

そしてリイナも予想だにしない行動に出た。

剣士の魂、自らの愛剣を思い切り振り被って投げたのだ。

剣士として鍛えられたリイナの臂力から放たれた剣の弾丸は、まっすぐにグリムワイバーンの目をとらえた。

ズシャッ

「グギヤアアオオオ！！！！」

剣が目を通じて頭を貫き、グリムワイバーンが叫び声を上げる。

そして、その叫び声が断末魔となった。

ズズン……バキン…

「へ？」

グリムワイバーンが倒れる音とともに響いた小さな音に、リイナは一抹の不安を覚える。

その音は、剣士であるリイナだからこそ聞きなれた音であったからだ。

「…まさか…」

すぐさま駆け寄り、自らの愛剣を探すリイナ。

しかし、リイナの懸念とは裏腹に、地面と頭を縫い付けている剣を見つけるのは簡単な事だった。

「…あった。…で、大丈夫……じゃないですー……」

だが、真実は残酷な物。

引き抜いたセントクルセイダーズの剣身は、半ばからポツキリと折れていた。

「リイナ、大丈夫……じゃないよね……。…ごめん」

「ふえええ……」

近寄ってきたシオンは、折れたセントクルセイダーズを握り締めながら泣くリイナを見て、かける言葉が無かった。

戦闘の収穫は少なく、損失はリイナの愛剣の無残な姿だった。

新しき力と別れ

「いつまで眠るの、こいつは…」

「…すー…すー…すー…」

「……………」

「こら。寝てる奴の頬をツンツンしない」

「……………ん」

シオンたちが駆け出してから、ユフィーは眠ってしまったメアを膝枕しながら待ちこけていた。

辺りが静かになったことに安心したのか、なぜかコロナが外に出てきており、今はメアの頬をその小さな手で突いていたのだ。

その事をユフィーが注意すると、コロナは渋々と言った様子でその手を引っ込めた。

「まったく…。あいつらはいつになったら帰ってくる…。言ってるそばからね…」

再度愚痴ろうとしたとき、ユフィーの目にこちらに向かってくる二人の姿が見えた。

「…遅いじゃない。いつまで待たせ…。何があったの？」

「ユフィーさん！ 聞いてくださいよー！ 剣が、剣が、剣があ！」

「ええい黙れ！ まとわり、つくな！」

ドガッ

「あいたっ」

泣きながら帰ってきたリィナの姿を見て、ユフィーが心配げに声をかける。

その声を聞いたリィナは、ユフィーに抱きつきながら声を荒げて泣く。

だが、その抱きつきをユフィーはリィナの頭を殴ることと静める。

頭を抑えておとなしくなった所で、ユフィーはシオンに聞く相手を切り替えた。

「で？ 本当にどうしたのよ。何でこんなに泣いてるわけ？」

「さっきの戦闘で、剣が真っ二つにね……。思い入れのある剣だったらしくて、こんな風に……」

「……打ち直さないの？ 大抵の鍛冶屋ではやってくれるでしょう？」

「いや、折れた断面を見たけど、かなり特殊な製法で作られていると思う。形も特殊だし、作った人がいる鍛冶屋にいかないと……」

「はあ…これで王国に行く理由が増えた訳ね」

「うん。…で、こっちからも質問。…この状況はなに？」

ため息を吐くが納得したユフィーに、シオンも場の状況の説明を要求する。

「ああ、これね。メアは疲れて眠ったの。なんでも、ビルスティアが魔剣を扱うのには無理があるからとか何とか。コロナについては知らないわ。勝手に出てきたみたい」

「なるほど…」

特に質問することもなかったのか、一言呟いただけで黙り込んでしまった。

そのシオンに、思いも寄らない人物が声をかける。

「……………王国、行くの？」

コロナがシオンの服の裾を引っ張りながら聞く。

その事に若干驚きながらも、シオンはコロナの目線に合わせてしゃがみ込みながら答える。

「うん。僕達は王国に向かって旅してるんだ。王国の王様に、伝えたいことと聞きたいことがあってね」

「……………なら、あげる」

「？ 何をくれるの？」

「……………帆船、コロナの所の」

「いいのかい？ 随分高い物のはずなんじゃ…」

「……………いい」

「…そっか。なら、ありがたく使わせてもらうことにするよ」

コロナの頭を撫でながらシオンは立ち上がる。

そしてユフィーとリイナを見ながら話を進めた。

「よし。なら、これで王国に向かう手筈は整った。帆船はコロナちゃんが出してくれるから、もうここから行けると思う。リイナが言っていたことも、これで確かめが効くし」

「そうね。まあ、でも今日は休まない？ 誰かさんは塞ぎ込んでるし、誰かさんは人の膝の上で寝たまんまだし」

「…そうだね…」

リイナにも話を振ろうとしたシオンだったが、ユフィーの言う通り何かをブツブツと呟いているリイナに近寄ることは、到底出来なかった。

「じゃあ、僕がメアを運ぶよ。コロナちゃん、メアの部屋まで案内して」

「…………ん」

連絡する事は無理だと思ったのか、シオンは逃げるようにしてメアの体を担ぎ上げる。

そして、屋敷の住人であるコロナに案内を頼むと、屋敷の中に消えていった。

「……で？ あたしにどうしろっていうのかしら」

「…………うう…………」

残された二人は、しばらくその場で固まっていたままだったとさ。

「ふわあああ…」

大きなあくびを一つ。

昨日の一件から一夜明け、出立の日の朝。

シオンは自らが選んだ部屋から大きく背伸びをしながら現れた。

「…………はあ…………」

朝の空気を楽しんでいるシオンの耳に、そんな憂鬱なため息が響く。

まさかと思ってその声がする方角に向かうと、そこにいたのは案の定彼女だった。

「…リイナ…ちゃんと寝れたの？」

「…一応は寝ました。眠らないと動けない体質なんで」

「…そんな体質ってあるんだ」

「…でも、昨日の事とか、剣を見ていると悲しくなっちゃうんです」

「思い入れのある物…なんだよね？ その剣は」

「はい。兄様に頂いた、初めての剣です」

折れたセントクルセイダーズを見ながら、リイナはそう呟く。

リイナの兄、レイソル・ハーキュリーはエスカレルニア王国の筆頭剣士であり、王国騎士団団長でもある。

リイナはそんな兄を誇りに思い、そして敬愛しながらも劣等感を抱いていた。

若くしてその才覚を発揮し、その腕を存分に振るう兄。

対して自分は、剣士になる夢を捨てきれない女。

そんな自分が、偉大なる兄の妹でよいのかと。そう思ってしまったのである。

ついでに言えば、その事で親と喧嘩し、さらにはシオンたちと出会ってしまっているのだが。

「そうなんだ。僕は一人っ子だから、そう言う気持ちは分からないや」

「そうなんですか？ てっきり下に弟さんや妹さんがいると思ってました」

「僕が物心つく前に母上は亡くなったからね。それに父上も側室をとらなかったから」

「…なるほどですね」

「それに、そういうのは贅沢な悩みって言うんだ。分からないなら、お兄さんがリイナの事をどう思っているのかを知りたいなら、全力でぶつかってみなよ。きっと、いい経験になると思う」

リイナの気持ちを整理させるために、シオンは自らの思いを述べていく。

きつと、彼女ならいい答えを見つけてくれると信じて。

「試しに啖呵でも切ってみたら？ 『私は兄様を越えます！』 見たいな感じでさ」

「…そうですね。知りたいなら、ぶつかってみればいい…。…やっぱり、シオンさんはいい王様になりますよ」

「恥ずかしいから止めて」

「あはは。いいじゃないですか。私の決意は、シオンさんがくれたんですから」

先ほどまでの落ち込んだ顔とは打って変わって、朗らかな笑顔で笑うリイナ。

「…私は、兄様を…いえ、誰よりも強くなります。慣例だ通例だ何か知らないです。私は、私の決めたことをやります」

「その言葉を待ってたよー♪ かつこいいー♪」

「ええ。その通りですね」

「……………ん」

「…まったく、心配かけさせないでよね」

リイナが決意の言葉を口にした瞬間、楽しそうな言葉を皮切りにゾロゾロと人が溢れてきた。

突然の出来事に、リイナは顔を真っ赤にして俯いてしまう。

そのリイナに助け船を出すかのように、シオンが疑問を口にした。

「何でここに風の聖霊がいるのさ。それに、かなり普通に会話してたし」

「聖霊は魔剣と共にあるのです。ですので、かなり前から私は知っています」

「……………聖霊さん」

「あたしはアイシーとの一件があるからね。慣れたわ」

「……………なんだろう。なんかこう、普通が普通じゃなくなっていく感じは」

「まあまあ気にしないでおこうよ♪ ボクはプレゼントしにきたんだからね♪」

くるくると宙を舞いながら、楽しそうに言うウィンディア。

その様は、ローブに隠れた幼い顔と同じような無邪気なものだった。

「プレゼント？」

「…確か、昨日の戦闘中に何か言ってたような…」

リィナがその発言に首をひねり、シオンが記憶を呼び覚ますかのように口元に手を押しやる。

そして、そんな二人にメアがきりだした。

「この風燐華をあなたに使ってもらいたいのです」

「ええ！？ ま、魔剣をですか！？」

黒塗りの装飾が一切無い鞘に収められた風燐華を差し出すメア。

その出来事の大きさに、リイナは困惑を隠せない。

手を前に最大限押しやりながら抵抗した。

「ビルスティアである私よりも、ヒューマティアであるあなたの方がいいんです」

「うんうん♪ それにボクは君が気に入った♪ これはもう決定事項だからねー♪」

「うう…」

「もらっときなつて。お兄さんとの件については必要ないかもしれないけど、旅には必要でしょ？」

「そうよ。あたしなんて剣なんか使えないから無理だけど、あんたは出来るじゃないの」

なおも抵抗しようとするリイナに、トドメの一撃となるシオンとユフィーの言葉が突き刺さった。

その事に軽く打ちのめされそうになりながらも、リイナはおずおずと手を差し出した。

「…じゃあ、私が使ってもいいんですか？」

「そう言ってるじゃない♪」

「…なら、ありがたく使わせていただきますね」

先ほどの啖呵を切ったときのような決意のある瞳で、リィナは風燐華をその手に取った。

「やったね♪ 君はこれから晴れて魔導剣士だよ♪ 難しいことしかないけど、頑張ってねー♪ じゃ、ボクはこれで当分出てこないけど、頑張っって覚えてね♪」

「え？ どうしてですか？」

「こうやって姿を見せるのって疲れるんだよ♪ 継承の儀もかなり簡略化したし、疲れたのだー♪ ってなわけでーバイバーイ♪」

音の旋律はそのままだが、少し疲れたような声でそう言葉を残すと、ウィンディアは薄緑色の風に包まれて消えていった。

それを呆然と見つめた後、リィナは手の風燐華を固く握り締める。

その行動を横目で見ていたシオンは、少し息を吐くと言葉を投げかけた。

「よし。リィナも大丈夫になったことだし、行こうか」

「ええ。メア、コロナ、世話になったわね」

「いえいえ。また何時でもいらしてください」

「……………来て」

ユフィーが珍しく感謝の意を残る二人にかけると、二人は同じように言う。

また遊びにきて。また会えるよねと。

「分かった。近くに来たときには立ち寄ることにするよ」

「本当に有難うございました!!」

先に帆船に乗り込んだユフィーに続き、シオン、リィナの順に帆船へと乗り込む。

そして、を送り出す二人は手を振って三人の旅を送り出した。

「行こう! 王国へ!」

元氣娘

「んーっ！ 今日も良い天気ー！」

水のせせらぎが聞こえる川の畔に、一人の少女が大きく背伸びをしていた。

漆黒の髪を二つに束ね、勝気そうな瞳を持った少女だ。

その少女の傍らには、燃え尽きた木の破片と、一本の槍。

刺突に特化したような、真っ直ぐに伸びた鋭利な穂先が特徴の槍だ、その反対側の石筒の部分についてある輪っかの部分には、なぜか狐の尻尾をモチーフとしたファーがついている。

「おー、冷たい冷たい」

川に手を突っ込んで、バシャバシャと気持ちよさそうに目を細めながら顔を洗うと、少女は置いてあった槍を手取る。

そして、おもむろにすうーっと思を吸い込み始めると――

「ああああああー！！！！」

大音量で叫んだ。

川の水がその音量で波立つほどの声量に、川の回りにいた動物や魔物達は逃げ出していく。

叫び声をあげた少女は、ものすごく満足そうな顔を見ると、手を空に掲げる。

そして、もう一度叫んだ。

「うっし！ 今日良い調子！ さあ！ 今日元気にお宝とか探すよー！」

トレジャーハンター、カナ・コルセニアの一日は、こうして始まったのだった。

「さーて、今日はどこから探してみよっかなー？」

カナがいるのは、エスカレルニア王国のある北の大陸の中でも有名な、ユミルの遺跡という名の寂れた遺跡だ。

その外観は所々崩れ落ちており、カナのようなトレジャーハンター達が独自に開けた穴などで、至る所が欠損してしまっていた。

と言う事は、そこそこ発掘が進んでいる証拠なのだが、このユミルの遺跡に関してはそれは例外である。

それが例外と言われる訳は簡単だ。

カチッ

「…やば」

遺跡の中に入り、順調に進んでいたカナの足元から、何かがはまるような音が聞こえた。

その音が聞こえたことにカナは顔を青くしながら、不穏な気配のする後ろをゆっくりと振り向く。

ガゴン：

「やっぱりかー!!」

猛ダツシュ。

埃が舞い立つほどに走り去っていくカナの後ろから、破格の大きさの鉄球が転がって来ていた。

この遺跡、奥に進むためには基本的に潜っていかなければならない。

その事は必然的にこういうトラップが活かされているということであり――

ゴロゴロゴロ：

鉄球にとっては、好条件の土地ということだ。

「ぎゃあぁー!!」

少女らしからぬ悲鳴をあげながら、次第にスピードをあげていく鉄

球から逃げるカナ。

走っている最中に後ろを振り向くと、迫る鉄球は走って来た道を半ば破壊しながらカナに迫る。

「な、何で毎回こうなるのよー！！」

確実に運が無い。そして不用心。

その事を自分で理解できていない以上は、カナにトラップを回避することは不可能であろう。

だが、そんなカナにも運があつたのだろうか。

目に涙を溜めながら走っていたカナは、涙で滲む視界の中、走る先の道に分岐があることを見つける。

一つは、狭いが確実に鉄球から逃れることのできる路地の用に曲がった道。

もう一つは、少し不安が残る広さだが、楽に走り抜けられそうな道。

その二つの道を見て、カナは少し悩みながらも一つの道に飛び込んだ。

「狭い方が鉄球はこないんだからこっち！」

と軽く叫びながら。

ゴロゴロゴロ…

「ふう……。何とか撒いたか……」

鉄球が通りすぎていく音を聞いたカナは、壁に寄りかかりながら安堵の息を零す。

だが、それも束の間。すぐに立ち上がり、路地の先を見つめる。

「さーて、お宝お宝♪」

そんなウキウキとした足取りと言葉を言いながら、カナは遺跡の奥へと向かって行った。

コツコツコツ……

遺跡の奥に、カナの履くブーツの音が響く。

途中にあった松明から火を拝借したカナは、手頃な木を燃やしながらその灯を頼りに奥へと進んでいた。

「うーん。やっぱ、この辺は結構持ち帰られてるよねー」

とある広い部屋とでも呼ぶべき空間に入ったカナは、左右に松明を振りながら辺りを確認する。

このユミルの遺跡は、先ほどのようなトラップがいくつも存在する。

だが、鉄球の用に一回きりの物が多いために、その後は簡単に通れ
てしまう。

つまりは、誰かが犠牲にならないと奥には進めないような作りにな
っているのだ。

しかし、そんなルートがあるはずなのにトラップに引っかかってし
まうカナは、かなり不用心である。

「お？ なーんか発見ー」

辺りをキョロキョロと見渡していたカナだったが、その視界の端に
ある物が止まった。

「うわ、カビくさ……古文書、かな？ ……読めない……」

カナが手にしているのは、ボロボロの深緑色の一冊の本。

石畳の上に作られた台座のような所に置かれていた本を、カナは興
味津々に眺めていたのだが、興味に負けて手に取ってしまったのだ。

そこに書かれている事を読もうとしたカナだったが、古くボロボロ
の本は読みずらく、書かれていた言葉が古語だったため、カナは読
めずにいた。

「ま、多分良いものでしょ。貰って帰ろーっと」

そう言ってその本を懐にしまって外に出ようとする、カナは少し
固まってしまった。

「あれ？　そういえば、あんな所に岩なんかあったっけ？」

カナが目になっているのは、来た道に鎮座する大きな岩。

退かすことは不可能そうな大きな岩に、カナは首を捻りながらも帰るために歩き出す。

だが、そこは運の悪いカナである。

突如聞こえてきた不穏な音に、体をビクリと反応させてしまう。

ギギィ…

「わっ！　な、なに！？」

背中におった愛槍『レストーション』に手をかけ、いつでもそれが抜けるような体勢になるカナ。

そのカナの目の前で、不穏な音は次第に強くなっていく。

目の前の、大きな岩から。

「…なーんか、すごーく嫌な予感しかしないんですけど…」

ギチギチギチ…バキッ！

音が変化し、姿を表す。

カナの目の前にあった岩が変異し、カナの目の前に立つ。

そして、吠えた。

「ボオウウウー!!」

「なんで『ストーンゴーレム』何かが出てくるのよ!」

突如岩から現れた魔物に、そこはかかない理不尽さを覚えながらも、カナはレストーションを抜いて構える。

叫んだ魔物、ストーンゴーレムはカナに向かってその太い腕を振り下ろした。

「よっと」

カナはそれを難なく避けると、ゴーレムの周囲を周回するように走り出す。

「ゴーレム系って遅いから楽なんだけど、硬いからなあ…」

周囲をぐるぐると回りながら、そう愚痴を零すカナ。

確かに、ゴーレムは土の魔物と言う事もあってその体は硬い。だが、その硬い密度を保つためにほとんどが密集して形成されるために、その動きはかなり遅い。

そのため、カナのように魔法が扱えない物にとっては、ただの岩を相手にしてるのと変わらないのだ。

「でもまあ、やるしかないんだけどね!」

気合を入れ直し、ゴーレムへと向かっていくカナ。

槍を中段に構え、突進していくような形をとったカナに、ゴーレムはようやくその体をゆっくりと向ける。

「遅いよ！」

ゴーレムの懷に素早く潜り込んだカナは、そのままの突進の威力のまま突っ込む。

そして、槍を前に一気に突き出す。

ガキン！

「やっぱり硬い……。でも、これなら！」

槍の向きを持ち替え、石筒で殴る。

鉄の芯の部分を使い、棍棒のように振るうカナ。

そこようやく、ゴーレムの腕がカナを襲った。

「そらっ！」

自らに迫るゴーレムの石の腕を、カナは槍を使って避ける。

その際、槍でその軌道を少しだけ操作した。

ドガァン！

「いえーい！ ビンゴー！」

自らの腕で自らの体を殴ったゴーレムは、そのまま力なく崩れ去っていく。

カナは自らの作戦が成功した事に、ガッツポーズを作って喜んでいた。

そして、今度こそ外へと出るために歩き出したのだった。

「えー！ 五百メルにもならないってどういうこと！？」

「いえ、ですから…」

エスカレルニア王国のとある港町の一角、とある鑑定屋の中でカナの抗議の声が響いた。

その抗議の声を受けた店主は、もう一度その理由を言う。

「この古文書は劣化が激しく、ほとんどの部分が読むことができません。それに、読み取ることができる部分においても、ほとんど知られている魔術呪文のために、買い取りの値段が下がってしまうんです」

「うそー！ あんなに苦労したのに…」

「よろしければこちらで預かるなり処分なり致しますが…」

「うーん…いいや、持ってるよ。燃やすならこっちでやるから」

「そうですか。ありがとうございました」

古文書を懷にしまい、店を後にするカナ。

だが、店を出て数歩ほど歩いた所で直ぐに沈んでしまう。

「あーうー…。もうちょっと高く売れると思ったんだけどなー」

頭を抱えて唸り出してしまふカナ。

ブツブツと何がいけなかったのかを思案しながら、もう数歩ほど歩く。

すると、すぐに頭を抱えるのもブツブツと呟くことも止めて、真っ直ぐに前を向いた。

「うん！ ウジウジ悩んでもしかたがない！ 私の取り柄は元気なんだから！」

全く以て切り替えの早いことである。

顔を両手でパシパシと叩くと、今度は晴れやかな笑顔を浮かべて歩き出す。

だが、なぜかまた頭を抱えてしまう。今度はさらに深刻風に。

「あー、そう言えば宿も取れないんだった…。また野宿ー？」

騒がしい少女である。

元氣が取り柄というより、感情の起伏が激しい落ち着かない子と言った方がいいのかもしれない。

その証拠に、またと言っては可笑しい表現かもしれないが、直ぐにいつもの表情に戻ってしまうカナ。

「ま、仕方ないか。それより、いろいろと探さないと……ん？」

グギョルルルル…

「…お腹が空くのは…止められない…っ…」

盛大すぎる腹の音が、カナの意識を削り取っていく。

バタッ

「…もーむーりー…」

ころころと表情をひとしきり変えた後、そう言って地面へと倒れこんだ。

到着

シーリーン……

シオンたち三人は王国に来て初めての試練に立たされていた。

三人は辿り着いた港で情報収集のために歩いていると、道のど真ん中で倒れている人影に出くわしたのだ。

お人好しであるシオンは助けようとするだろうし、ユフィーはあまり人と接点を持ちたがらない。

リィナに至っては、会話は簡単にできる方なのだが、持ち前の天然な性格で相手に伝わらない事を喋ることが多々あるのだ。

そのために、今この状況下に置いててもシオンはツツコミ役にならざるを得なかった。

「ちょっと、これどかしなさいよ」

「いやいやいや、人が倒れてるんだってば！」

「…大丈夫ですかー？ 生きてますかー？」

「風燐華で倒れてる人を小突かない！」

今にも魔法を発動しそうな雰囲気ユフィーを止め、安否確認のために突いているリィナの持っているその物の間違いを直す。

今日もシオンは突っ込み役なのだ。

「……うるさいわね。ここで倒れてる奴がいけないんでしょ？ どうせ、路銀に困った旅人とかじゃないの？ 放っておきましょう」

「そんな訳にいかないじゃないか。旅人だったら、情報には聡いはず。何も知らない僕達が情報を手に入れるには、最善の手段だよ」

知らない人間が嫌い。極度の人見知りであるユフィーを何とか宥め、人助けをしようとするシオン。

「それは…そうでしょうけど…」

「王都クルメニアまではまだ距離がありますし、問題ありませんよ？」

そこで唐突にリィナが話しに割り込み、渋るユフィーに微妙に勘違いした言葉を言った。

その微妙的な外れの言葉に、ユフィーとシオンは苦笑いするがユフィーは態度を変えることはないらしく、腕を組んでシオンたちの言葉に備えた。

「…うう…んー…」

だが、そんな時に倒れている人影からうめき声が聞こえ、身じろぎする音が聞こえてきた。

「…あれ？ 私…」

「…大丈夫？ さっきまでここで倒れてただけど…」

起き上がってキョロキョロと辺りを見渡す黒髪の少女に、シオンが心配そうな声をかける。

その声になんか驚いた様子の少女だったが、すぐに気を取り直して頭をペコリと下げた。

「あ、大丈夫です。いつもの事なので」

「いつもの事って…。道の真ん中に倒れていることが？」

「ええ。だってお腹空いてちゃ何もできないもん」

自信満々に胸を張りながらそう言う少女。

正直な所、威張る所ではないのだが、なぜかこの少女は自信満々なのである。

「…そう…なんだ…。でも、何で倒れるまで何も食べなかったの？」

「お金がないからに決まってるでしょ」

「そのとおり！！」

ビシィ！

シオンの疑問にユフィーが答えたとき、間髪入れずに少女の指が三人に向けられた。

まるでどこかの効果音が聞こえてきそうぐらいの勢いに、三人は気圧されてしまう。

「そうそうそう！ そうなんだよ！ お金がなかったら何も食べれないし、そのお金を手に入れようにも何も売れなかった！ これが世に言うジリ貧って奴だね！！」

「…いや、違うと思う…」

早口でまくし立てながら喋る少女の言い分を、シオンは小声ながらも突っ込んだ。

グゴゴゴゴゴ……

「な、何！？ 地鳴り！？」

そして唐突に、信じられない音が響く。

「…ちっ。ここにも魔物がくるっていうの？」

「港が襲われたっていう話は聞いたことがないんですが…」

その響き渡った音を魔物が近づいてくる音だと思ったユフィーは、背中におったスターレインの柄を握り締める。

リイナもそれに習い、風燐華を鞘から何時でも抜けるように構え、臨戦態勢を整えていく。

唯一その音を目の前で聞いたシオンは、あまりの音量の大きさにただただ驚いていた。

「…あははは…何か悪いことしたな…」

「何言ってるの!? あんたも早く構えるか逃げなさい!」

「…いや、そうじゃなくてさ」

グゴゴゴゴゴ……

その響く鈍い音はさらに大きくなり、三人を圧迫する。

「…ユフィー…違う、違うんだ。…魔物じゃない。いや、ある意味で言えば魔物だけど、戦わなくていいんだ」

「シオン? 何を言って…」

なぜか悲しそうな顔をしながら、シオンはユフィーの肩を叩いて安全であることを知らせる。

その真意が図れず、シオンに疑問の言葉を投げかけようとするユフィーだったが、すぐに理解した。

「…私のお腹の音なんだよね…ごめんね? そして何か食い物頂戴?」

「図々しいわ!!」

「つめたっ!!」

可愛く舌を出しながら言った少女に、ユフィーの氷を纏った突っ込

みが入った。

衝動

ガチャガチャガチャモグモグモグモグゴツクン

「ぷはー！！！！　い・き・か・え・っ・たー！！！！！！」

港から一転、近くにあった宿屋にシオンたちはいた。

そのシオンたちは、自らの目の前の机の上に広がる世界に絶句している。

信じられないほどに散らかった机。

原因は積み重ねられた皿と、満足そうにお腹を擦っている少女を見れば検討がつくだろう。

「いやー、ごめんね、これだけ食べちゃってさ。ここ一週間ぐらい何も食べてなかったんだよねー」

「…い、一週間…」

「…それでこの食いつぷりな訳ね…」

「…ほわー…お皿の塔が出来てますよ…」

汚れた口元を充てがわれた白い布で拭きながら、少女は自らの状況を説明する。

だが、その説明も三人にとっては上の空で、机の上の広がった惨状

を見つめてほとんど聞いていなかった。

「あ、私の名前はカナ。カナ・コルセルニアだよ。ありがとうね、命の恩人さんたち。カナって気軽に呼んでね」

「…そんな大それた事はしてないよ。僕はシオン・セナ。僕もシオンでいいよ」

「…ユフェルニカ・シーファスよ」

「リイナ・ハーキュリーです！ よろしくお願いしますね、カナさん！」

カナが頭を下げながら自己紹介した事に、シオンは少し苦笑しながらもその自己紹介に答えていく。

途中、ユフィーの氷の態度には少し違和感を感じる物があつたが。

「…：そういえば、カナさんって槍を使って戦うんですか？」

リイナが今まで気になっていたであろう事を口にした。

カナの背中に担がれた長槍。鉄槍のようで、持ち手の部分が黒光りして鈍い輝きを放っている。

剣士として、そして同じ女としてそのような武器を持ち歩いている訳をリイナは知りたかったのだ。

「ああ、これ？ 私、トレジャーハンターやってるの。その時に魔物に襲われること何てたくさんあるから、こうやって自衛？のため

に持ち歩いてるの」

「ふえー…。そうなんですか…すごいですね！」

「そう言うリィナちゃんだってすごいのもってるじゃん」

今度は逆に、カナがリィナの腰にさした風燐華を指差した。

確かに、この世界では剣を鞘に入れておく事自体が珍しい。

武骨な両刃剣が多いこの世界では、鞘に入れておくなどという動きの阻害される行為は基本的にしないのだ。

ただ唯一、エスカレルニア王国の極東の地域だけで造られる『刀』だけが例外とされている。カナはその事を言っているのだ。

「あ、これですね。風の聖霊さんからもらった魔剣、風燐華です」

その刀の輝きをカナに見せようと、鞘から刀身を抜こうとするリィナ。

だが、その動きを焦ったシオンが必死に止めた。

「ダメだって！ まだあんまり制御しきれていないんですよ！？
こんな店の中で出さないの！！」

「あ、そうでしたね。…すいません」

事実、リィナは未だ風燐華の力を制御しきれていない。

帆船に乗っている間に、魔力の練り上げの感覚をユフィーに習ってはいたのだが、風燐華自体が持つ魔力に引っ張られて細かな制御が出来ていないのだ。

そのために、下手をすれば刀を鞘から引き抜いただけで暴風が巻き起こるという危険がある。

シオンはそれを懸念して、リィナに刀を抜くのを止めさせたのだ。

だが、その懸念とは裏腹にカナの両目は完全に輝いてしまっていた。

「すごいすごいすごいすごーいーい！ー！！ 魔剣と違ってどうやって手に入れるの！？ なにそれなにそれ、すつつつつつごーいーいーく気になる！ー！！！」

身を乗り出しながらシオンとリィナに詰め寄るカナ。

両目をキラキラさせながら涎を垂らして詰め寄るその様は、もはや恐怖としか言いようがなかった。

「ちょ、ちょっとカナ、落ち着い——」

「…凍らせるわよ？」

「ひうっ！」

「ユフィー！ いきなり何するんだ！」

暴れ出そうとするカナをシオンが抑えようとしたとき、絶対零度の魔力の流れとユフィーの冷やかな声がカナを貫いた。

その寒気にカナは小さく悲鳴を上げながら飛び上がり、その隣にいたシオンはユフィーの行動を咎める。

「…ふん」

その咎めもユフィーの耳には入らず、ユフィーは小さく鼻を鳴らした後に宿屋から出て行ってしまった。

「ユフィー！ リィナ、カナ、勘定はこれで済ませておいて。僕はユフィーを追いかけてくる」

ユフィーを追いかけるため、シオンは持っていた有り金を全て机に置いた後宿屋から飛び出していった。

「…ひー、ふー、みー…：うわ…：何この大金…：これだけ食べたのにまだおつりがくるよ…：」

「シオンさん…：どこにこんな大金隠してたんでしょ…：」

机に置かれた金貨銀貨様々なお金の数々に、カナは純粹に驚き、リィナはどこか驚く所が違っていた。

仕組まれた襲撃

「……………」

宿屋から出てきたユフイーは考えていた。

なぜあんな事を言ったのか。なぜ出てきたのか。なぜ、こんなにもムシヤクシヤするのか。

その答えは分かっている。

カナだ。カナの元気な性格、言動、雰囲気。一つ一つが似ているのだ。

ユフイーのその腕の中で命を落とした友人、帝都崩落の際に命を散らしたミーナ・ルナーシアに。

極度の人見知りが攻撃的になったユフイーでも、初対面の人間にあらんなに敵意を向けたことはない。

それだけ突き刺さるのだ。

友人を守れなかった現実が。

そのためユフイーはあんな態度をとってしまったのだ。

「…らしくないわね…」

眩きを漏らす。

割り切ると決めたあの時に、そんな思いを二度としないために強くなる」と誓ったのに。

今でも、ユフィーの心は贖罪を求めている。

「ユフィー！ どこだー！」

突然出て行ったユフィーを探して、シオンは港へと出てきていた。

ユフィーのどこか固かった自己紹介。そしてその後に放たれた氷の言葉。

シオンも薄々感じていた。カナが似ているのではないかということに。

ミーナ・ルナーシア。ユフィーの友人で、シオンも王子という肩書きを極力隠して村を巡っていた時に知り合った少女だ。

良く言えば元気。悪く言えばウザい。そんな少女だった。

シオンがユフィーの村でお世話になっていたときにも、ユフィーとミーナはどつき漫才のようなことを繰り返していた。

その事を思い出し、シオンはユフィーの事が心配になって追いかけてきたのだ。

「…ユフイー、変な事してなきゃいいけど…」

早々簡単に早まったことはしないとは分かっているシオンだが、それでも心配せずにはいられなかった。

とは言っても、土地勘のない場所で逸れてしまっただけではどうしようもない。

連絡手段のないこの状況では、どうする事も出来ないのだ。

「…探すしかないか…。でも、どこから行こうか…」

「それならここからならどうです？」

「っ！」

突如真後ろから聞こえた聞き覚えのある声に、シオンは嫌な予感を覚えて飛んだ。

カテドラルを抜き放ちながらその声の主に向かって叫ぶ。

「何の用だ！ 『ヒーナス』！」

「おお怖い。そう怒らないでください。今回もお話だけですよ」

「話？ それなら僕もある。去り際にいった言葉…『時の少年』って一体何？」

シオンにはずっと引っ掛かっていた。会ったことも見たこともない

ような人間に、急にターゲット呼ばわりされ、果てには謎の単語を投げかけられる。

何のためにそんな言葉を言ったのか、そして、なぜ魔物の名前を名乗っているのか。

分からないことばかりだった。

だが、『ヒーナス』は口を不気味に歪ませ、こう言った。

「その事ですか。お答えしてしまえば非常におもしろくなくなるのですが…まあいいでしょう。本来はこの話のためだったのですから」
一人で納得したように頷く『ヒーナス』。

そして、シオンに向かってゆっくりと手を差し出した。

「我々と共に来ませんか？ 世界を変えるために…」

「世界を…変えるため…？ 何を言っているんだ！ 僕が言ったのは『時の少年』と言ったことについて教えろと言うことだ！」

「安易に説明していますよ？ あなたの力が必要です。私たち、ルナニスクルメアの悲願のために」

「ルナニスクルメア？ それは一体…」

聞きなれない単語を聞かされたことにより、シオンの困惑は最高に高まる。

それを好機と見たのか、『ヒーナス』はまるで演説を行うように高々と宣言した。

「さあ！ 私の手を取りなさい！ あなたの力は世界を壊し、そして創造する力！ その万物を越える力があれば、世界は変わるのです！」

「…っ！ 僕にそんな力はない！ もし仮にあったとしても、僕はそんな思いで使ったりはしない！ 世界を変えるなんて、そんな馬鹿げたこと…！」

パチン！

シオンの言葉を遮るように、『ヒーナス』が空に向かって指を鳴らす。

その異様な音の大きさにシオンが違和感を抱いていると、空が真っ黒に染まった。

「なっ！ これはシンセミアの時と同じ…」

「議論は平行線をたどるようですね。それに、あなたもまだ力には目覚めていない。なら、じっくり待ちますよ。我々が耐えてきた年月に比べればずっと少ない時間なのですから」

またも意味深な台詞を残しながら『ヒーナス』はこの場から離脱しようとする。

「待て！ この魔物達は、君が操っているのか！？ そしたらなぜ！」

「ええ、その通りです。そしてこの一連の魔物の襲撃事件、私たちルナニスクルメアが行っています。…復讐のために…」

「…復讐？　っ！　ま、待て！！」

シオンの制止の言葉も虚しく、『ヒーナス』は飛び上がり空の黒と同化してしまう。

そして、それが襲撃のサインだったらしく、空を埋め尽くしていた黒色が一部分ずつ欠けていく。

空からの突進を開始したヒーナスの群れが、王国の港町を襲っていた。

「くそっ。ユフィーを探さないといけないし、リイナとカナも……ええい！」

的確に自分だけを狙ってくるヒーナスを切り伏せていく。

その執拗な数の邪魔者に、思考がまともに纏められない事に苛立ちを覚えるシオン。

「これだけ狙われてちゃ…。…もういい。考えるのやめだ。…全部倒す！」

カテドラルを構え、かかってこいと言わんばかりに煽るシオン。

その挑発が届いたのか、ヒーナスは今まで以上の大群でシオンに襲いかかってきた。

ガシャアアン！！

宿屋にいたリィナとカナは、突然のガラスが割れる盛大な音に驚いた。

ドゴオオン！！

「う、うわああ！！！」

「キャアア！」

「ま、魔物だー！！！」

さらには壁が吹き飛ぶ音、人々の悲鳴を聞き、リィナとカナは顔を見合わせた。

「カナさん……」

「うん。なーんか、嫌だね。シオン君とユフェルニカちゃん、無事かな？」

「大丈夫ですよ！ お二人とも強いですし！」

「そっか。ならリィナちゃん。私たちがやることは、一つだよね」

「はい！」

大きく二人で頷きあった後、カナとリィナは宿屋を飛び出した。

もちろん、お金は置いたままで。

そして、二人の目の前に飛び込んで来たのは、真っ黒な空と、魔物の嘴だった。

「せやあ!!」

それをいち早く察知したカナが、身を捻りながら『レストーション』を振るう。

体の円運動に合わせて振るわれたレストーションの柄は、ヒーナスの頭を捉え地面へと叩き落とした。

「おー！　すごいですね！　って言うか、それで殴れたんですか？」

「そうだよ？　鉄槍だからねー。固いのさ」

素直にその技に感心するリィナに、カナはレストーションを担ぎ直しながら答える。

だが、そんな悠長な構えをしている暇は無かった。

「って、そんな事より早く住民を逃さないと！」

「あ、はい。分かりました！」

そのカナの一言を境に、逃げ惑う住人を先導しなるべく被害の少ない場所へと先導する二人。

不可解な事に、かなりの大人数で移動していたはずの二人だったが、まったく言っていないほどヒーナスは襲ってこなかった。

だが、その事は今の二人には関係ない。

今は住人の無事が優先なのだ。

「ご無事ですか!？」

「あ、王国騎士団の人だ!」

その二人の前にやってきたのは、ごくごく一般的だが少し装飾の多いコートに身を纏った女性。

頭に生えた狐耳とふわふわと揺れる尻尾から、ビルスティアであることが分かる。

「ええ!! ナ、ナリアさん!？」

「リィナ様!？」 どうしてこの様な所に! と言いますか、心配したんですよ!？」 家出などなさって!」

「え? 家出? リィナちゃんって家出少女だったの?」

「ち、違いますう! ああもう! ナリアさんがここにいて事は、もう安心してもいいんですよね!？」 私は試したいことがあるので戻ります!!」

偶然の再会に戸惑いながらも、リィナはきっぱりと言い放つ。

焦りと恥ずかしさが入り混じった、奇妙な赤い顔ではあるが。

「あーあ、行っちゃったよ…。で、騎士団の人。ここの住人の安全は、あなたたちが持ってくれるの？」

「え？ あ、はい。責任を持ってお守り致します」

暴風のようなリィナの動きに、ナリアは半ば呆けていたが、すぐに持ち直してカナの質問に答える。

その答えを聞いたカナはすごく満足そうに笑った後、ナリアに続けてこう言った。

「んじゃ、私も戦いに行くんで、よろしくお願いします」

シュタツツと言う音が聞こえてきそうな見真似の敬礼をした後、カナはリィナの後を追いかけていった。

「あ、ちょっと！！ …大丈夫でしょうか…。リィナ様は重度の方向音痴だというのに…」

ナリアの懸念は、知り合って数時間のカナには分かるはずが無かった。

「凍てつく氷塊。彼の者へと降り注げ！ 『氷塊ノ雨』！」
アイアロワ・レイン

向かってくるヒーナスの群れに向けて、魔法を発動する。

その魔法に合わせ群れの頭上に現れた拳大の氷の塊は、的確にヒィナスを一体一体潰していく。

向かって来ていた群れの一角を潰したユフィーは、そこで少しため息を吐いた。

「…ふう…。…すう…はぁ…」

魔力の流れを見極めるため、ため息を深呼吸に入れ替えるユフィー。魔力は体力と似ている。使えば無くなるし、落ち着いて体を癒せば回復する。

つまり、走った後に体を落ち着けると同じ行為をすれば、微弱ながら回復はするのだ。

「…もう…誰も…あんたたちに傷つけさせないわ」

そう言うユフィーは、スターレインを振りかざして呪文を唱えた。

「…氷よ。糸のように張り詰め、細く強靱に変われ。我が敵を捉え離さない、永遠の呪縛となれ！ 『膜ヲ氷オ（アイスピルネア・ネット）』！」

スターレインの宝玉全てが輝き、広範囲に魔法を発動させるためにその内包された全ての魔力を解放する。

放射状に流れた魔力に合わせ、辛うじて見える程度の糸が周囲を完全に覆い込んだ。

その糸が見えないヒーナスは、糸に触れた途端凍った。

冷気で造られた糸の檻が、触れる者全てを凍らせていく。

「…何か少ないけど…まあいいわ…。ここにいる者全て、あたしが殺してあげる…」

憎悪と憤怒と悲しさのこもった瞳で、ユフィーは氷の糸の檻の中で不敵に笑った。

過去と未来と

ザシュッ

「…はぁ…っ…こ…これで何体目だ…」

無数に襲いかかるヒーナスの群れを切り伏せ、シオンの体力は限界に近づいていた。

いくら倒しても減らないその数。

どこからでも沸いてくるようなその感覚に、シオンは嫌な予感を覚えていた。

「…やっぱり、あの男が命じているのか…？　だから、こんなに僕の所に…」

思い出されるのは、先ほど対峙していた男の言葉。

『ええ、その通りです。そしてこの一連の魔物の襲撃事件、私たちルナニスクルメアが行っています。…復讐のために…』

「…復讐って何さ…！　そんな事しても何も変わらないっていうのに…！」

空を覆う真っ黒な影。その影の名前と同じ男の言葉は、シオンの胸の中で渦巻いていた。

実際、シオンの懸念の元である男の言葉は、今のこの状況を作って

いる。

半数以上の数をシオンの元に向かわせているのだ。

明らかに、シオンだけを殺そうとしている行動だ。

「…でも…ある意味助かったかな？ …僕が頑張れば、他には行かないんだろう？」

初めに見せた挑発的な笑みを見せ、シオンはカテドラルの爪を鳴らす。

「…君がどこで見ているかは知らないけど…」

グシャツ

「…僕は決して…屈しないよ」

突っ込んできたヒーナスの一匹を、その言葉と共に貫く。

そして、今度は逆に自分から飛びかかっていった。

「…どこでしょうか…ここ…」

完全に迷子になったリィナは、立ち止まって辺りを見渡していた。

普通に考えれば、空に浮かぶヒーナスの群れを追いかけていけばい

いのだが、リイナにその考えは無かった。

と言うより、それぐらいの考えが少しでもあれば、重度の方向音痴にはならないで済むのだ。

「…うう…どうしようか…」

「リイナちゃん！」

「カナさん！ どうして!?!」

「どうしてもこうしても、こっちが聞きたい！ なんでぐるぐるぐるぐる同じ所を回ってるの!?!」

「へ?」

突然目の前に現れたカナにリイナが驚いていると、さらにカナの口から発せられた言葉に首を傾げた。

キョロキョロと辺りを見渡し、手を打つ。

「あ。何か見たことのある景色ですね」

バシン！

「だから同じ所を回ってるだけだと言うとーに!!」

漫才のように、どこから取り出した紙の束でリイナを叩くカナ。

痛みはないようで、リイナはケロッとしていた。

「ってこんなことしてる場合じゃない。行くよ、リイナちゃん！」

リイナの手を取り、ヒーナスのいる方角に向かって駆け出していくカナ。

「二ヶ所だけかなりの数が集まってる…でも他にもいる…。リイナちゃん！ あそこの二ヶ所は後回し！ それ以外を潰すよ！」

「うわー、どんどん近づいて行ってますよ」

「…ダメだこの子」

落胆しながらも、走る速度は緩めないカナ。

「あ、もうここでいいです！ ここならやれるはずですから」

少し大きな広場に出たときにリイナがカナの手を振りほどき、止まる。

その行動に、カナは少し苛立ちを覚えた。

「やれるって何を？ もう少しだけど、また一人にすると迷子に…」

「大丈夫です。…行きましょう、『風燐華』」

集中しながら風燐華に手をかけ、ゆっくりと鞘から引き抜いていくリイナ。

「…こ、これが魔剣…。…は、初めて見た…」

魔剣の姿とその力の大きさに、カナは苛立ちも忘れ見惚れてしまう。
薄緑色の風を纏った、風燐華の魔剣としての真の姿。

小規模の台風がそこにあるような威圧感に、カナは吞まれていた。

「魔剣闘技、『飛翔・貫』^{ひしょう つらぬき}」

厳かにそう呟くと、構えた風燐華をゆっくりと前に構えだす。

刀の先を目線の先に。体を開き、深く落とす。左手を前に突き出し、
右手のみで刀をしっかりと構える。

左手を突き出し、右手の型を後ろ向きに引き絞った奇妙な形で、リ
イナは構えを止めた。

そして、魔法を唱える。魔導剣士としての、初の呪文を。

「吹き荒べ、数多の風よ。幾重に連なり、敵を貫く矛となれ。『風
香槍々（ウィミル・スピナー）』！」

呪文を唱えたと同時に、引き絞っていた刀を前に突き出す。

風燐華に纏われた薄緑色の風の輝きが、その動きと連動し強まって
いく。

そして、突き出された刀の先から放たれたのは、高密度の暴風の槍。
その破壊的な密度を持った槍は、寸分違わずヒーナスの群れを貫い

た。

「うわ…すご…。…あれだけいたのが一瞬で…」

魔法の威力を見たカナが感嘆の息を漏らす。

その威力の証拠に、極端に集まった二ヶ所以外のヒーナスの群れは、綺麗さっぱり無くなっていた。

「後二ヶ所ですよ。私は港側に行きますから、カナさんは町側に行ってください」

「分かったけど…大丈夫なの？ 一人で行けるの？」

かなりの大きな事をしたというのにケロッとしているリイナの口から出た言葉に、カナは少し不安を覚える。

先ほども綺麗に迷っていたのに、ここまで自信満々に言える理由は何なんだろうかと。

「…大丈夫です。大丈夫、大丈夫。これだけの距離なんです。たったこれだけ…いけるいけるいけるいけるいけるいけるいける…」

呪詛のように『いける』をつぶやいていくリイナ。

その何とも言えない雰囲気、カナは少し青ざめた顔をしながら逃げるように言った。

「…わ、分かった。…じゃ、じゃあ、私は町側に行くからね」

「はい。お気をつけて」

最後には呪詛を止め、にっこりと笑ってカナを送り出したリィナだったが、カナの顔色が戻ることは無かった。

パキイン

「ちっ。もう保たないわね…」

ユフィーの目の前にあった氷の盾が綺麗な音を立てて崩れていく。

その様を舌打ちしながら見つめ、次の一手を打つためにスターレインを構えるユフィー。

だが、スターレインの宝玉の輝きは既に失われ、ユフィー自身も細かい息を吐いていた。

「…限界が、近いわね…。くそっ、一人だとこんなものなの？」

悪態をつきながら自らの体の状況を確認していくユフィー。

怪我こそおっていないが、自らの魔力、体力はかなり限界に来ていたのだ。

この状況で怪我でも負おうものなら、そこからの巻き返しは不可能だろうと思うくらいに。

そんな時だ。聞きたい台詞が一番会にくい相手の声で発せられたのは。

「ユフェルニカちゃん！ 無事！？」

「っ！ カナ・コルセルニア！？」

「何で態々全部言ったの？ まあいいけど…。加勢に来たよ！」

「なんであんたが…シオンとリィナはどうしたの？」

「リィナちゃんは港側に行った。シオン君もそこにいるんじゃないかな？」

「港側？ あの子一人で行かせたの？」

「聞かないで。あの呪詛の念には耐えられないから」

「????」

突然のカナのそんな発言に、ユフィーはただ首を傾げることしか出来ない。

だが、すぐに素直になれないユフィーの性格が出てしまった。

「あの子に着いていけばよかったじゃないの。あたしはそこからでも追いかけていくから」

だが、カナは予想外にもその言葉をほぼスルーした。

「またまたー。そんな事言ってもダメだよー。さすがにこの量を一人でやるのは間違いでしょ。はんぶんこしようよ」

「ダメ。嫌だ」

「えー、ケチー」

素直に拒否の言葉を出したユフィーだったが、カナはそれに被せるように口を尖らせてユフィーを非難する。

そんなカナの態度に痺れを切らしたユフィーは、怒気を放ちながらカナに詰め寄った。

「：あんたねえ、いい加減にしなさいよ。あたしは一人でもいいって言ってるの。ほっといてよ」

「嫌だよ。だって、ユフェルニカちゃん…消えそうだもん」

「え？」

先ほどの態度から一転。悲しそうな顔をしながらそう言ったカナ。

急に変えられた態度に、ユフィーは素に戻って声を上げた。

「私は君たちの事ほとんど知らないけどさ。それでも仲良くしたいの。だって、人の出会いは一生の宝物でしょ？　それが例えどんな人でも」

どこか影のあるような物言いに、ユフィーは気圧されてしまう。

だが、カナはすぐに表情を戻して空を見上げた。

「ま、今はとりあえずこいつらを片付けないとね！」

リーチの長さを活かし、間合いに入ってくるまで高度を落としていたヒーナスを刺し貫く。

空に向かって伸ばしたレストーションを戻し、肩に担ぐことで次の体勢に移行する。

タメを作るように体を捻り、何かを待つ。

そして、貫いて落ちてきていたヒーナスの死体を、思いっきり打った。

「とりゃああ！！」

掛け声と共に繰り出された砲弾は、数瞬前まで同族だったものを同じ肉塊に変えていく。

そのありえない芸当に、ユフィーは目を丸くしていた。

「ね？ こいつらいたんじゃ、何も話も出来ないからさ。ささつとやっちゃおうよ」

両肩にレストーションを担ぎ、首を傾げながらユフィーに提案するカナ。

その言葉を聞いたユフィーは、薄く笑いながらその言葉に答えるた

めに魔力を練り始める。

「そうね…。…ふふ、悩んでいた自分がバカみたい…」

「え？　何か悩み事あったの？　私で良ければ相談に乗るよー」

突っ込んでくるヒーナスの群れを迎撃しながら、悠々と答えるカナ。

その今まで悩んでいた元凶からの言葉に、ユフィーの堪忍袋の緒が切れた。

ブチィッ…

「へ？」

そんな音が周囲に響き、背中に走る猛烈な悪寒と肌をザラつかせる殺気に、カナの動きが固まってしまう。

それは無論、本能で動いている魔物達も例外ではなく、この場にいるほとんどの生き物が行動を停止していた。

唯一、唯一人を除いて。

「…ふふふ…こんなに怒っているのはいつ以来かしらねえ…。…ミィナがいた時でもここまで怒ることなんか無かったのに…」

最大級の真っ黒い笑みで場を支配するユフィー。

ギギギと錆びた人形のように首を回しユフィーの状況を認めたカナは、戦慄が奔ったように身を縮めた。

「ユ、ユフェルニカちゃん……あのー……」

「……あんたは後であたしがゆーっくりとお仕置きしてあげるから……いまは避けきりなさい……」

「へ？　ちよっ、お仕置きって何！？」

「目覚めよ、無慈悲なる氷の女王。愛する者すら凍らせる、その妖艶なる吐息で全てを氷に染めよ……。冷やかな、眼差しを持って。」

：『凍テツク死都^{デグバ・フローズン}』」

呪文を言った瞬間、ユフィーの周囲が一瞬で白に染まる。

煌めく雪原に変わり行く町を見たカナは目を輝かせていたが、次の瞬間その輝きは失われる事になった。

「っ！　いや、ま、ちよっ、あのエリアに入ったら凍っちゃうの！？」

見てしまったのだ。

ヒーナスが氷の世界に入った瞬間、綺麗な氷の彫刻へと成り果てた姿を。

それを見て恐怖したカナは、何とかその範囲から離脱しようと試みる。

だが、それはヒーナスも同じようだったようで、人と魔物、二つの存在がこの時ばかりは気持ちを同じにしていた。

氷の女王。それを目の前で体現するユフィーから。

「…往生際が悪いわね…」

「ひうつ!!」

「…大丈夫よ…人間は凍らないから…」

そう呟いたユフィーは、怯えて逃げ腰になっているカナの肩をゆっくりと掴む。

その周囲では綺麗なオブジェが着々と出来つつあり、二人の周りは美術館のようになっていった。

「どどどどど、どーしてなのかなー。人間が凍らないってー」

「…それはね…あたしがあんたにお仕置きするため…」

かなり吃りながら質問をするカナに、ユフィーは艶かしい手つきでカナの頬を持った。

「…さっきまで魔力も限界だったのに、怒ってみたらかなり楽じゃない? だから、あんな魔法が出来たのはあんたのおかげ…」

「じじじ、じゃあ、許してくれたりしないのかなー…ってか何で怒ってるのかなー…?」

ユフィーに頬や首を撫でられながらも、カナは努めて明るい声で質問を続ける。

だが、ユフィーはその手つきを止めることはなく、カナの耳元へと口を持っていった。

「…あたしの知り合いはね…こうやってすると面白かったんだけど…あんたはどうなのかしらね…」

「っ／＼／＼！！！！」

目の笑っていない笑顔で、カナの耳元で囁きつづけるユフィー。

その行為に顔を真っ赤にしながらカナが耐えていると、ユフィーの口がカナの耳を甘噛みした。

「つつつつ！！！！！！！！」

「……クスクスクス…こんなものでは終わらせないわよ……。…もつ」といい声で鳴いてちようだい……」

声にならない叫び声を上げ、身悶えするカナ。

だが、その声を聞いたユフィーは満足そうな笑みを浮かべながらも止める気は無い。

そしてこの後、シオンとリィナが合流するまでユフィーのお仕置きはカナに続いたのだった。

ゴウッ！

ヒーナスを切り刻んでいたシオンは、唐突に聞こえた風を引き千切る音に驚く。

その音がする方角に目を向けると、ヒーナスの群れに向かって風の砲弾が次々に飛来していた。

「あれは…」

「シオンさー！ーん！！！」

「…やっぱりリィナだ」

シオンの予想通り、感動の叫び声を上げながらリィナがシオンの元へとやってきた。

「やったやった、会えましたよ会えましたよー！！ アレからは迷子に何かなってないですから、大丈夫です！」

「アレから？ ま、いいや。一人でここまで来れたんだ、すごいじゃないか」

「えへへー」

褒められたことが嬉しいのか、素直に照れるリィナ。

だが、すぐにシオンの様子を見てその表情は引き締まった。

「し、シオンさん！ ボロボロじゃ無いですか！」

「ん？ ああ、怪我は無いんだけど、結構服がね…」

自らの状況を再確認するシオン。

着ていたコートの裾は千切れ、至る所にヒーナスの嘴によって裂かれた傷。

そして、かなりの量の返り血。

さすがに誰がどう見ても満身創痍と思うだろう。

だが、シオンは何事も無いかのようにコートを脱ぎ捨て、ヒーナスの群れを見つめ直した。

「…そう言えばリィナ。風燐華を出してるみたいだけど、きちんと使えるようになった？」

「はい。特に今はこんな状況なので、あまり制御に力を入れなくていいからですけど…」

「それでもいいさ。魔法なら、この真っ黒な空も簡単に青に戻せるでしょ？」

笑いながら未だに無くなる気配の無いヒーナスの群れを指差すシオン。

その仕草を見て、リィナは大きく頷いてこう返した。

「そうですね…。…なら片付けちゃいましょうか」

「うん。よろしく」

「…螺旋よ。風の流れに乗り、回れ。轟け。そして、嵐となれ！」
『轟ノ風』ロー・ウインド！」

リイナが呪文を唱え終わった後、風燐華を基点に莫大な風が集まる。そこにあるだけでも小規模の台風のような感覚をもたらすが、今の状況ではその言葉でも生易しい。

圧縮された風の塊が唸り、轟く。

その風を、リイナは風燐華を横薙に振るうことで手放した。

「やあっ！」

小さな気合と共に、風が風燐華から離れる。

風燐華という檻を失った風は、その範囲を爆増させて進む。

天災が起こったかのような嵐が、空にあるヒーナスの群れを飲み込んだ。

バシッ

「つとと。結構飛んでくるね」

ザンッ

「えいつ。…そうですね」

嵐に煽られほとんどのヒーナスは空へと舞い上がるが、あの世への切符を取れなかった者がシオンたちに向かって飛んでくる。

急激な気圧の変化で絶命してしまっている死体を、シオンはカテドラルで弾き返し、リィナは風燐華で切り伏せていた。

「…ふう…。…ありがとう、リィナ。正直、一人じゃどうしようもなかったからね。助かったよ」

「いえいえいえ。私は特には何もして無いですよ。だって、頑張ったのはシオンさんですから」

嵐が去り、シオンがカテドラルについた血を拭き取りながらリィナに礼を言う。

礼を言われたリィナは、顔を照れで赤く染めながら風燐華を一度露払いしてから鞆に収めた。

「そうかな？ ま、なんにせよ終わったんだ。被害も少ないみたいだし、良かったよ」

「そうですね。やっぱり港ですから人が少なかったからですね」

「…いや、本来この襲撃は無かったはずなんだ」

「え？ どういうことなんですか？」

「『ヒーナス』…。あいつが現れて言ったんだ。『復讐のため』っ

て」

吐き捨てるようにその時のことを話すシオン。

彼にとって、過去に縛られることはもう止めたことだ。

過去にどんなことがあっても、それを後悔した所で未来には繋がらない。

それが、ユフィーと出会った村で学んだことだからだ。

「復讐……。何があの人を駆り立てるんですかね」

「分からない。ある程度のことは聞いたから、王様に会ったときに聞いてみることにするよ」

「あ、それなら王国騎士団の方が来ているので、それに混じってクルメニアまで向かいましょう。その方が早いですし」

「分かった。じゃあ、ユフィーとカナを探しに行こうか。あっちも探してるかもしれないし」

「はい！」

戦いの終わりに

「……何してるの？」

ユフィーとカナに二人と無事合流できたというのに、シオンの口から出てきた言葉はそんな言葉だった。

実際の所、シオンたちがユフィーたちを見つけることは容易かった。急激に変わった氷の世界がそこにあったからだ。

その白銀に変わってしまった世界を見つけ、シオンとリィナはそこにユフィーがいることに安堵したのだが、見つけたときの状況が良くなかった。

そこにカナがいることにも驚きを覚えたのだが、それよりも不可解な事があったのだ。

二人の体勢である。

ユフィーがカナを組み敷いている。そこまでは分かるのだが、その雰囲気がとてもヤバイ物になっていた。

「……お仕置き？」

「シオン君助けて！ このままだと私、何か大切なものを失う気がするから！！」

珍しくキョトンとした表情のユフィーに対し、組み敷かれているカ

ナは必死の形相でシオンに助けを求める。

そして、その場所において本来助けるべき側であるリィナに声がかからなかったのは、とある理由があった。

「……………」

顔を真っ赤にして顔を隠したまま、蹲っているリィナ。

だが、その隠された指の隙間からきちんと二人の事は見ていた。

恥ずかしい事は恥ずかしいが、興味はきちんとあるらしい。

「…はあ…どうしてこうなったのやら…。ま、とにかくユフィーはカナからどく。で、リィナはきちんと立つ」

「え？ 止めちゃうんですか？ もったいないです……」

「どの口が言うかどの口が」

「いひゃい。いひゃいでしゅ、かにゃひゃん」

先ほどまで真っ赤になっていたくせに、シオンの一言で離れた二人に口を尖らせるリィナ。

だが、ユフィーの束縛から逃れたカナが恨みを込めてその頬をこねくり回したために、変な声が出てしまっていた。

その様を見て、シオンは今日何度目かになるため息をしっかりと吐いた。

「…はああ…。とにかく三人とも、これからの事を連絡したいんだけど、いいかな？」

「構わないわ」

「私もいいよー」

「は、はなひてくだひゃーい…」

「…カナ？ いい加減離してあげて」

「おっと」

未だにリィナの頬をこねくり回していたカナを咎めるシオン。

注意されたカナは、なぜか体を仰け反らせながらリィナの頬から手を離れた。

「…話の腰を折られたけど、とりあえず言うね。僕等の元々の目的である王都には王国騎士団と共に向かうことにした。ユフィーとリィナはそれでいいね？」

「ええ」

「はい。ナリアさんならきつと分かってくれます」

シオンの提案に、二人して納得する。

そして次にシオンはカナに対してこう言った。

カナに関しては王国に来てから出会った人間だ。出会って間もない人間が、そうそう簡単に自らの意見に賛同してくれる訳が無い。

そうシオンは思っていた。それに、わざわざ素性を隠しておく必要がないとも。

だが、その不安はいい意味で裏切られることになる。

「カナ。僕とユフィーは帝国の人間なんだ。そして、僕の本当の名はシオン・セナ・ファルカス。帝国の第一王子だ」

「……へ？」

自分の話すことに集中してしまっているシオンに、カナのその間の抜けた声は届かなかった。

「僕等は帝国で起こった事件を王国に伝え、そして打開策を模索するためにここに来たんだ。それで——カナ？」

そこでシオンはようやく気づく。

肩をプルプルと振るわせ、俯いて何かを我慢しているようなカナの態度に。

その態度をどう解釈したのか、シオンは少し慌てながらカナに再度声をかける。

「え、えっと、カナ？ どうし——」

「かつこいいいいー！ー！ー！ー！！！！　なにそれなにそれなにそれなにそれー！！　王子様が仲間を引き連れて旅ですか？　かつこいいいなー、凄いなー。それに失礼だけど何か楽しそう！！　私もついて行って良い？」

リィナの魔剣の時のような凄まじいテンションで捲し立てるカナ。

前はここでユフィーがキレたのだが、ユフィーは対処法を学んだようでいち早く耳を手で塞いでいた。

だが、その予見が出来ていなかった二人は、耳を違う意味で塞いで頭すらも抱えてしまっている。

「…カナ…声が、おっきい…ってか、痛い？」

「…ううー…この前よりも威力が上がってる気がしますよー」

耳を抑えながら蹲る二人。リィナに至っては目に涙を溜めている。

「…ごめんなさい。声がおっきくなるのは分かるんだけど、なーんか知らず知らずのうちににおっきくなっちゃうんだよねー」

「まあいいけど…。で、さっき言ってた言葉だけど…」

耳を塞いでいても聞こえる大音量だったために、シオンは聞き逃してはいなかった。

カナの『ついて行って良い？』と言う言葉を。

「うん。だって楽しそうじゃん。楽しいことに目が無いのがカナち

「やんなんだよー？」

「目が無いって、あんた分かって言ってるの？ さっきみたいに、魔物に襲われること何かざらにあるのに…」

ストン！

軽い感じで受け答えをしているカナを咎めようと、ユフィーが話に割り込む。

だが、その答えと言わんばかりにユフィーの体の横を、突き出されたカナの槍が通り過ぎる。

軽快な音を立て、地殻の瓦礫に突き刺さった槍。その先には、魔物の姿があった。

「…まだ残っていたのね」

「残って、っていうより生き返っちゃった方かな？」

カナの言う通り、よく見るとその体には水滴が付着しており、ユフィーの氷から出てきたことがよく分かる。

おもむろに刺さった槍を引き抜き、肩に担ぎ直して本来言うべき言葉を言うカナ。

「ね？ 大丈夫でしょ？」

「…棒読みで言われてもね…」

「…確かにね…」

にんまりとしたカナの笑顔を見て、シオンとユフィーはほぼ同時に呆れる。

だが、リイナだけはカナの旅の仲間入りを喜んでいた。

「わー！　じゃあカナさんもこれで仲間ですね！　じゃあ、私はナリアさんに伝えてきますね？」

「ちょ、方向音痴のリイナちゃん一人じゃ絶対に無理！」

喜びのあまり一人で走り出してしまったリイナを、慌てたカナが追いかける。

そして、二人その場に残されたシオンとユフィーは、お互い顔を見合わせて笑いあった。

連合結成

「はい。では共に参りましょう。このまま移動していれば、一日程度で王都には着けますので、どうぞ疲れをお取りになって下さい」

「分かりました。ありがとうございます」

「いえ。先触れは出しておりますので、着きましたら謁見の手筈は整っているはずです。それまではどうかお休みになってください」

ナリアがそう言い残し、天幕の中から出て行く。

その受け答えを終えたシオンは、急に肩の力を思いっきり抜いた。

「…ふはあ…。やっぱり畏まった言い方は疲れるよ…」

「何言ってるのよ、王族のくせに」

「王族だけど、僕の帝王学嫌いは有名だよ？ 何回も逃げ出してたし」

「…その一貫であたしの村に来ていたりしたの？」

「そうともいうね」

揺れる天幕の中で、ユフィーとシオンはそんな会話をしていた。

シオンたちがいる場所は、比較的温厚な大型の魔物の『シユタルゲ

ルト』の背中に作られた天幕の中だ。

騎士団では急を要する案件や、単独行動を行う以外には馬を使わない。

ただでさえ規模が大きいために、それだけの馬を用意する力が無いためだ。

そのために、長距離の移動は魔物を使っているのである。

「シオンさーん。食事貰ってきましたよー」

「お肉だお肉ー」

その天幕の中に、手に持てるギリギリの量の食料を持ったリィナとカナが戻ってくる。

帝国から来た理由や、その他諸々を説明する必要があったシオンとユフィーを見て、二人が気を利かせてくれたのだ。

「ありがとう二人共。…って、カナが持ってるのお肉しかないじゃないか」

「いけない？ お肉は力の源だよ？」

「いや、それにしても持ってきてすぎでしょ」

カナの両手、いや、体全体を覆うように持たれた様々な種類の肉は、かなりの量があった。

そのうちの一切れを口に運び、おいしそうな表情を浮かべるカナに、シオンはまたもため息を吐いた。

シオン。今日は厄日ではないのだろうか。

「リィナはバランスよく持ってきてるけど、何で甘い物が多いのかしら？」

「…糖分は頭を動かすのに重要だって、兄様に聞いたからです」

「なぜ目を逸らす」

ユフィーはリィナの持ってきた食料を検分し、リィナに聞く。

周到に隠された甘めのデザートやフルーツ類の多さの理由を。

「…だって、食べたかったんですもん…」

そう言われてしまっただけは汎論も出来やしない。

諦めたユフィーは、その手の中にある一つのフルーツを取り出し、かじる。

「…むぐ…美味しい」

「ですよねですよね！　じゃあもう食べちゃいましょう。残すなんてもったいないです！」

「そうだね。じゃあいただきますか」

「いただきます！」

そして、シオンの音頭とカナの元気な答えと共に食事は始まった。

「……………」

荘厳な雰囲気の城の存在感に、ユフィーとカナは呆然と立ち竦んでいる。

対して、シオンとリィナの二人は何も感じていないようにその場に立っていた。

それもそのはずだろう。この二人に関しては王族と王国お抱えの客員剣士の家系に生まれているのだ。

慣れていないという方がおかしいだろう。

一般庶民であるカナや、ただでさえ王国に来たことが無いユフィーにとっては、少々刺激が強すぎるのかもしれない。

「こちらになります」

ナリアの案内により城の中へと招かれる四人。

終始城の中身を面白そうに眺めていたカナ以外は無言で。

「うわ！　ねえねえシオン君、メイドさんがいるよ！　やっぱりシ

オン君の所にもいたの？」

「…カナ？ 静かにね」

そんな軽い騒ぎを起こしながら四人が向かったのは、玉座。

謁見の場でもあり、この城の中心でもある。

「はっはっはっはっ！ よく来てくれたな！ 心から歓迎するぞ、王子よ！」

その玉座に座っていたのは長身で骨太の男。

『武王』とも呼ばれる、ここエスカレルニア王国の王だ。

シオンの父、クルトよりも若い印象を受けるその体からは、一種の威圧感を感じる。

右目に大きくかかる紫色の髪を揺らしながら、シリアナ・リース・フィールダーその人はシオンに手を差し出した。

「こちらこそ。突然押しかけてすみません。あと、王子っていう呼び方はちょっと…」

「む、そうか？ なら殿下で良いか？」

「シオンでいいですよ」

「ふむ。なら俺もシリアナで良いぞ。堅苦しいのは俺には似合わない」

「ははは。でしょうね」

手を握り合いながらそんな会話をしている国王と王子。

話している内容としてはかなり軽いのだが。

その様を見ているユフィーとカナは、かなりの異次元な場所に自分たちがいることを理解し、若干身を引いていた。

「ん？ おお、そなたはハーキュリーの所の娘ではないか。シオンと共に来たのか？」

直立不動で立っていたリイナの姿を、シリアナが見つけ手を差し出してくる。

「は！ とある偶然により帝国に出向いております、そこで出会いました。そこからは旅を共にさせていただいております」

リイナの口から飛び出たかなりの固い発言に、残る三人は驚き、シリアナは苦笑いした。

「やはりそなたは固いな。いや、あの男が柔らかすぎるだけか」

「兄様でしょうか？ その男というのは」

「ああ。あの男と話すのは気が楽だ。後、心配しておったぞ？ 急に王国から消えたこと、家出してきたことを」

「う…。あ、あれは…」

「まあいい。大筋は知ってはいるからな。そこで俺からの言葉だ。あまり気にしなくても良い。『そなたのしたいことをしろ。さすれば、必ず道が見える』」

「したいことをする…」

シリアナの口から発せられた威厳のこもったその声に、リイナはシオンの言葉を思い出す。

『それに、そういうのは贅沢な悩みって言うんだ。分からないなら、お兄さんがリイナの事をどう思っているのかを知りたいなら、全力でぶつかってみなよ。きっと、いい経験になると思う』。

その言葉がリイナの脳裏に流れ、決意を濃くしていく。

「…王。兄様が今どちらにいますかご存知ですか？」

「…ふむ。…あ奴なら確か、騎士団の団長であろう？ 団舎にけば分かると思うが？」

「分かりました。ありがとうございます。失礼致します！」

面白い物を見たというように目でリイナを見つめた後、シリアナはリイナに情報を与える。

その情報を聞いたリイナは、すぐに玉座から飛び出して行ってしまった。

「…これでよいな。若者の旅路を見るのは良い物だ」

「…そんなものですか」

「ああ。で、案件を聞こうか。かなり逸れてしまったがな」

「あ、はい。これです。僕達がここに來た理由です」

「…むう…」

シオンが取り出したのはクルトが認めた文。

その文の中身を読んだシリアナは唸り、シオンにその目を向けた。

「…帝都崩落…そうか。王国でも帝国でも同じようなことが起きている。先だって、そなたらも魔物の襲撃を港で撃退したとか」

「はい。その知らせを届ける事が、僕等の指名です」

「…なら、この文字はどうなるのだ？」

読んでいた文をシオンへと向け、そこに書かれていた文字を見せるシリアナ。

そこに書かれていた五文字の言葉に、シオンは驚きを隠せなかった。

『息子を頼む』。この五文字の言葉に。

「…ははは。さすが父上だ…」

乾いた笑いをこぼし、その言葉の真意を受け止めるシオン。

シリアナの性格は豪胆。そして雑だ。ならばこの言葉の取る意味とは――

「シオンよ。そなたの好きにしていよいよだぞ？」

やはり、悪く言えば投げやりな方だった。

「…分かりました。なら、僕の思いを伝えます。そして、港での襲撃で起こったこと、分かったことを」

「…ほう？」

一度唾を飲み込み、滅多にしたことが無い経験にシオンの体が強張る。

だが、意を決し、言った。

「連合を組んでもらいたいのです。王国と帝国、二つの国が力を合わせるんです」

決意の在り処

シオンが放った、港での一部始終の状況、その思いに、場は静まり返っていた。

「…ルナニスクルメア…。聞いたこともないな。…クーよ、いるか
！！」

「はいにゃ、王様！！」

突然天井から降ってきた影は、シリアナの目の前で臣下の礼を取る。

その現れたビルスティアの少女に、三人は驚いて声もでなかった。

「『ルナニスクルメア』、『魔物の名前を名乗る男たち』。この二つを中心に何か出てこないか探してきてくれ」

「分かったのにゃ！！」

頭に生えた猫耳と尻尾を揺らしながら、クーと呼ばれた少女は天井へと飛び上がった。

その処理しきれない行動の数々に耐えかねたシオンは、シリアナに質問を投げかけた。

「王…先ほどの者は…」

「ああ、あ奴か。あ奴の名はクー。王国の隠密部隊の隊長をやって

いる者だ。とは言っても、一人しかいないのだがな」

「そんなものがあつたんだ…」

「まあ気にせんでくれ。それで連合の話だが、そなたの話の通りであるのであれば、早急に事を進めねばならん」

「はい。復讐なんて馬鹿げてる…」

唇を噛み締め、悔しさや苛立ちの入り混じった感情を露にするシオン。

だが、そのシオンに対しシリアナが投げかけた言葉は意外なものだった。

「よいではないか、復讐など。それで晴れるというのなら」

鼻で笑いながら、シオンの口上を無下にするシリアナ。

「…過去に縛られたまま生きて、どうなるっていうんですか」

「人は過去に縛られて生きるものだ。誰でもな。過去があつて、今がある。今があるから未来があるのだ」

そこでシリアナは一度言葉を区切ると、シオンに向かって諭すように言葉を紡いだ。

「未来はただそこにあるものではない。掴み取るものだ。過去の過ちを、過去の思いを引きずりながらも、それは掴み取れる。未来を、過去より良くしようとする者の手ならな」

「…それでも、復讐は間違ってる。それで悲しむ者が増えたら、それはただの自己満足だ」

「それが分かっているのがそなただ。ただ、頭ごなしに否定するのではない。すべてを受け入れ、そこから意見を出せ。それが上に立つ者の語りだ」

「上に立つ者の語り…」

「そう俺は思っている。まあ、人の考えなどそれぞれだ。各々の最善の考えを示せ。そしてそれを信じる。さすれば、必ず良い未来が掴めるはずだ」

玉座に座り直しながら、シリアナはシオンに自らの思いを語る。

王としての先輩からの意見として。一人の男としての意見として。

それが、シリアナが出した『息子を頼む』の言葉の答えだった。

「さて、他の者にも聞いておこうか。その二人の少女にもな。敬語はいらん。話してくれ」

手を差し出しながら、ユフィーとカナの意見を聞こうと促すシリアナ。

「…あたしは復讐でもいいと思ってるわ。実際、相手は魔物だけど復讐に似たようなものを誓っているし」

「ほう？ 友か？ 家族か？ 失った者があるのだな」

「友よ。大切な、ね」

遠い目をしながらシリアナの質問に答えるユフィー。

その目には、ミーナの姿が映っているのだろうか。

「…ならそなたはどう思っている？ 復讐を果たせたときの、未来がそなたには描けているのか？」

「え？」

「復讐とは、自分を殺してさえも憎き相手を討つ行為だ。それだけが原動力になっている事も多い。それが無くなった時、そなたは未来を生きたるのか？」

静かな目でユフィーを見つめるシリアナ。

「それは…生きたるわ。必ず。あたしは他にも、生きる意味があるから」

チラッとシオンを横目で見た後、ユフィーは自信満々に答える。

その時に見える、無意識の内に放たれた氷の空気に、シリアナは満足そうに頷いた。

「良い覚悟。良い思いだ。さて、そなたはどうだ？ シオンとこの少女、ハーキュリー家の者の話を聞いてどう思う？」

今度はカナに手を向け、話を促すシリアナ。

萎縮した様子のカナだったが、その促しの言葉に合わせて語りだした。

「：私は正直、そんな気持ちなんて、思いなんて持っていない。トレジャーハンターの仕事だって、気がついた時にはなってたし：まあ、お茶は好きだけど：」

明確な答えは無いようで、他の三人のような思いが無いことを申し訳なさそうに答えるカナ。

だが、シリアナはそれを簡単に認めた。

「よい。悩みが無いことはすばらしい。だが、それでは生きている事にハリが無いだろう？」

「いやでも、元気に生きようとか、明るくしようとか思ったことはあるよ？　だって、自分から楽しくしてないと、楽しくならないでしょ？」

「それが分かっているのならいい。そこからそなたの思いを見つけよ」

「そんな簡単に言われてもなー：」

「ふ：。簡単に言ってしまったって悪かったかな？　そなたの思いは、先ほどの言葉の中にある。これが俺から言える、最初で最後のヒントだ」

「??:??:?」

薄く笑ったシリアナの表情と言葉の意図が分からず、首を傾げてしまふカナ。

そんなカナを見てシリアナはもう一度薄く笑った後、三人に切り出した。

「さて、俺がこんな話をした理由を言っておこうか。正直、良く分かっている状態です。答えていただろう？」

玉座の肘掛に体を預けながら、シリアナは語りだす。

エスカレルニア王国、国王としての言葉を。

「たったこれだけに人数でも、思いが被ることはない。人はそれぞれ生きているのだから。だからこそ、このような事件が起きると俺は思っている。人が人として生きる限りはな」

今度は立ち上がり、シオンに向かって歩み始めながら独白を続けるシリアナ。

「だが、その考えは間違っている。それではすべての事件を容認していることと同じだからな。そうおもうであろう？」

シオンの前で立ち止まり、確認とも取れる声音で語るシリアナ。

その声に、シオンは自らの意見を被せた。

「はい。でも、王の考えの下ではそれが正しいと思ってらっしゃるんですよね？」

「ああ。人が人である限りその行為はなくなる、そう思っている。忠臣達には怒られてはいるがな」

シリアナは次にユフィーの下へと歩き出す。

「そなた達の思いは、そなた達自身の思い。彼らの思いは彼らの思い。その思いが交錯するからこそ、人の思いは面白いのだよ」

「：でも、それでは理解は無理ではなくて？　だって、認め合ってしまえば、考えをぶつけることは、思いを語り合うことは出来ないわ」

もつとも意見ユフィーがぶつける。

結局、シリアナが言いたい事とは『分かり合う事』だ。

人が人として生きるためにぶつかり合うのなら、お互いがお互いを認める必要がある。

ならば、『分かり合う事』こそが重要なことではないのか。それをシリアナは言っているのだ。

だが、それではその諍いが必ず起こる。分かり合わないために。

「それはもつともだ。重々承知している。だが、だからこそ大切なのだ。人と人が理解しあう。共通の目的のためにやれることが」

そこまで言って、シリアナは最後にカナを向いた。

「この少女が言った、『楽しく生きる事』。これが重要だと俺は思っている。誰もが楽しく生きられる、なら、不満も起きまい」

「え？ え？ 私が良い事言ったの？」

カナはあまり分かっていないようで、軽く狼狽してしまっているが。

だが、それを意に介さずシリアナは言葉続けた。

「ま、何が言いたいかというと、簡単にまとまってしまうのだが…。
：『連合結成の条件は、人が楽しく生きられる世界を目指す事』だ」

本当に簡単に纏めてしまったシリアナは、その言葉を言った後、再び玉座へと戻ってしまった。

「…じゃあ、大丈夫なんですね？ 連合のことも、ルナニスクルメアの事を止めることも」

「ああ。だが、今は情報が無い。クーが戻るまでには時間もかかるだろう。ゆっくりとしていくがいい」

「はい。お言葉に甘えて、ゆっくりとさせて頂きます。あ、リィナに関してはどうでしょうか。出て行ってしまいましたけど…」

「それは騎士団のものが連れて来るだろう。無論、そなたら四人で続けるのであろう？ 真実を確かめる為に」

「はい。僕が必要とされている理由、僕の『力』が何なのか。それに僕が動けば奴らも来るでしょうから」

「あたしは最初からそのつもりよ。あたしの生きる意味も、したいことも、全部ここにあるのだから」

「楽しそうだからね。友達と一緒に行くのは、当然のことだよ!」

その三人の言葉を聞き、シリアナは満足そうに頷く。

そして、三人を代表するようにシオンがこう言った。

「僕らは、旅を続けますよ。だって、まだやらなくちゃいけない事がありますから」

決闘という名の死合

ザッ！

土を蹴る音が響く。

質素な門構えに、頑丈そうな塀の数々。

リイナは今、城でシリアナからもたらされた情報の通り団舎の建物の前に来ていた。

「……迷わずに……来れました……」

そのリイナ自身はかなり驚いているようで、肩で息をしているはずなのに、その苦しさはまったく感じていないようだった。

「……っ！」

キィ……

これから自らのしようとしている事に少し身じろぎするリイナだったが、意を決してその質素な門を押しした。

軽い音を立てる門を抜けた後にリイナがまず向かったのは、団長室。

自らの兄であり、王国騎士団騎士団長レイソル・ハーキュリーに会うためだ。

そこなら誰かしらいるはずだろうし、リイナも過去の経験から、そこに兄がいることが多いことを知っていた。

そして、その団長室の前に立ったリイナは軽く手を震わせながらも、しっかりと扉をノックした。

「おう。いるから入ってきてくれ」

控えなノックの後に聞こえてきたのは、つい最近まで聞いていた敬愛する兄の声。

今すぐにでも兄の名前を呼びながらその胸に飛び込みたいが、今のリイナの心境では無理な話だった。

「……兄様」

扉を開きながら、そう口にするリイナ。

そのか細い声に、リイナと同じ白銀の髪を持った青年は、弾かれたようにその方向を向いた。

「リイナ！？ お前、今までどこに行ってたんだ！ 家出したって聞いて、心配してたんだぞ！？」

血相を変え、リイナの元に駆け寄ってくるレイソル。

そんな珍しい兄の様子に、リイナは少し驚きながらもしっかりと返した。

「す、すいません……。私のせいで心配かけて……。でも、もう大丈夫で

す！ 怪我なんかしてないですし、兄様に言いたいこともできましたから」

「言いたいこと？ 俺にか？」

一瞬で元気になった妹の様子を訝しみながらも、レイソルは妹に見せられる最上級の笑顔を向ける。

だが、その笑顔はすぐに凍りつくことになった。

「…兄様。私と、決闘して下さい！！」

リイナの口から飛び出た『決闘』の二文字。

普段なら模擬戦や試合と言っている単語を、あえて剣士同士の『決闘』と言った意味が、レイソルには一瞬分からなかった。

だが、妹が悩んでいることなどとうに熟知している。

剣士になりたいが、女という性別、家柄の重さがそれを邪魔する。そして、レイソル自身という大きな身内の壁。

その悩みを、レイソルは理解していた。いや、理解できる部分があったのだ。

最年少で就任した王国の客員剣士。それと兼任する最年少の騎士団長。

それを妬む人間は多くいた。だからこそ、レイソルは強くなったのだ。信頼を置ける人間であると、皆に分からせたのだ。

今、妹がその岐路に立っている。ならば、兄としてその背中を押してやることは当たり前ではなからうか。

「——ああ。構わない。：やろうか」

その思いと共に、レイソルはリィナの申出を受けたのだ。

「兄様、兄様は本気で来てください。私も本気でいきますから」

風燐華を掲げ、出し惜しみは無いようにとリィナが提案する。

決意のこもった、そのいつの間にか大きく成長した妹の目を見ながら、レイソルは不敵に笑った。

「：ああ。リィナも、本気で来るんだろう？」

拳を握った片手をリィナに突き出し、確認の声をあげるレイソル。

その突き出された片手に自身の拳を当てると、リィナは踵を返しながらこう言った。

「ええ。楽しみです」

楽しそうな、滅多に見せない顔を見せると、リィナはレイソルから離れていった。

そして、十分に離れた後に試合開始の合図を放つ。

手に握られたコインが空高く投げられる。

そのコインが地上に落ちて甲高い音を立てたとき、二人はほぼ同時に言った。

自らの愛剣に、戦うぞという呼びかけを。

「…行きましょう。『風燐華』」

「…行くぞ。『フレイムリパルサー』」

鞘から抜き放たれた風燐華は、港の時と同じようにその刀身に風を纏いながら猛る。

対して、レイソルからは轟炎が立ち昇った。

その手に纏われたのは、灼熱の炎。猛り狂う炎は、何かを形成するように渦を巻いていく。

そしてその炎が収まったとき、レイソルの右手に握られていたのは太い幅広の長剣だった。

中心部分が歪曲し、鋭利な刃物の証拠である光を反射している、レイソルの魔剣だ。

「リイナ、お前も魔剣を？　しかも風か…これは荒れるな」

「頂いたんです。帝国の友人から」

ダッ！

「ちっ！」

リィナの不意といってもいいほどの攻撃に、レイソルは剣身を傾けることで受けきる。

だが、鏑迫り合いでは明らかにレイソルが不利であった。

あちらの刀は細く、早い攻撃が得意な武器だ。だが、その刀の刀身に纏った風が、その『折れやすい』と言う弱点を上手く隠していた。

そして、その風は牙を向き、レイソルの首を狩り取ろうと迫っている。

「っ！ はあああ！！！」

気合を込め、手にあるフレイムリパルサーに力を流し込む。

爆発的に赤く燃え上がった剣身が、風燐華の風を焼いていく。

その事に驚いたリィナは一旦退く。自らの風が、焼かれるのではなく『払われる』感覚に。

「良い判断だ。あのままなら、俺がその刀を斬っていた」

燃え盛る剣を構え直し、両手を前に突き出し、剣を逆手に構えるレイソル。

「魔剣闘技。払え、炎よ。我が前の敵を焼き葬れ。『カタルシス』」

逆手に構えた剣を目一杯引き絞り、眼前の空間すべてを薙ぐ。

その薙いだ空間すべてが燃え上がり、一種の炎の波となってリイナに迫る。

だが、リイナは冷静だった。まったく同じモーションでまったく同じ行為に挑んだのだ。

「魔剣闘技。凧げ、風よ。我が前の敵を吹き飛ばせ。『ファスティナ』」

広範囲に広がった竜巻は迫る炎の波とぶつかり、ありえない爆発を起こす。

そのありえない威力にリイナが少し驚いていると、その白煙の中からレイソルが飛び出してきた。

必殺の威力を孕んだ突き。その唸る剣身がリイナの首を捉えようかと言うとき、その剣身が弾かれたように上を向いた。

リイナの足が剣を蹴り、そのまま体の回転を利用し刀でレイソルの足を薙ぐ。

レイソルはその刃を少し上に飛ぶことで回避し、タイミング良く踏みつけようとする。

だが、それは許すまじと刀を引き、手から離れるのを防ぐリイナ。

一撃一撃が死を孕んだ、本当の『死合』。

この二人の共通の『決闘』は、まだまだ続く。

「やあああ！！」

「おおおお！！」

二人の気合の声が交錯し、同時に放たれた袈裟斬りが空間を切り裂かんばかりの勢いで振り下ろされる。

その機動を微妙に変化させながら、二人の袈裟斬りはお互いの得物に当たった。

ガキイーン！

甲高い音を響かせながら、またも鏝迫り合いが始まる。

だが、今度はリイナが先ほどの感覚を忌避してか、攻め込んでいなかった。

それを好機と見たレイソルは、すぐに力を剣に集め大きな火球を放つ。

至近距離で放たれた火球に、リイナが為す術もなく敗れさると思ったとき、リイナの体から風が溢れた。

溢れ出た風は火球を包み込み、押し返す。

そして、その火球はレイソルへと衝突する――。

「払え！ フレイムリパルサー！！」

叫ぶと同時に、剣身が光る。そして、目前に迫った火球を掻き消した。

斬ったのではない。弾いたのではない。ましてや、受け止めたのではない。

ただ、そこにあった火球が消えてしまったのだ。

「な……………」

その事に驚きを隠せないリイナ。だが、レイソルだけは不敵に笑い、リイナをただ見ていた。

「フレイムリパルサーは『払う者』。炎限定だが、強制的にその炎を消すことができる」

肩に担ぎ直した剣身を横目で見ながら、レイソルはそう淡々と呟く。

そして、力を込めてこう言った。

「…次で、終わりにしよう。さすがにここまで壊れるとは思っていなかったからな」

周りの惨状を見ながら、レイソルが呆れたような声を出す。

地は風で抉れ、その抉れた部分は炎で焼かれている。

戦場という雰囲気醸し出している惨状に、レイソルは決着をつけ

ようと言ったのだ。

「強くなったな。だが、ここまでだ」

「まだです。この一撃で、兄様を超える。それが私の、前に進む決意。そして、仲間と約束したことですから！」

刀を腰溜めに構え、そう決意の言葉を紡ぐリィナ。

魔力を集中させ、風燐華へとその魔力を流し込む。

流れた魔力は風燐華の纏った風を爆発的に増幅させ、嵐となる。

光り輝く、その魔力の風にレイソルは身構えた。剣を斜めに構え、自らの体すべてを隠すように。

「…来い。お前の思い、すべてを受け止めてやる」

剣の影から覗く、兄の鋭い眼差しに、リィナは息を呑んだ。

初めて挑む、本気の兄。挑んだのは、本気の自分。それを後押ししてくれたのは、初めての仲間。

その始めて尽くしの決闘に、リィナの心は躍っていた。場違いでも何でも、楽しいことに変わりは無かった。

「…では、いきます！ 私の最高の技…。魔剣闘技。揺れ動く、嘆きの暴風。彼の風が呼ぶのは、魔の嵐吹く風！ 『魔風ノ嘆き（ディジア・ファグナ）』！！」

そう呪文を唱えると、リィナは風燐華にありったけ詰め込んだ魔力を解放した。さながら、今までの鬱憤をすべて吐き出すかのように。猛る風は嵐となり、レイソルに向かって進む。さほどスピードは速くないその動きだが、それでもレイソルは動かなかった。

変わりに、自らの魔剣を持つ者としての矜持を示していた。

レイソルは魔法を扱える才を持っていない。いや、聖霊に魅入られて魔剣を振るっている訳ではないのだ。

これは『フレイムリパルサー』自身に自我があることに理由があり、その自我が生み出す自らの幻影に打ち勝った者だけが、この魔剣の柄を握れるのである。

それをレイソルは成した。騎士団の遠征中に偶然見つけたこの剣の主となり、数多の魔物を屠ってきた。

だが、今回は違う。相手は生身の人間、それも身内だ。全力を出す事があったても、殺す気は無い。

だからこそ、レイソルは示したかった。自らの妹に、自らの力で道を切り開こうとしている少女に。

「……うおおおお！！！」

真っ向から受け止める。ただの嵐ではない、魔法によって生み出された、天地の事象を引っ繰り返すほどの、強大な嵐風を。

すべてを燃やせと念じる。猛る狂う嵐を。自らに害をなす、すべて

の物を燃やせと。

その念に応えたのか、フレイムリパルサーから紅蓮の炎が上がる。空高く上がるのではなく、レイソルを中心に紅蓮の竜巻を形成し、リイナの嵐風を真っ向から受け止めた。

「…お前は強い。認めてもらいたい気持ちも分かる。俺と比べられて、焦燥の気持ちがあることも。俺達は知っている…」

その紅蓮の竜巻の中にいながらもよく通る声で、レイソルはリイナに語りかける。

「…だからこそ、俺達の思いも分かってくれ。お前にはお前の道がある。それを、父様も母様も不器用ながら分かってもらいたかったんだ。無論、俺もな」

「…それは…もういいんです…。…それを気づかせてくれた人がいたから、諭してくれる人がいたから…！ だから私は、今こうして兄様と戦っているんです！」

すべてを理解し、それでいてもなおぶつかってきた可愛い妹に、レイソルはようやく気づく。

環境が人を変えるのではない。会話によって、気持ちを受け入れることで、人は変わるのだと。

それが分かっていたいなかったから。レイソルやその父や母も、リイナを変えることは、成長させることが出来なかったのだ。

ドゴオン…！

思考の切れ間に滑り込むように、紅蓮の竜巻と嵐風が爆発を起こし、消える。

その音で何かが吹っ切れたのか、レイソルは柔らかな微笑を浮かべた後、リイナに言った。

リイナにとって、最も重要な一言。一番聞きたくて、一番言っただけだった一言を。

「強くなったな、本当に。…お前はもう、一人前だ。けども、一人じゃないからな。…それだけを、忘れるなよ」

「…っ…っぐ…はい…！」

泣く事を止められず、リイナは泣いたまま元気よく答えた。

月の存在

はじめの決闘が終わり、騎士団の人に連れられて城に帰ってきたリイナを見たとき、三人はその顔を見て驚いた。

泣いた跡があるのに、晴れやかな笑顔。軽い足取り。それらすべてが、リイナがきちんと出来た事を物語っていた。

その後は今後の確認や、情報が入るまでここで待機すると言うことを伝え、シオンたちは各々あてがわれた部屋の中で休息を取った。

そしてその翌朝。

再び、シオンたちは玉座の間に集まっていた。

「よくぞ集まってくれたな。昨晩はよく眠れたか？」

「はい。一応は」

「あたしは無理ね。ベットが柔らかすぎたわ。逆に肩がこった」

「あー、それ私も。慣れない所で寝たらきついよねー。特に私なんか野宿多いから、固い所じゃないと寝れない癖がついちゃったんだよねー」

「私は大丈夫でした。頂いた疲労回復の薬も効きましたし、万事大丈夫です」

シオンとリィナがまともに礼を言うのに対し、ユフィーは肩を鳴らしながら答え、カナはそのユフィーの言葉に便乗していた。

その対称的な反応の違いに、シリアナは少し悩んだ顔をするが、すぐにそれを笑い飛ばした。

「ははは！　なるほどな、そこまでは考えていなかったな。まあ、何にせよ一晩開けて、分かったことがあったのだ。その事をそなたらに伝えて置こうと思ったのでな」

「え、もう分かったんですか？　ずいぶん早いですね」

「ウチのは優秀なのだよ。たまに突拍子もない事をするがね。…ク
ー！！」

「はいなのにゃ！」

昨日見た通りに、天井から降ってくるビルスティアの少女。だが、今回は手にたくさんの物を持って降ってきていた。

バラバラバラ…

「にゃにゃにゃ！？」

あまりにたくさん物の持っていたからだろう。そのほとんどを床にばらまいてしまうクー。

それを必死に拾おうとするクーだったが、シリアナがそれを手で制した。

「よい。逆に床の方が見やすいであろう。地図等もあるのであろう？」

「そうですにゃ。あー、でもやっぱり床なんて…」

「よい。これで汚れば、掃除の者の手抜きだからな」

そうやって笑いながら床に座り込むシリアナ。

他の者より先に、率先して自国の王様が座り込んでしまったことに、リィナとカナは慌ててしまう。

「ちよちよちよ！ わ、私も座る！」

「王！ ちょっと軽率過ぎますよ！」

カナは慌てた様子でその場にすぐさま座り込み、リィナはシリアナの行動を咎める。

だがまあ、怒りながらも自らも座り込んでしまっているために、かなり説得力は無いのだが。

「やれやれ。やっぱり、噂通りの方ですね。さすが、いろいろな意味での『武王』だ」

「…ふん」

シオンはシリアナの異名を口にしながら座り込み、ユフィーはただシオンが座るその後ろに隠れて座った。

「そうか？ 俺がそんな異名を言われているのは、ただ単に戦いたいだけだと思っていたのだが」

正直、シリアナは王様に向いていない。なぜなら、その豪胆な性格で、戦い好きだからだ。

年に一回は自らも参加する舞踏会を開催していたりもするし、騎士団の新入りに直接教えるのもシリアナの仕事なのである。

だが、その異名はそこから来ているのではない。

エスカレルニア王国の東の辺境の地に、武士という文化が根付いている。その武士の信条がシリアナにとってもよく似ているから。とも言われている。

「まあ、それだけでは無いことは確かですよ。…えーっと、クーさんだっけ？」

「クーで良いですよにゃ」

「それじゃ、クー。君が調べてきたこと、さっそくだけど教えてもらってもいいかな？」

「了解なのにゃ！」

そう言ってクーがまず取り出したのは、一枚の大きな羊皮紙。そこに書かれてあることを、クーは一字一句読み上げていく。

「えっと、これにはルナニスクルメアについて書いてあるにゃ。天空に浮かぶ月の崇拜宗教団体。二つの月を一つにして、新たな神を

生み出している変な組織にゃ」

「へ、変な組織？」

クーの読み上げた文の書かれた羊皮紙を手に取り、その中に書いてある中身を確認するシオン。

そこに書かれていたのは、図解で書かれたかなり分かりやすく纏められた資料。大体の人数構成や、活動拠点など様々な物が書かれていた。

「すごいじゃないか。これだけの物をたった一日で？　ほんとにすごい……」

「いやいやいや、それはもう一つの『魔物の名前を名乗る男たち』と被ったから早かったのにゃ」

「え、それってまさか……」

「そのまさかにゃ。ルナニスクルメアは、魔物の研究もしてる、とっても危ない組織にゃ」

クーの言った言葉に残る五人には戦慄が走る。

シリアナは王としてそのようなことを知らなかった事実。カナは危ない組織という単語に。リィナは研究という言葉に。ユフィーは仇の存在を研究しているという事柄に。シオンは自らの予想が当たったことに。

五人はそれぞれに驚き、それぞれに思った。

これが敵かと。今回の自体を招いた、黒幕かと。

だが、カナには引っかかることがあった。

「魔物の研究って、どんな研究？　だって、『魔物の名前を名乗る男たち』を調べていたら出てきたんでしょ？　聞きたくはないけど、例えばどんな研究？」

「簡単なのなら、騎士団がやっているみたいに手なずけているらしいにゃ。でも、他は分かんないにゃ。指を鳴らただけで出てくるなんて、まるで魔法みたいにゃ」

「…魔法みたい…そうか、なら合点がいく。…でも、それなら何で…」

クーの言葉に引っかかりを覚えたシオンが、その単語を復唱する。そして気づいた。

自分をルナニスクルメアがターゲットと呼ぶ理由。それで世界を壊すと言う大それた事を言えた理由が。

だが、それはすべて憶測でしかない。そしてその憶測が真実であるのなら、シオンの力はすべて忌避されてしかるべき物となってしまう。

「シオン？　どうしたのよさつきから。ブツブツブツと、何か気づいたんなら話さないよね」

思考の渦に飲まれていたシオンを、ユフィーの少し呆れた台詞が引

きずり上げる。

その事に感謝しながらも、シオンは伝えた。

自らが考えていたこと。そして、調べてきてほしいことがあることを。

「…多分、本当に多分なんだけど…多分、魔法なんだと思う。操っている者の使った物は」

「魔法？ そんなもので、魔物が従うの？」

「…精神操作…。出きるとは思っていない。それに、本当にそんなことが出来て、それにその力が僕にもあるんだというのなら、妙に合点が行くんだ」

「精神操作だと？ 禁忌の所業、悪魔の所業ではないか」

「ええ。だから多分です。本当であってほしくないという思いも含めた、ね」

もはや、この話はリィナとカナにはついていけなかった。

二人は最初に散らばった物をかき集め、その中にあった地図を広げていた。

「うわ…赤丸がいっぱい…」

「ほんとですね…あ、これ私の家です」

「でかつ！ やっぱり、お嬢様なんだもんねー」

「そうですか？ これがお城なんで、そんなに大きく無いですよ？」

「周り周り。判断基準がおかしいから」

地図に書かれた城を指差しながら、そんな世界観の違いを体現している二人。カナに関してはこの話を振った張本人であると言うのに、このさまである。

そんな会話を背後に聞きながら、シオンはクーに尋ねた。

「クーは何か知らない？ 魔法について詳しい人とか、例えば『聖霊』について詳しい人とか」

「んー…。あんまり知らないけど、王都から出てすぐの森の中に、ものすごく強いスピリティアの双子がいるにゃ。その双子は、何でも聖霊と一緒に暮らしてるとか：風の噂で聞いただけにゃ」

「クーよ。それは以前報告された双子の事か？ あの事件に関しては、あまり話に触れないほうがよいぞ？」

「分かってますにゃ。でも、話しておかないと分からないこともあると思うんですにゃ」

「確かに、そうだな」

一瞬暗い顔をして、シリアナがクーの話を止める。だが、クーのその意見にぐうの音も出なくなったのか、そのまま話を促した。

「えっと…先日、その双子に関する事件が起きたのにゃ。地質調査のために出向いた騎士団の人間を皆殺しにするという事件がにゃ」

「「「っ！！」」」

必死に記憶を掘り起こしているのだろう。頭の猫耳や後ろの尻尾が、すさまじい勢いで揺れている。

だが、その動きと説明の内容は全く噛み合っていなかった。

「そう。ありえない話だとは思う。だが、本当のことだ。そして、その双子が残した台詞、それがそなたらに伝えたいものだ」

クーの説明を引き継いだシリアナが、シオンたちの方を向いて言う。

「『聖霊の地を汚す行為は許さない。そして、貴様らのような残虐の限りを尽くす行為を我々は認めない』。これが、その双子からのメッセージだった」

憎々しげに言うシリアナに、残る者の息がそろろ。

「…メッセージって、そんなものどうやって…」

「…死体に刺さっていたのだよ。血で書かれたその文が」

手を硬く握り締め、その時の悔しさを思い出しているかのように言葉をつき捨てるシリアナ。

一国の王がこれだけ感情をあらわにするのだ。それだけ、国民が思われているということである。

「…でも、そのことがどうして僕達に伝えたいことにつながるんですか？」

「そうよ。あたし達が知りたいのはそのルナニスクルメアって奴らが何処にいるのかが知りたいだけ。それと、聖霊についてだけね」

シオンとユフィーが関係ない話ではないのかと、いぶかしむ声を上げる。

だが、クーがその小さい体を精一杯広げながら二人に説明した。

「そこで出てくるのがその双子にや。『狂乱の狂双子』とかって名前がついてるにや」

「狂乱…。明らかに只者じゃない名前だけど…」

「えー、カッコいいじゃん」

「あんたはいつの間に話に割り込んできてるのよ…」

にゅっと首だけ出すような形で、カナが話に割り込んでくる。

その行為にユフィーは呆れ、少しの間話が止まってしまう。そこでシオンはわざとらしい咳払いで話の雰囲気に戻した。

「…ゴホン…。で、その『狂乱の狂双子』がどうしたの？ ある程度予想がつきそうだけど…」

「『聖霊の代行者』らしいにや。スピリティアたちの中では当たり

前の話らしくて、それがあの双子らしいにゃ」

スピリティアは長命の種族。それ故に、表舞台に出ることはあまり無い。他の人間が死んでいく様を、人より多く見ることになるからだ。

そのためか、スピリティアの人々は人目に触れない所で暮らし、接触は行っていない。

だからこそ、クーが言ったその情報はかなり信憑性が高いのだ。

「『聖霊の代行者』って、どういう意味なんだろう？ 確かに、スピリティアなら魔法の事は一番知っているだろうけど…」

「ええ。でも、会ってみるのが吉なんじゃない？ あの時にあいつらが言ってたことが、意外と分かるかもしれないわ」

「確かにそうだけど、そんな話がある後じゃあ…ね…。僕等も門前払いされるかもしれないよ？」

二人してそうやって考え込んでしまう。

そこに、あまり物を考えない者二人が話に混じってきた。

「私は会ってみたい。狂乱ってなんかカッコいいじゃん！」

「そうですそうです。なんかカッコいいです！」

目を輝かせながらそう叫ぶ二人。明らかに分かっている。

その場に行けば戦うことになるかもしれないのだ。その双子と。

だが、そんな事はどうでもいいと言うより、クーが言った『狂乱の狂双子』と言う言葉が気にかかっているようだった。

「あんたたちねえ…そんな簡単に事は進まないの。それに、かつこいいっていう理由じゃ不純よ？」

「不純じゃないよ！ 正当な意見って奴だよ！」

「そうですそうです！」

「…なに？ 何であたしが責められてるの？」

そんな理不尽なまでの三人の食い違いは、いっそ清々しかった。

狂想曲

「…すー…すー…」

静かな木陰の中、少年の気持ちよさそうな寝息が響く。

風になびく髪は漆黒。一点の混じり気もない黒色の髪は、少年の頭の後ろ側で撫で付けられており、今は寄りかかっている木の間の下敷きになっていた。

どこか線の細い、女性のような印象を受ける風貌。手に本を持って、いることから、読書の間に眠ってしまったのであろう。

「キャハハハ。ねえー、カイ。楽しかったよねー？」

そんな少年が気持ちよさそうに眠っていると、その少年が寄りかかる木から、一人の少女が楽しそうな笑い声とともに現れる。

眠っている少年と同じ風貌をした少女。唯一違うのは、髪の色が一部分だけ青くなっていることだろうか。

そんな少女は、おそらく少年の名前であろう名を呼びながら、その少年にもたれ掛かった。

「んー。カイの匂いだー。ふふふ…ねえー、カイー、起きてよー」

ユサユサユサ

ひとしきり少年の感触を楽しむと、少女はカイと呼んだ少年を揺らす。

その不躰極まりない安眠妨害の行動に、カイは目を覚ました。

「…んん…おはよう、ユリ」

「おはよっ。…んちゅ…」

ユリと呼ばれた少女は、満面の笑みで起きたばかりのカイの頬にキスをする。

その突然の襲撃にもカイは動じず、逆にユリの額にキスを返した。

「…ん…。…ユリ、眠いんだけど…」

「…あん…これからなのに…。ま、でも久しぶりに運動したもんね」

妖艶な瞳で舐め回すようにカイを見た後、その瞳のまま木陰の外の世界を見るユリ。

そこには、二人が久しぶりに運動した結果が広がっていた。

一面に広がる紅。この木陰の周りに美しい花々が咲いたような彩りに、息を飲んでしまう。

だが、その広がる紅の正体は鮮血。生きる人間から出た、生命の源。

だからこそ、美しいのである。

「綺麗だよねー…。でもお、ユリは鳴いた声が一番好きだけなんだけどなあー。人が死ぬときに出す断末魔の鳴き声え」

その光景を眺めたまま、ユリは近くにあった紅く染まった棒を手に取り取る。

妙に柔らかい棒は、ユリが手に取ったことで鈍い音を立てながらその形を変形させてしまう。

「こら。汚いから持っちゃダメだろ」

「キャハハ。ごめんごめん。でさあ、カイい。…眠いんならあ…ユリを抱いて寝てえ？」

猫撫で声を出しながら体をクネらせ、ユリはカイを誘惑する。

だが、ユリの思惑とは別の方向にカイは行動した。

「…んう…だめだってえ…耳はあ…キャツ…」

ユリの特徴的な尖った耳を甘噛みすると、そのまま抱きしめて自分を下にして倒れこんだ。

そして、以外なぐらいの強い力でユリを抱きしめると、小気味いい寝息を立て始めるカイ。

「…もう…寝つきいいんだから。…でも…ん…」

顔をほんのりと赤くさせながら、ユリは眠ってしまった愛しの兄の唇を一瞬だけ奪う。

「…おやすみ…お兄ちゃん…」

そう呟いたユリは、紅い血の海の中に浮かぶ孤島の上で、最愛の兄の腕の中で眠りにつくのだった。

「…さてと…安請け合いましたというか、押しきられたというか…ここまで来ちゃったんだけど…」

そう半ば諦めた風に言うシオンの足は、その双子がいるという森に向けられていた。

実際、王国側からはその双子との接触、並びに情報を引き出すことを依頼されていたし、結局リイナとカナの威圧に負けたというものもある。

だが、それでもなおシオンのやる気はでなかった。

彼の後ろではしゃぐ、二人の少女を見ていては。

「リイナちゃんリイナちゃん。これこれ、可愛くない？」

「わあ！　綺麗な花ですねー」

道端に咲いていた花を見て、カナがリイナに話しかける。

その黄色い花は風に揺れ、力強く咲いている。一輪だけがその場にあり、まるで誰も寄せ付けないかのように。

その花を見て、二人は女の子の会話に花を咲かせていた。

「うんうん。なんかこう、ぴしってなってる感じがいいよねー」

「そうですね。花びらの感じとか、綺麗ですねー」

——微妙に食い違っではいるが。

「はあ…」

「そんなにため息ばかり吐いてると、幸せが逃げていくわよ？」

心底疲れたようなため息をシオンが吐くと、ユフィーがそれを咎める様に話を振った。

「それに、せっかくこんな所まで出てきてるんだから、楽しましよう？」

「そんな事言ったって、さっきの話を聞いた後じゃなかなかそう言う気分にはなれないよ」

「そうかしら？ あたしは逆にワクワクしているけど？ ドキドキ、かしらね？ そんな気分」

——シオンが隣にいるから——

とは続けられないのが、ユフィーなのだ。

だが、その言葉に嘘偽りは無い。なぜなら、本当にそう思っているからであり、それを素直に出せたからである。

「ドキドキワクワク：か。意外と肝が据わってるんだね」

「そう言う言い方はちょっと、って思うわよ」

「そう？ まあでも、ちょっと元気でした」

体を伸ばしながら、そう感謝の意を述べるシオン。

その言葉に、ユフィーはそっぽを向きながらだがしっかりと答えた。

「ふん：。それでいいのよ。あんたはそれで：。：それが一番、カ
ッコいいんだから：」

「へ？ 何か言った？」

「：なんでもない／／／！」

「：ん：？」

近づいてくる人の気配に、カイはゆつくりとだがその瞼を開けた。

その数は三。闇の聖霊の力を借りることのできる彼だからこそ、その気配が掴めたのだ。

闇は光に紛れて生きる。闇は光の影なのだから。

だからこそ気配を読み、最高の場所に位置しつづけることができるのだ。

その気配から少しでも遠ざかるために起き上がろうとしたとき、胸の中で幸せそうに眠る妹の姿が目に入った。

「…んみゃ…カイい…」

「おーきーろー、ユリー」

兄の名前を寝言で呼びながら眠る妹の頬を、いろいろな方向に引っ張りながら起こそうとする。

すると、普通は簡単には起きそうにはないこの行為で、ユリの目はパチリと覚めた。

「おはよーカイー」

「おはよ。早速で悪いが、お仕事」

「お仕事？ あー、誰か来たの？」

「ああ。来たというか、来そう」

「じゃあいいじゃん。イチヤイチヤしてよーよー」

「駄々をこねない」

「ちえー。：我、光の契約者なり。光よ、その身に宿りし清浄なる力で我らを癒せ。『セント・トルイト聖光療』」

ユリから放たれた光の魔法は淡い白い光となり、二人を包み込んでいく。

全ての傷という傷が癒され、体の汚れが浄化される。

「：もう。傷なんか無いくせに、毎回毎回何で頼むのかなー？」

「これがあると頑張れる。ユリの匂いがするし」

頬をぷつくりと可愛く膨らませながら言葉を紡ぐユリに、カイはあえて臭い台詞を吐き、ユリの機嫌を図る。

「：う、上手いこと言ったつもり？」

「上手いこと言ったつもり」

赤く染まったユリの頬にキスし、にっこりと微笑みかけるカイ。

カイにとって、ユリは光だ。

闇のある所に光は生まれない。だが、光があるから闇が生まれる。なら、その闇は自分だ。ユリという光を穢さないために生まれた闇。純粋な光にも、必ず闇はある。その闇を、カイは全て受け止めたのだ。

最愛の妹を、闇という名の穢れに染めたくないがために。

自らの幸福と妹の幸福、ただそれだけの些細な願いのために。

唯一の肉親と、愛する者と一緒に、いつまでも連れ添って歩くために。

そのために、カイは生きているのだ。

歪んだ想い

血生臭い。

それが歩き始めた四人の共通の思いだった。

歩けば歩くほどに強くなる血の臭い。そして、強まる異様な気配。

その異質な雰囲気を発する元凶の下へ、シオンたち四人は確実に近づいていた。

「…この臭い…」

「…ええ。血の臭いね…」

「…うう。鼻が痛いです…」

「…魔物…じゃないね…この臭いは…」

四人ともがほぼ同じ感想を漏らしながら歩く。周囲には最大限の注意を払いながら。

だが、その所為で伝わってくるものがあつた。シオンとユフィーは帝都で経験し、リィナとカナは初めての感覚。

戦場の気配が。人が死んでいる気配が。血の気配が。この先に広がっている物を見るためには、それ相応の覚悟が必要だということを。

「…こんな…」

シオン以外は、目の前に広がった光景に言葉が全く出なかった。

真紅に染まる世界。ユフィーの魔法によって作られる世界が白銀だとしたら、今の光景は真紅だ。

所々に飛び散った鮮血。土に染み込み、かなりのドス黒い色に変化している鮮血。

そして、言葉を失う光景はもう一つあった。

「ほら、やっぱり来た」

「キャハハ。そうだねー、カイの言うことは正しいもん」

真っ赤な血の海に浮かぶように、そこだけがまったく汚れていない木陰に、二人の若者がいた。

一人は少しだるそうにした線の細い黒髪の少年。もう一人は、同じ顔をしながら楽しそうに笑う、髪の一部が青く染まった少女。

二人共スピリティア特有の尖った耳を持っており、瞳の色は全く同じ色の金色に染まっていた。

「…君たちは…?」

その二人の異質な雰囲気飲まれそうになるが、シオンはどうにか気を持ち直して質問する。

「…カイシア・クーリツヒ」

「ユリシア・クーリツヒだよー」

少年はだるそうに、少女は明るく答える。

「僕はシオン・セナ・ファルカス。で、君たちはここで何をしてるの？」

「…寝てた？」

「うん。寝てたよ？」

息のあった質問返しに、シオンたちは軽く脱力してしまう。

「っ、いや、そうじゃなくて。…君たちは、どうしてこんな所で、どうしてこんな事をしているの？」

「『てめえらしい顔してるから来いよ』って気持ち悪い事言われたから。んで、話すのも嫌だったから無視してたら肩を掴まれた。そしたらユリが切れてそいつの首を跳ねたんだよ」

「…だって、ユリ以外の奴がカイの体に触れるなんて許せないもん」

「駄々をこねない。で、あっちも切れたから仕方なく殺した。弱かったからね」

頬を膨らませて小言を発するユリに、カイは軽くユリの頭を小突くことでその小言を黙らせる。

正直な所、ユリの小言は可愛いものなのだが、状況を想像してしまったシオンたちは苦笑いしかでなかった。

それに加え、ユリはカイの腕にしっかりと抱きついている。

その状況が可笑しくて、シオンたちはあまり普通の反応が出来なかった。

「ま、ほとんどユリだけだな」

「えー、ちゃんとカイも手伝ったじゃん」

そう言って話す双子の仲は本当に良く見え、だからこそ、今この状況下で平然としていること自体ががおかしかった。

だからこそシオンは声を出した。確認のために。そして、真意を問う為に。

「…君たちは…人を殺して平気なの…？」

「別に平気じゃない。俺等より、彼らが弱かった。だから死んだ。それに、俺たちはこれしか知らない。他に知っていることなんて、何もない」

淡々とした口調で、そう呟いていくカイ。

そのカイの言葉に、ユリも続く。

「それに、ユリにはカイがいればいい。それ以外は何もいらないの」

カイに抱きつく力を強めながら、ユリはそう告白する。

その思いを聞いたシオンは、次にこう質問した。

「…それはお互いがお互いを守る決意の表れて取っていいのかな？」

自らの願う想いに、大切な人を守りたいという決意のために、そう質問した。

決意の答えが見つかるかもしれないと。

だが、返ってきた答えは思いがけないものだった。

「…なんでもいい。俺はユリの闇で」

「ユリはカイの光だから」

まったく同じ表情で、まったく同じ声音でそう言った双子の兄妹。

そこには、表裏一体の切り離せない歪んだ絆があった。

「光であり闇である…表裏一体の存在…それがあんたたちなのね…」

「そうだ。俺の存在意義は闇の中で光を守ること」

「ユリの存在意義は光の中で闇を守ることだよ」

ユフィーが確認のために発した言葉に被せるように、双子はそんなことを言う。

光がある所に闇がある。闇がある所に光がある。そんな真理を、この二人は淡々と話したのだ。

何の気概もなく、さも当然かのように。

「でも、そうなんだったら良い関係ですよね」

そんな感心の言葉をリィナは告げる。

「だって、お互いがお互いのことを見て、それでいて助け合ったり守り合ったりしてる。とっても良い事じゃないですか」

自らの意見を伝えようと、身振り手振りを交えながら話すリィナ。

だが、そのリィナの率直な感想を双子は否定した。いや、兄が一旦否定したものを、妹が肯定したというべきか。

「そうじゃない、だって——」

「そうそう。そんな難しいこと考えないよ？　ただ、ユリはカイが大好きだからこうしてるの」

そう嬉しそうに言うと、ユリはカイに擦りつき始める。

「ユリにはカイがいれば良い。だって、愛してるもん。それ以外に理由なんて、理屈なんていないもん」

自分で言っておきながら、顔を真っ赤に染めていくユリ。

しかし、それとは正反対にカイの表情はまったく変わらなかった。強いて言えば、言葉を被せられたことに少し目を細めた程度である。

「いい関係だねー。…あ。ねね、そういえば強いんだよね？ ちよつと言いは変だけど、これだけのことをやってのけてるんだもん」

そんな二人を見つめていたカナが、唐突にそんな事を言い出す。

普段の無邪気な元気一杯の笑顔ではなく、少しだけ目を細めた獲物を見つけた時のような目つきで、双子を見ていた。

だが、その視線を向けられている双子は何も感じてはいないようで、ただ単にイチヤついている。

——ユリが一方的にカイの体にまとわりついているだけだが——

「カナ？ 一体何考えて——」

「勝負しよう！」

「——るのってえええ！——」

シオンの訝しむ声の間に、カナがそんな爆弾発言を投下する。

背負っていた愛槍、レストーションを構えて双子を見つめるカナ。

そして、ようやく武器を構えたカナを見た双子。だが、その目は何とも言えない雰囲気を感じていた。

「カナ！ 何言ってるんだよ！ 僕等はそんな事しにきたわけじゃ無いんだよ！？」

「いいよー。じゃあユリが相手ね？」

「って、こっちもこっちで簡単に認めるねまったく！」

目つきをカナと同じ獰猛な物に変え、未だカイに抱きついたまま達がそう答えるユリ。

そして、シオンの制止の言葉、ツツコミの言葉も意に介さずカナとユリは二人、歩き出した。

「ああもう！ 何でこんなことに…」

「いいじゃないの、放っておけば。ああでもしないと気が収まらないんじゃない？」

「…うー。カナさんの戦いぶり、前はあんまり見れなかったのだから今はじっくり見ます…」

シオンの焦りの声に、ユフィーはどうでも良さげな声を返し、リイナは少し唸りながら前を見据える。

「…仕方ない。ユリだから」

「うわあ！ い、いつの間に！」

突然隣で聞こえたぼそりとした声音に、シオンは体ごと驚く。

だが、その声の主であるカイはそんな事を気にせずに会話を始めた。

「で？ 何しにきた？ わざわざこんな場所にくるなんて、どうかしてる」

カイの言う通り、シオンたちが聞いた森はどんな交易の道にもあてはまらない、地図上の空白地点だった。

それが分かっているカイは質問したのだ。目的は何だと。

「…僕等は君たちに会いにきたんだ。『聖霊の代行者』である君たちに」

「…それをどこで？ いや、この国の王からか」

シオンの言葉に、カイの眉が初めてピクリと動く。だが、思い立ったことがあったのか、すぐにいつもの無表情に戻ってしまう。

そして、話はそこからユフィーに変わる。

「そうよ。そしてあたしたちはあんたたちに聞きたいことがあるの。魔法が使える者としてね」

「知ってる。氷で、風だろう？ そして……まあいいか」

ユフィーを指差し、次に身を乗り出しながら戦いが始まろうとする瞬間を見ているリィナを指差す。

そして最後に、シオンを指差した後にカイは珍しく少しだけ表情を動かすと、話すのを止めた。

「え？ いやいやいや、止められると気になるじゃないか」

「うるさい。始まるから見てる」

少し怒りの色を浮かべたカイの雰囲気になり、シオンとユフィーはリィナと同じように今まさに始まろうかと言う試合を見つめた。

負傷

「武器は何使うの？ 私は当然、これだよ！」

頭の上でレストーションを一回転させると、足を大股に開いた状態でどっしりと槍を構えるカナ。

その構えを見て、ユリは数瞬悩んだ後ゆっくりと口を開いた。

「…本気でいっていいんだよねー？」

「もちろん！ ってか、本気できてくれないと悲しい」

「じゃあいくね♪ …おいで？ 『ライトデイボルス』」

淡く光る白色の異質な光がユリを包み込む。

それを振り払うようにユリが大きく手を振った瞬間、その光は消え、ユリの左手には淡く光る白色の剣が握られていた。

ユリは、その剣を地面に突き立てるように下に向けて構え、カナを見つめる。

その目は、完全に挑発の念が込められていた。

「……………」

だが、カナは黙っている。

戦闘に入るために、かなり集中しきっているであろう。あの時のようなことは起こらない、と見ているシオンたちは思っていた。

そう、思っていた。

「…んじゃ、いづくね」

そんな事を知らないユリは、先手のために動き出す。

動き始めた足を止めることは困難だ。普通に考えれば。

だが、その動き出した足を、カナは簡単に止めた。

—その声によつて。

「すつつつつつごーーーーーい！！！！　魔剣だよ魔剣！　私の人生の中で二本目の魔剣！　ってか、最近すごいことありすぎーーーー！！！！」

「！！」

$$\left[\begin{array}{c} \vdots \\ \vdots \\ \vdots \end{array} \right]$$

完全に予期できなかった双子は、その大音量の声に驚いて耳を抑える。

残る三人は、カナの息を吸い込む姿を見られたために、平然と最初から耳を抑えていた。

ユフィーだけは顔をしかめているが。

「すごいすごいすごい！　じゃあ戦おう。ほんとにすごいもん！」

「うっ…。頭がクラクラするよー」

頭に手を当てながら少し体をフラつかせているユリ。

だが、すぐにユリのその凶刃はカナに迫った。

ガギン

鈍い音をたてながら、カナのレストーションとユリのライトディボルスが交差する。

飛ぶようにして移動したユリが、空中に浮いたまま体ごと斬りかかったのだ。

その斬撃を、カナは鉄槍であるレストーションを活かし槍全体のしなりで受け止める。

そしてそのまま槍を回転させてユリの体を吹き飛ばした。

「あっぶな…。早すぎでしょ、その動き」

「そんなことないよー。だって、ユリよりカイの方が強いもん」

両者油断無く武器を構えながらお互いを睨む。

その間にユリはカイの方を向き、笑いかけた。

「こっち向いてるわよ、あの子」

「そうだね。と言うより、二人共すごい…」

「ほんとにすごいです…。あんな動きが出来るなんて、ほんとにすごいです…」

「…どっちも頑張れ」

外野の四人が口々に一連の行動に言葉を漏らす。

ギン…

その言葉を交わしている間にも、カナとユリの戦闘は続く。

それを見たユフィーはカイに質問を投げかけた。

「あんたたちは何であたしとリィナの魔法が使えることが分かったの？ 見たところ、何も特別な事はしていないようだけど…」

「簡単。魔力を見ただけ。それにあれもあつたから」

「あれ？ ああ、風燐華ね」

カイがリィナの腰にある刀を指差し、その原因を語る。

「あんなもの簡単にぶら下げてたら誰でも分かる。それに、お前たちが言ったように俺たちは聖霊の代行者。分からないはずが無い」

「…それなんだけど、聖霊の代行者っていうのは何なの？ あいつらは自分の事を選定者と言っていたけど」

「それであつて。そして、それが魔法を扱う要。鍵だ。聖霊に気に入られる。これが重要」

「確かにそんな事を言っていたけど…」

ドゴオオオン！！！！

すさまじい爆音が鳴り響き、ユフィーの言葉を途中で遮ってしまう。

その音が鳴った方向を見ると、カナとユリの戦っている所の真ん中に、大きな穴がぽっかりと開いていた。

ちょうど切り結んだ後だったために直撃を免れたのであろう。その開いた大きな穴をみつめ、呆然としている。

ガラガラガラ…

穴の周りにできた土くれが音を立てて崩れ、その中からある物が現れた。

「グルルル…」

唸り声と共に現れたのは、巨大な体躯を持った漆黒の毛並みを持つ異形の獣。

鋭く光る牙を剥き出しにし、ありえない方向に飛び出る無数の爪。

その一つ一つが、命を刈り取る光を放っていた。

赤く滾った目は真っ直ぐに、ある者を捉えて離さない。

カイと話していたユフィーを。ただ真っ直ぐに、他の者には目もくれず。

「あたし？」

「ユフィー！」

今までの流れとして自分が狙われると思っていたシオンは身構えていたが、何の身構えもない、さらに言えば後衛であるユフィーに、疾駆する巨体を避ける術は無かった。

その事にシオンが叫び声を上げ、助けに入るために体を動かす。だが、届かない。

魔物の動きに人が勝てる訳が無いのだ。

「ガアアア！！」

「うるさいな。まったく」

今まさに飛びかかろうとしていた獣を、カイが気だるそうな声と共に受け止める。

素手ではとても止められないと思われた重量の突進に、カイは両手を掲げて受け止めていた。

その手の先に、闇色の光を携えながら。

「『コーガディーガ』か…。何でこいつがこんな所に」

カイは魔物の名前を呟きながら、必死にカイを噛み千切ろうとするその牙を弾いて距離をとる。

そして、始めて表情を変えた。

寧猛な笑みに。楽しそうな笑みに。嬉しそうな笑みに。

「…だが、俺の前に出たからには殺す。…行くぞ『ダークデイボルス』」

薄く光る闇色の異質な光がカイを包み込む。

それを振り払うようにカイが大きく手を振った瞬間、その光は消え、カイの右手には鈍く光る闇色の剣が握られていた。

ユリとまったく同じ形をした、しかし色と雰囲気のまったく違う魔剣が。

その剣を掲げ、カイは叫ぶ。魔法の呪文を。

「…引きずり込め、闇の引力の力を持って。敵を地面へ縫い付けろ、闇の引力！ 『重力の鉄槌』グラヴィティ・ミョルニル！」

一瞬だけ瞬いた黒色の光は、何事もなかったかのように剣に飲み込まれる。

だが、その魔法は標的に届いていた。

ズズン…！

コーガディーガの巨躯が、盛大な音と共に地面に縫い付けられる。

体中の骨という骨が悲鳴を上げ、体の上から少しずつ圧力がかかっていく。

だが、その圧力を持ってしてもコーガディーガは動くのを止めなかった。

「グガアアア！！」

「うるさいんだよ」

いつの間に移動したのか。

コーガディーガの丸い鼻を蹴り飛ばし、傲慢の牙を踏み潰す勢いで踏みつけるカイ。

そしてそこからは、蹂躪が始まった。

「ククク…なあ、もっと強いんじゃないの？」

剣を振る。

「ハハハハ…もっと動けよ。俺の前に出てきたんだから」

裂傷が刻まれ、鮮血が飛び散る。

「あっはっはっは！ もっと鳴けよ！ もっと、もっと、もっとさあ！！！」

返り血を体に盛大に浴びながら、コーガディーガの体を切り刻んでいくカイ。

その手に持つ闇色の魔剣は、そのカイの笑い声と血を浴びながら、その色を更に濃くしていった。

その間も、カイの笑い声と蹂躪は止まない。

相手が絶命していると分かっている。

「…止めてよカイ…戻ってよ…お兄ちゃん…！」

その狂っていく兄を、ユリが腰に抱きついて止める。

涙で顔を濡らしながらカイをみつめ、その腰に抱きつく力を強めるユリ。

すると、カイの笑い声が止み、いつもの無表情でユリの頭を撫でた。

「…悪いな。いつも」

「ううん…。ユリは、カイが戻ってきてくれると信じてたから」

その双子の奇妙な一面を垣間見た四人は、まったく声が出なかった。

「ちっ、面白くねえなあ…。しっかし、あんな弱えもん送ってくん
なってるんだ。ま、俺様がちよっかい出してやるかねえ。『目覚めよ、
時い』ってなあ。クハハハハ…キヒヒヒヒ!!!」

ドスッ

「え？」

シオンは急に生まれた自らの胸への衝撃に声をあげた。

軽く殴られたぐらいの、何ともない衝撃。普通なら見逃しそうな衝
撃だったが、その後に感じた熱さにシオンは声をあげたのだ。

「…な…んだ…これ…」

胸に開いた穴に手を運び、その貫通した穴を塞ぐように手を重ねる。
だが、そんなものは全く役に立たない。溢れ出した血を見て、シオ
ンは倒れた。

周囲の紅を、自らの紅で更に染めながら。

その光景を目に止めた後、シオンの意識は闇に吞まれていった。

時の力

ドシャッ

「シオン！」

「シオンさん！」

「シオン君！」

シオンが倒れたことに、三人が声をあげる。

一番近くにいたユフィーは真っ先に駆け寄り、自らの服を千切ってでも止血を開始する。

だが、そんなものは所詮気休め程度。シオンの胸に開いた穴から流れつづける血を止めることは出来なかった。

「どいて。ユリがやっただけ」

必死に止血を試みるユフィーの元に、ユリがそんな言葉と共に現れる。

その自身のこもった言葉に、有無を言わせない雰囲気を感じ取ったのか、ユフィーはシオンの隣から動く。

そして、体を一通り見聞したユリは驚くべき行動に出た。

「…光よ。その暖かなる力で、如何なる災厄からも守り、癒せ。『暖カキ巡リ（ヒネマ・アライト）』」

ザンツ

「がっ！」

ライトディボルスを片手に呪文を唱えると、その光り輝く剣をシオンの胸に開いた穴に刺した。

突然の衝撃に、意識の無いはずのシオンが声を上げその体を跳ねさせる。

「ちょっとあんた！ いきなり何してるのよ！！」

「何って、治療だよ？ だってこの子、心臓が無いんだよ？」

「は？」

ユリがライトディボルスの刺さったシオンの穴を指差す。

だが、人の死体などろくに見たこともなければ、人に穴が開いている状態などに経験もないユフィーに、そんな事が分かるはずが無かった。

「だから、ユリの魔剣で心臓の代わりをしてるの。これ以外の対処法なんて見つからないし。…この子だけは、死なせてはいけないから…」

「そんな…」

ユリの最後の言葉の呟きは、シオンの容態の深刻さに下を向いてしまっているユフィーの耳には入らなかった。

「それより今は、他にやることがあるんだよ。だって、ほら」

ザンッ

ドスッ

ゴシヤッ

沈むユフィーがユリに促されて見たのは、仲間たちとカイが戦っている姿。

一体目のコーガディーガを倒した後、更に現れたコーガディーガが襲いかかってきていたのだ。

まるで、シオンが倒れたことを境にしたように。

リイナは飛びかかってくる一体を切り捨て、カナは自らの間合いの一番遠い場所から刺突の雨を振らせ、カイは魔剣から生み出した闇色の球体を放っていた。

「ユリも行きたいんだけど、魔剣の制御はユリじゃないとできないから。それが分かかっていて、カイも戦ってくれてるから。…だから、頑張っ…?」

少しだけ悲しそうな顔をしながら、ユリはユフィーに話しかける。

そのいつもの明るい顔からは想像も出来ない悲しみの色に、ユフィーは少しだけ口をつむぐ。

だが、すぐに仲間が戦う元へと走り出した。

一度闇に吞まれた意識が覚醒した時、シオンは真っ暗な世界の中を漂っていた。

自由の利かない手足。頭の中だけの思考。シオンがこの世界で出来ることは、考えることだけだった。

真っ暗な世界を漂いながら、シオンは一人思う。

かっこ悪いなあ…。

だって、急によく分からない何かに大穴を開けられちゃったんだもん…。

ほんと、情けない。

自責の念に押しつぶされそうになる。

だが、そんな簡単に沈んでいいはずが無かった。

僕は何のために王国まで来たんだ？ みんなを守りたいからだろうか？

今は守る所か、自分の命さえ危ないけど。

でも、絶対に生き延びる。

――絶対に。

シオンの思考の中に混じる映像の中には、友達、仲間たちの姿が。彼にとってかけがえの無い、大切な者たちの姿が写っていた。

みんなで笑ってられる世界こそが、僕の創りたい世界なんだから。そのためなら、なんだってやってやる。

例え、自らの身がどうなっても。

シオンにはその覚悟があった。その覚悟こそが、彼の決意だった。大切な人たちを守る。どんなことがあっても、護り抜く覚悟が。

――だから、僕はこんな所で死ねない。

動くはずのない手足を必死に動かす。だが、自らの目に写る手足は全くと言っていいほど動かない。

――動け。動け。動け。

――僕は、こんな所で終われない。

だって、まだ、護れてないから——！！

必死にもがく。そのもがく彼の耳には、仲間たちの声が届いていた。

彼の名前を呼ぶ声が。戦う声が。苦しみの声が。

だから求める。

自らの奥底に眠る『力』があるのなら。

「みんなを護れる、力が欲しい！！！」

何もない暗い空間に響いた、シオンの願い。

その響き渡った声に、暗かった空間が変貌する。どこか不思議な、金の色に。

変貌したその世界に驚いていると、シオンは目の前にいる小柄な少女が目にと止まった。

どこか色味の薄い、存在さえ希薄な少女はゆっくりと口を開く。

「…力が欲しいの？」

どこか気の抜けそうな、しかししっかりと少女の問いかけに、シオンはゆっくりとながら答えた。

「…欲しい。みんなを護れる、そんな力が」

「…なんで？」

「なんでって…。仲間を、友達を護りたいから。大切な人たちと、笑い合いたいから…。じゃ、だめなのかな？」

シオンの返した答えに、少女は少し驚いた後に首を縦に振った。

「…じゃあ、ここから出て行かないとね。待ってる、みんな。大切な人たちが」

「うん。僕は、行かないと。みんなの所に」

「…いつてらっしゃい」

「いつてきます」

金の世界にいた二人がそう言った瞬間、その世界は、霧散した。

「はあ…はあ…はあ…」

コーガディーガの群れと戦って、どのくらいの時間が経っただろうか。

濃密な戦闘の連続に疲弊したユフィーの精神と体力は、もはや限界だった。

それは背中を預けて戦うカナも同じで、完全に息が上がって肩で息をしている。

風の剣閃を飛ばして相手の群れを散らせるリイナも、そこかしこに傷を負っているし、重力球を飛ばして足止めをするカイも、額には玉のような汗が浮いていた。

そして極めつけはユリだった。至る所にかすり傷をつけ、服はボロボロ。満身創痍と言っても過言ではない。

倒れるシオンの心臓の代わりに、魔剣を使用しているためにユリは素手だ。

魔物に襲われればひとたまりも無い。

それが分かっているからこそ、カイはユリの元へと行かせないために重力球で足止めをしているのだが。

「…く、そっ！」

「ゆ、ユフィーちゃん。お、女の子がそんな声出しちゃダメだって」

「知らない、わよ、そんな事。それより、あんたは無事、なんでしようね？」

「もしかして、心配、してくれてるの？」

「してないわよ！　ただ、背中にもたれられると、きついからって理由だけ、よ！！」

突進してきたコーガディーガに向けて、ユフィーは魔法を放つ。正確にはその走ってくる地面に。

一瞬にして凍った地面に足をとられ、バランスを崩してこけるコーガディーガ。

その隙を逃さず、カナがレストーションで魔物を貫いた。

「く…ジリ貧ね。これじゃあ…」

「うん。何か効率のいい作戦とかは…」

「ないわよ」

「ですよー」

落胆した声を出しながら、カナは自らの前に迫るコーガディーガを睨みつける。

視線の遥か後ろには、リィナの飛ばす風の刃が乱れ飛んでいたが、今のカナにはどうすることもできなかった。

そして、目の前に迫った一匹を貫こうと槍を構えたとき、彼女の耳にある音が聞こえた。

ザッ

「まったく、情けねえなあ。こんだけの数集めても、一人も殺せねえって、どういうことだよ。ああ？」

ガラスの悪い声と共に、一人の男がユフイーたちが戦う戦場に現れた。

体軀は細い。いや、細すぎる。贅肉はおろか、必要な筋肉さえも削り取られたような男のなりに、五人は驚きで目を見開く。

「『時の王子様』はまだお寝んねか。まあ、ならこいつらを殺してみるとするかねえ」

だが、その男の言葉と同時に放たれた殺気に、五人は意識を改めざるを得なかった。

その細すぎる体のどこから出てきているのか分からない、濃密な殺気。

溢れ出る、殺しの気配。

そして、カナがレストーションを構えた時にはその体ごと吹き飛ばされていた。

「キャアア!!」

「カナさん！ えええい!!」

「風は、軽いんだよ!!」

「くはっ！」

吹き飛ばされたカナを見たリイナが、男へと斬りかかっていく。そのリイナを素早く避け、リイナの攻撃の力を利用してその腹を殴る男。

くの字に曲がった体を、リイナは抜けていく痛みに構わず動かす。

風燐華に風を纏わせ、男の足を狙う。だが、その攻撃は腕ごと蹴り飛ばされた。

「お前。なぜ分かる」

「見てきたからなあ。もちろん、お前らもなあ！」

「意味が分からない。だけど、死ね！」

飛びかかってくる男に向け、牽制のための重力球を放出するカイ。かなりの量の重力球が散らばり、カイはそれに一つでも引っかかってくれればいいと、そう思っていた。

だが、男は意外な行動でその重力球を相殺した。

「手緩いなあ、まったくよくお！！」

楽しそうに笑いながら、男はカイの放った重力球を切っていく。

その手に握られた、巨大な剣を持って。

「『ソルトレスター』！ ロイスの魔剣か！？」

男が握っていたのは、巨大な黄土色の大剣。剣身に描かれた紋様が波打ち、その異質さをこれでもか言うぐらいにアピールしてくる。

その叩く事にも特化していそうな幅広の大剣を担ぎ直すと、男はカイを挑発するように言った。

「ロイスう？ そんな奴は知らねえなあ。ちびっこい薄汚れたロブを着た奴なら知ってるがなあ！」

「…き、貴様ああ！！！」

男の言葉に、カイが激昂する。先ほどあったような狂い方ではない、ただ、怒りに任せた狂い。

頭のどこも冷静ではないカイの攻撃は、まったく男には届かなかった。

魔剣を弾かれ、その体もソルトレスターによって吹き飛ばされてしまう。

「さあて…後はこいつらただけだな…。…魔剣を持たない光の巫女に、魔力切れの氷の女。どこまで対抗できる？」

「ふざけないで。まだやれぐう！」

「あんま舐めたこと言ってると殺すぞ？」

ユフィーの顔を掴み、見た目からは想像も出来ない膂力でユフィーを持ち上げる男。

額に青筋を浮かべ、完全に切れている。

そんな男の顔を見ることが出来ないユフィーは、ただもがくことしかできなかった。

「まったく、何もできないくせにいきがんじゃねえ。それに、てめえが大切に思ってる王子様の真実を聞けば、仲良くなんてしたくなくなるだろうけどなあ？」

「っ！」

その男の言葉に驚愕を覚えたユフィーは、暴れる力を強め、男の手から逃れようとする。

だが、顔をしっかりと掴まれ、首に魔剣の剣先を当てられてはどうすることもできなかった。

「まあいい。お前はここで死……」

「させないよ」

チャキツ

涼やかなシオンの言葉が、男の言葉を塞ぐ。

そして、その冷やかな言葉と共に突きつけたカテドラルの爪の切っ先を、男の首に押し込んだ。

「……へへ……脅しってか？ 似合わない真似はするもんじゃないと思うぜ？ 王子さまよお」

「そんな事は知ってる。だからこんな事、終わらせたいんだ。……ユフィーから手を離せ」

「おお怖い」

首の皮が、あと少しだけ力を入れただけで切れるという所まで力を入れた所で、男はユフィーを離れた。

「かはっ…ごほっ！」

「ユフィー、大丈夫？」

「あたしは平気。ってか、あんたの方は平気なの？」

「うん。ありえないぐらいぴんぴんしてるよ」

自分の胸を叩きながら、もうなんとも無いと言うようにユフィーに笑いかけるシオン。

「だから大丈夫。後は僕に任せて」

「あ、ちょっと！」

ユフィーを自らの後ろに回し、自らは立つ。男の前に、しっかりと。

「…ここからは、僕が君の相手だ！ 友達には、仲間達には、手を
出させない！！」

体から金色の光を放ちながら、シオンは男にそう宣言した。

交錯する想い

「おもしれえ…。いいぜ、やってやる！ 来なあ！ 『時の王子様』
よお！！」

声を張り上げた男は、手に持った土の魔剣を振りかざし、地面へと突き立てた。

「魔剣闘技。生命の源、母なる大地よ。父祖に仇なす我が敵に、大地の鉄槌を！ 『^{アース・クリプティ}地神槌棺』！！」

そう叫んだ男の魔剣から、膨大な魔力と、無数の土の棘が現れる。

鋭利に尖った土の棘は、空に地面に、様々な場所に突き刺さりながらシオンへと迫っていく。

その土の棘の奔流に、シオンはただ冷静にそれを見ていた。

「…時よ。悠久に流れ続ける、絶対の調律詩よ。還る流れを、その身で示せ。『^{エヴィー・スタイルス}調律ノ時』」

カテドラルを眼前に突き出し、土の奔流を受け止めると思われたその両手から、淡い金色の光が放たれる。

不確かに揺らめく金色の淡い光は、真っ直ぐに土の棘と接触した。

「ちいっ！ やっぱり情報通りだな。真正面じゃあ勝てねえか」

舌打ちをした男の先に広がっていた光景は、淡い金色の光に包まれた土の棘が、もろくも崩れ去っていく姿。

鋭利だった棘の先は崩れ、根元さえも砂に還っていく。

淡い金の光に触れたものすべての時を巻き戻すシオンの魔法に怯むが、男はさらに攻撃を加え始めた。

ギャリイイン：

土の魔剣の大質量の剣が、シオンのカテドラルの爪と擦れ、盛大な嫌な金属音を上げる。

シオンの表情は先ほどと変わらず、少し冷たい冷静になった顔だったが、男の顔は違った。

「これぐらい、僕にはどうって事ないよ。それより、いい加減に話してくれないか、な！」

魔剣を弾き飛ばしながら、シオンは尋ねる。

襲撃の意図を。そして、自らが狙われる意味を。

「へっ。何を話せばいいってんだ？ 俺様は何も知らねえ。ほんとの事だぜ？ ただ、名前が『コーガディーガ』ってだけだ」

「そんなものは誰にでも予想がつく！ ルナニスクルメア：君たちが所属する組織が何をしようとしているのか。この力を手に入れても、真意が掴めないんだ」

「そんなもん聞いてどうするってんだ。俺様達はただ、世界に復讐する。それだけだ」

「なんでそんな考えに至るんだ！ 復讐なんて…過去に囚われたままで…そんなもので未来を掴める筈が無い！！」

シオンの体から魔力が溢れ、その怒りと共に猛り狂う。

シリアナに言われた通り、受け入れようとした。だが、駄目だった。シオンには、復讐という言葉が許せなかった。

だが、その言葉を聞いた『コーガディーガ』は吐き捨てるように言う。

「はっ！ 俺様達には…俺には未来なんかねえんだよ！ 生きている事そのものが罪な俺様達にはなあ！！」

『ヒーナス』も言っていた。生きている事そのものが罪なのだと。

しかし、シオンは生きている限りその罪は消えることは無くても、償うことが出来ると思っている。

今この瞬間にも、シオンはこれまでの旅で命を奪った魔物たちのことを考えていた。

自らが生き永らえる為に奪った命。その命を背負いながら生きるこここそが、罪であり償いなのだ。

それをシオンは分からせたかった。そして、正しかった。

「…生きていれば、未来はある。…生きている事そのものが罪なんて、そんな事はない！」

「それがあるんだよ！ 俺様みたいな『クロストティア』にはなあ！！！」

泣きそうな声音でそう叫んだ後、男は自らの足を持ち、その服を引き千切った。

「なっ！ き、君は…！」

「これが俺様、忌み嫌われる『亜人』、『クロストティア』の姿だ…！」

引き千切られた服から覗くその足は、ヒューマティアの足ではなかった。

いや、それ以前に人の足ですらない。

黒く変色した『コーガディーガ』の足は、その名前と同じ魔物の足と全く同じだった。

「…亜人…本当に存在したのね…。御伽噺の世界の話だと思ってた」ユリの所まで後退していたユフィーが、『コーガディーガ』の足を見て驚く。

クロストティア。三つの種族のどれにも当てはまらない、まったく異なる種族。

普通、異種族間で結婚し、子供がハーフであってもどちらかの特徴しか受け継がず、重なることが無いのがこの世界の鉄則だ。

だが、それにも当てはまらないのがクロストティアである。

彼らは魔物の特徴を受け継ぎ、尋常ならざる身体能力を持って生まれる。その身体能力はビルスティアなどが到底追いつけないほどの途方も無いもので、彼らに勝てるものはいないと言われているのだ。

「ふん…。絶望したか？ 俺様たちルナニスクルメアは、ほとんどがクロストティアで構成されている。名前の理由はそう言うことだ。そして、すべての者が憎んでいる。この世界を。この、二つの月がある世界を！」

空を見上げ、昼でもありありと浮かぶ天空の紅と蒼の月を睨む『コーガディーガ』。

だが、その言葉の真意が分からなかったシオンは、質問を再度ぶつけた。

「月が何の関係があるのか知らないけど、絶望するのは分かるけど…。…なんで希望を探さないんだ！」

「探したさ！ それがこの方法だ！ 『時』を扱うお前の力を持って、俺様達は世界を戻す。そして壊す。魔物のいない、新たな世界に！！」

その理想の世界を語る『コーガディーガ』の目には涙が浮かんでおり、歓喜にむせび泣いている様に見えた。

だが、シオンは止めなければならない。一国の王子として。そして、自らの想いと夢のために。

「魔物の無い世界、それは素敵なことだと思う。…でも、それで誰かを泣かせてちゃ、何にも意味が無いんだ!!」

シオンの脳裏に浮かぶのは、あの小屋の中で再会した時の、ユフィーの涙に濡れた顔。

帝都崩落の際の襲撃に巻き込まれたユフィーの友人、ミーナ・ルナーシアの死が、ユフィーを変えたのだ。

なにもそれはユフィーだけではない。あの場にいたほとんどの人間が同じかそれ以上の悲しみを背負ったのだ。それは、決して許されることではない。

人を悲しませて自分だけが幸福になることなど、許されるはずが無いのだ。

「んな事わかってらあ…。けどな、もう止められねえ。もう、止まんねえんだ。お前が力に目覚めた。なら、俺様達はそれを全力で奪う。それだけだ」

そう言い残すと、『コーガディーガ』はクロスティアらしいその身体能力で、一瞬にしてシオンの目の前から姿を消した。

———周りの魔物も引き連れて。

「待てっ！　くそ…ごめんユフィー、逃がしちゃった」

「構わないわよ。それより、皆の手当てを急がないと」

「それはユリがやったげる。カイに触れていいのは、ユリだけだも
ん♪」

今まで沈黙を保っていたユリが、カイの元へと走っていく。

その元気な姿を認め、シオンはユフィーの下へと歩き始める。

ドクン…

「ぐあ…！」

体が脈打ち、呼吸が荒くなる。

体の奥底から何かを搾り取られるような、何かを抜き取られるような感覚に、シオンは体を倒しかける。だが、間一髪の所でユフィーがそれを抱きとめた。

「ちょ、ちょっと！　しっかりしなさいよ！」

「ご、ごめんユフィー。な、何か変…っ！」

ズグン！

「がはっ！」

ようやく認識できるようになっていた、自らの体の内に巡る魔力が、巨大な渦となってシオンの体を駆け巡り、抜けた。

唐突に起こった体に残ったほとんどの魔力の放出に、シオンは極度の脱力感と血反吐を吐くほどの苦しみに襲われる。

「シオン！　しっかりして！」

崩れ落ちていくシオンの体を抱きとめ、心配する声を上げるユフィィ。

だが、その言葉も届かず、シオンの意識は再度闇の中に落ちていった。

紡がれる真実

「…ん…」

「シオン！ よかった…起きてくれて…」

シオンが起きた時に見たのは、ユフィーの目に涙を溜めた姿だった。背には木。意識を失ったシオンを木陰まで運び、そこで寝かしておいてくれたのだろう。

そんなユフィーの優しさに感謝しながら、シオンは体に入れた立ち上がろうとした。

ガクン

「——え？」

膝に力が入らない。

意識を失うほどだった脱力感と吐き気は収まっている。

だが、それが無くてもシオンの膝は言うことを聞いてくれなかった。

「まだ立たない方がいい。と言うか、立てないはず」

服はボロボロだが、それ以外は何ともないようにケロッとしているカイが、シオンに向かって声をかけてくる。

恐らくはユリの回復魔法を受けたのだろうが、さすがは魔剣の所持者。回復速度とその回復量が尋常ではない。

「うん：膝に全く力が入らないや」

「当たり前。それが、時の力の代償。まだ軽い方か？」

「軽い方？ これでも十分辛いんだけど…」

「時は使いすぎると死ぬ。使用者の時すらも蝕む『輪廻を操る』時」
ため息を吐こうとしたシオンに、カイの容赦の無い宣告が下る。

「『輪廻を操る』…。じゃ、やっぱりこの力は…」

「…？ エヴィデンスの奴：何も伝えてないのか」

自らの両手を見つめながら、伝えられた事と力について見つめ直すシオン。

その行為を見て、カイは呆れ返りながら時の聖霊の名前を呼んだ。

「おー、すごい！ もうどこも痛くないよー！」

「はい！ 普通、これぐらいの怪我をしちゃったら、一週間は安静にしないといけないんですけど…」

「ふっふーん。そりゃライトディボルスまで使った最上級の回復魔法だからねー。回復しない方が嘘ってもんだよ！」

「ユリちゃんには感謝してますー」

「私もです！」

「いえいえいえ、カナとリィナはもうお友達だからね！」

そのシオンたちと程近い所で、三人の女の子がハシャイでいる。

そして、いつの間にかは分らないが自己紹介までも済ませているようだった。

こちらの三人も服はボロボロだが、それ以外は魔法で完全に治ってしまっているようだ。

それはつまり、この場で動けない体なのはシオンだけである事を示していた。

と言うより、服がボロボロになっているため、普段露出しない肌などが見え隠れしており、シオンはどこに目線をやっていいか分からなかった。

「ユリ……。服を変えてこい。出来れば他の二人も一緒に」

その事に気づいたのか、カイがユリに着替えてくるように指示を出す。

だが、その指示をユリは膨れっ面で返した。

「えー、このままでいいじゃん。と言うかー、このままの服でやらない？ りょじょく……？ プレイとか」

「しない。着替えてこい」

「はい。いこっか、こっちにあるから！」

カイの冷たい切り返しに、ユリは他の二人を引き連れて逃げた。

三人を見送った後、カイはシオンたち二人に向き直り、位置を調節するために座り込んだ。

「で…。力を得たとき、聖霊に会わなかったのか？ 氷の方は会ってるはずだが」

「ええ。あたしは会ったわね。あの淡い水色のローブを着た、少し面倒くさい性格をした奴にね」

「アイシーは昔からそうだから」

「僕は…会ったっていうのかな、あれは」

思い出されるのは、あの不思議な金の世界で出会った小柄な少女の事だ。

色素と存在が薄かった少女。気を抜けば、どこかに消えてしまいそうな雰囲気を持った少女だった。

その言葉に興味を持ったカイが、滅多に動かない眉を動かしながらシオンに聞いてきた。

「お前、持ってるのか？ 証を」

「証？」

「丸い銀板に質素な十字架が彫られたネックレス。『時の証』だ」
エヴィデンス・クロック

カイのその言葉を聞いてシオンは思い出した。

帝都から出立する際に父から手渡された、質素なネックレスの事を。

「ああ、持ってるよ。確か……あれ？」

ネックレスの通り、シオンは貰ったその日からずっと首にかけていた。

そのために胸にあるはずだったネックレスがなくなっている事に、シオンは酷く焦る。

「…ない…どこかに落としたのかな？ いや、鎖だったから、そう簡単に外れる訳が…」

「少し邪魔する」

小さく断りを入れると、シオンの胸に手を当てるカイ。

そしてそこに、自らの闇の魔力を流し込んでいく。

彼の体調を調べるためでもあるし、なにより『証』がそこにあると踏んだからだ。

その予想の元、シオンの中を見ていく。気配を探る。そして、見つ

けた。

「…どうしたの？ なにか…」

「お前の中にある。時の証が。そして、エヴィデンスもそこにいる」
小さく笑ったカイを不思議に思ったのか、胸に手を当てられたまま
で問いかけるシオン。

そのシオンに対し、カイは手を離しながら少し安心したように語る。

「多分、お前が心臓を吹っ飛ばされてその後に蘇生した時に取り込
んだんだろう。エヴィデンスにとっては、嬉しい誤算か」

「え？ 心臓を吹っ飛ばされてって…ええ！？」

「そうよ？ 本気で心配したんだから」

心臓が無かったことをさらりとカミングアウトされ、思いつきり狼
狽するシオン。

ユフィーはそんなシオンを宥めるように、あくまでも冷静を装って
声をかけた。

「聖霊は選定者。選んだ者と共にある。そして、それを見守るのが
俺たち代行者」

「そうなんだ…じゃあでも、なんでその時の証が僕の中に取り込ま
れてるの？」

「時の証は魔を封する道具。魔剣の無い時の代わりに、その中に聖霊が入れるように」

「え？ それってどういうことなの？」

「魔剣は聖霊の住処。だからこそ、あの様な絶大な威力を持っている。：聖霊は、魔剣と共にある」

最後の台詞だけ苦しげに吐き捨てた後、カイは質問をさせないために全てを語り出す。

昔々の、とある一人の男の復讐の物語を。

「昔、ある所に一人の男がいた。有名な魔導師であったその者は、聖霊の力を人が扱える物の元に封入しようと考えた。森羅万象の力。この力を我が物にしようとしたんだ。その媒体は、剣や弓、槍などの様々な武器に試された。魔導師の目論見は成功し、人の身でありながら森羅万象の力を操ることができるようになった。しかし、魔導師はその実験が成功したあとすぐに死んだ。復讐をなすこともなく」

そこで一旦区切り、さらに語る。

悲劇の男の話を。聖霊と共に歩めなかった、悲しみの男の話を。

「聖霊にも自我があるからだ。己が認めない相手に、力を使わせはしない。だからこそ、聖霊たちは魔剣と呼ばれる物の中に住み、選定者となった。相応しい者にしか、この力を扱わせないために。そこで生まれたのが、聖霊と交流が深かったスピリティアの子孫たちだ。その者たちが聖霊の同行、魔剣の所持者を監視し、正しく導い

た。それが、俺たち双子だ」

過去を語り、今の事を語る。

簡単なようで難しい、その代行者の双子の兄は、少し悲しそうな顔をしながら語るのを止めた。

「じゃあ…今僕の中には魔剣と同等の物が取り込まれているということ？」

「そういうことになる。今はまだコントロール出来ていないだろうけど、いずれ取り出せる」

「あたしは魔剣と同等のものなんか持ってないわよ？ この杖だって、シオンの所の王様から貰った者だし」

「アイシーはその者に相応しい形の抛り所を見つける。お前の場合は多分、その馬鹿みたいな量の魔力量だろう。願ったんだろ？ 力が欲しいって」

シオンとユフィーの言葉に答えながら、カイは少しだけ遠い目をして空を眺めた。

赤みがかった空を見ながら、カイは一人呟いた。

「俺の知っていることはこれだけ。後はユリにでも聞いてくれ。ユリの方が聖霊については詳しい」

空を見上げたままそう言う彼の背中には、どこか役目を終えた戦士の雰囲気漂っていた。

伝えてほしくて、聞いてほしくて

「かわいいー！ー！ー！ー！ー！ー！」

「ちよ、ちよとカナさん！こ、声が大きいですって！」

「えー、いいじゃんいいじゃん。可愛いは正義、だよ♪」

「でも、だからってこの格好は何なんですか——！！！！」

カナの喜色の絶叫と、ユリの楽しそうな声、リイナの驚愕の絶叫が響く。

——そして時は少し遡り、カイに言われて着替えに着た三人。

ユリは二人を自らの住処としている質素な造りの山小屋に案内して
いた。

「ふわー…なんかいいですね。雰囲気とか、なんかぴったりです」

「ありがと。でも、他にも造ってあって、ここは服のみを置いている所だからね。カイと一緒に寝ている家は見せられないよ♪」

「愛の巣って奴だね！」

「その通り！！」

頬を赤らめながら言うユリに、カナのそんな声がかかるとリイナは

下を向いてしまう。

顔を真っ赤に、耳の先まで真っ赤にして。

そんなリィナに笑いかけながら、ユリは自らの衣裳部屋に案内した。

「はい！　ここがユリたちの服が置いてある所だよ！」

「へー。いっぱいあるんだ……」

そこまで言った後、カナはそこに広がっていた光景に言葉を失った。

いや、震えていた。

そんなカナを見ながら、リィナも遅れてその部屋の中身を覗き込む。

そして、その天然の性格で言葉をはっきりと言った。

「うわぁー。綺麗な洋服がいっぱいありますねー！」

「でしょでしょ！？　ユリの自信作なんだー！」

そこに広がっていたのは、様々な形、色取り取りの服の数々。

これをすべてユリが作ったと言うのならば、ユリはかなりの裁縫能力を持っている事になる。

「いやー、暇だったからねー。それに、これ着てカイの前に行くと
：／／／」

ボンッ

その先の事を思い出したのだろうか。ユリが顔を爆発させるようにして真っ赤にさせ、下を向いてボロボロの服を弄り始めてしまう。

そしてそのまま何を思ったのか、一気にその服を脱ぎ捨てるユリ。

「うわっぷ！」

「ゆ、ユリさん！？」

その突然の行動に、未だにプルプルと震えていたカナは服に真っ向からぶつかり、リィナは少し顔を赤くしながら焦る。

だが、すぐにその二人の表情は驚愕へと変わった。

「じゃーん！ 早着替え終了ー！ えへへ、どうどうどう？」

服が並んでいる隙間から颯爽と現れたのは、新しい服を身に纏ったユリ。

一部だけ青く染まった黒い髪の毛には、銀色で縁取りされた緑色の四葉の花。紺と白で色分けされた上の服は、少しだけ堅苦しい雰囲気を感じさせている。下に着たスカートは上の紺色と同じ色でかなり短い。極めつけは足に履いた黒い布で、膝まで隠したその布のおかげで太ももがまぶしく光っていた。

クルクルと回りながら足に履いた革張りの黒く光る靴を鳴らすユリ。本当に楽しそうだ。

そして、その様子を見たカナとリィナはほぼ同時に声を上げた。

「「可愛い（です）ー！ー！ー！！」」

声を上げ、楽しそうに回るユリに突進していく二人。カナなどは服を投げつけられたことは忘れていようだ。

「ねえねえねえ、まさか私達も着ていいの！？」

「うん！ その為につれて来たんだもん！ カナには何が似合うかなー…あ、これとかどう？」

「着る着る！ 今すぐ着る！」

手渡された服を手に掴み取り、衣裳部屋の奥へと消えていくカナ。

そして、現れたカナを見たリィナは軽く絶句した。

――服一つでここまで人は変わるのかと。

「ばっばーん！！ これが新しいカナちゃんだー！！」

胸元の大きく開いた、赤色のロングドレスを身に纏ったカナはそう声をあげながら二人の前に現れる。

その胸元に光るのは、大きな宝石がたくさんついたネックレス。頭についていた黒色のリボンも、同じ黒色だがフリルに変わっていた。足元は黒い踵が大きく高くなっている靴を履いており、カナの身長を少しだけあげていた。

慣れない靴を履いているからか、少し足元が覚束ないが、すぐに歩き方を習得したようでふらつく事も無くなった。

「…すごい…なんか大人っぽいです…」

「うーん…元気なカナがここまで化けるとは…。こうまで着こなされる、作ったかいがあるね」

カナの姿を見ながら、口々にそう言う二人。

まあ、普段のカナを知っているものからすれば、今のカナが纏っている雰囲気は全く正反対のものだったのだから、そう言うことも仕方が無いと言える。

「じゃあ次リィナちゃんね！ ユリちゃん、どんなのがあうかなー？」

「ええ！？ 私も着るんですか？」

「当ったり前だよー。カナも着てユリも着たんだもん。リィナも着ないと！」

「そうそう！ 可愛いって言ってたじゃん！」

二人の剣幕に押され、手に一着の服を押し付けられてしまうリィナ。そこでリィナは渋々ながらも、その服に着替える為に衣装部屋の奥へと引っ込んでいった。

「いやー、いい仕事してるねーユリちゃん」

「いやいや、そっちこそよく着こなすよねーって、あれ？」

そんな会話を二人がしていると、着替えが終わったのであろうリイナの頭が服にまぎれて飛び出していた。

「もう！　こっち来て見せなよ！　可愛い正義なんだから！！」

「うきゃあ！」

「おおー！　リイナちゃんぴったりだよ！！」

ユリに服の間から引きずり出され、悲鳴をあげながら出てくるリイナ。

出てきたリイナを見たカナは、素直に賛辞の声を上げた。

「うう…なんか恥ずかしいです…」

短い裾を押さえながら、顔を赤く染めていくリイナ。

リイナが着ているのは、ここエスカレルニア王国のある北の大陸の東の地方で呼ばれる『和服』と言うものだ。黒を基調とした布に、リイナとカナが見つけていた黄色の一輪花が刺繍されていた。帯と呼ばれる腰の部分の布は暗めの緑色で、その花を引き立たせていた。

「かわいいー！ー！ー！！！！」

「ちょ、ちょっとカナさん！　こ、声が大きいですって！」

「えー、いいじゃんいいじゃん。可愛い正義、だよ♪」

「でも、だからってこの格好は何なんですかー！ー！！！」

恥ずかしさに揺れる頭には、いつもの小さなリボンではなく金属製の金色のかんざしと呼ばれるものがつけられていた。手には、青を基調とした水が流れているような色合いの巾着袋が握られており、足に履いた下駄と呼ばれる木製の靴の黒と相まって雰囲気をかもし出している。

「あ、ユフィーちゃんの分も考えておこうよ。仲間はずれはよくないからね！」

「ああ、あの子ならこれなんかどうかなー」

「おお！　さいっこうだね！」

「…二人とも絶対に怒られると思います…」

リイナの心配をよそに、カナとユリの悪巧みにも似た顔はさらに深くなっていった。

「ここにいるはず。俺達の服が置いてある所だから」

「え？　他にも持ってるの？」

「寝る所と、着替える所と、食事をする所…えーつと…」

「持ちすぎよ…」

指を折りながら数えるカイに、ユフィーの呆れた突込みが刺さる。

シオンは素直にその事に驚いたようで、自分の所とどちらが多いかなど持つ者の考えでそれを聞いていた。

そして、カイが小屋の扉に手をかけ、ゆっくりとその中身を見せるとシオンとユフィーは固まった。

「あ、ユフィーちゃんにシオン君だ。やっほー」

「うう…」

「あ、カイ！　ねね、今回の似合う？」

固まってしまったユフィーとシオンに構わず、カナが元気に手をあげながら手招きする。

その隣にいたリィナは、やはり短い裾を手で隠しながら恥ずかしがっていた。

ユリなどは、もう一切カイ以外が目に入っていないようで、カイに所構わず抱きついている。

「あ、そうだ。ユフィーちゃんも一緒に着ようよ！　可愛い服見つけたんだー！」

「え？　え？　え？　ちょ、ちょっと、カナ！？」

「おっ着替えだー!!」

そう楽しそうに叫びながら、未だ困惑から抜けきっていないユフィ
ーを連れ、衣装部屋の奥へと引っ込んでしまう二人。

それを呆然と眺めながら、シオンはようやく声を絞り出すことが出
来た。

「…なに…これ…?」

「ユリの趣味。暇な時にこうやって服を作ってる」

「うん! でさでさ、似合ってる?」

「ああ。凄く似合ってる。でも、少し幼い感じがする」

「おお! さすがカイは分かってるね!」

そんな双子の兄妹を見ながら、シオンは本日何度目になるか分から
ないため息を吐く。

だが、そんなシオンにかなりの無理難題が降りかかってきた。

「あの…シオンさん…」

「ん? あ、リィナ。何か凄いことになってるね」

「はい…。可愛いのは可愛いんですけど、自分で着るとなるとちょ
っと…」

「何言ってるのさ。リィナも似合ってる。十分過ぎるぐらいに可愛いよ」

「か、かわっ！」

ボンッ

今度はリィナがそんな音を立てて顔を真っ赤にさせて俯いてしまう。そんなリィナに、シオンがどうしようかと悩んでいるとユフィーとカナが消えていった奥から声が聞こえてきた。

「だーかーらー、可愛いんだからいいじゃん！ 足も綺麗なんだから、見せとかないとさ！」

「だからって短すぎるわよ！ ほとんど見えてるじゃない！」

「だーいじょうぶだって！ シオン君とかも喜んでくれると思うよ？」

「なっ！」

「しめた！」

「キャアアア！！」

「何してるのさ…」

聞こえて来ていたそんな声に、シオンは一人沈む。

これからの反応次第では、全身氷漬けになってしまうこともありえるからだ。

だが、腹は括らなければならない。たとえどんな結果になっても。

「…ど、どう／＼／＼？」

そんなシオンの前に現れたのは、頬を染めながら、そんな魅惑的な言葉を口にするユフィーだった。

おそらくカナにやられたのであろうが、大胆に開けられた太股のスリット。ユフィーらしい水色の色を基調としたびったりとしたドレス。そのドレスの端々には金色の刺繍が施されており、それがアクセントとなっていた。

「……………」

「な、なによ。何とか言いなさいよ…／＼／＼」

終始剥き出しになった太股を気にしているようだが、逆にその姿がシオンに大ダメージを与えている事を彼女は知らない。

髪はいつものツインテールだが、微妙に小さく団子状に巻かれており、そこには白色のくしゃくしゃとした布が巻かれている。そのせいか、いつもより垂れた髪の手は短い。そして腕には星が形どられたブレスレットが巻かれており、その存在をささやかに主張していた。

「…に、似合ってる…すごく…ほんと、可愛い…」

「っ！」

喜色の笑みを浮かべながら、くるぶし付近までしか覆う所の無い少しだけ踵が高い靴を鳴らしながらシオンに迫るユフィー。

「ほ、ほんと！？ 本当の本当に！？」

「…うん。う、嘘言う必要なんか…無い…じゃないか…」

「？」

シオンは焦っていた。

ただでさえユフィーは、ぴったりとしたラインの浮き出るドレスを着ているのだ。

普段の服ではよく分からないが、ユフィーの女性としての体型は魅力的だ。出ている所は出ているし、出ない

所は出ていない、理想の体系であることは確かである。

そして、その体がシオンの体に触れている今、シオンはどうしていいか分からなかった。

「…ユフィー…その…近い」

「っ！っ！」

シオンに言われてようやく気づいたのだろう。

耳の先まで真っ赤にしながら、かなりの速度で飛びすぎるユフィー。そして、そのままリィナと同じようになるかと思われたユフィーだったが、カナの笑い声によってそれは無くなった。

「あははは！ ユフィーちゃん可愛いー！ 顔真っ赤だよー！」

「っ／／！ うる、さいー！」

ガイン！

「いてっ！」

カナの頭を殴り、それ以上の発言を封じるユフィー。

だが、それでもカナのニヤけた顔は無くならなかった。

「よっぽど死にたいようね…」

「こわっ！ ユフィーちゃんこわっ！」

ユフィーの手を中心に、小規模の氷嵐が巻き起こる。魔力切れだと言うのに、キレているときはそのリミッターが簡単に外れるらしい。

そのままカナに放たれようとしていた氷嵐だったが、それをみすみす見逃すシオンでは無かった。

「待った待った待った！ 今はそんな事より、聞いておかなくちゃいけないことがあるんだから！」

「…ふん…」

「ぷふうー…。た、助かったー」

シオンの訴えを聞き入れたユフィーがその氷嵐を解除すると、カナが止めていた息を吐き出して人心地つく。

「そうだな。俺たちにも、提案がある」

なぜか背中にユリを乗っけているカイが、そんな真面目な声音でシオンの台詞に答える。

背中のユリは何とも言えない蕩けた顔をしているために締まらないが。

「俺たちには、お前たちに伝えたい、伝えてほしいことがある」

「僕たちには、君たちに聞かなきゃいけないこと、聞いてほしいことがあるから」

二人はほぼ同時に、同じようで同じではない台詞をゆっくりと噛み締めるように言った。

悔いの無い選択

沈黙。

六人全員が床に敷かれた布の上に座り、黙っている。

さらに、この場にいる男以外はかなり奇っ怪な格好をしているので、なかなかに締まらない異質な雰囲気の流れていた。

「本題。行こうか」

そんな雰囲気の中、カイがそう一番に切り出した。

「うん。じゃあ、どっちから行く？」

「もちろん、こっちから。ユリ」

「うにゃあ？」

シオンの提案にカイは答え、話を始める際にユリに声をかける。

だが、その当人は抱きついていてたことで眠くなったのか、ほとんど寝ていた。

寝起きの変な声を出しながら、カイの言葉に答えて話に参加するユリ。

「こつちからの伝えたいことは、聖霊の事について。伝えてほしいことは、今の話をありのままこの国の王に。そして、先刻の騎士団襲撃、誠にすまなかったと」

「伝えてほしいことについては分かった。きちんと伝えておくよ。で、聖霊のことだけど…」

「ユリ」

「はいはい。フレイヤは熱い奴で、アクティアはずっと笑ってる。アイシーとウィンディアは会ってるから分かるよね？ ロイスは堅物。サンディアは早口。ブリネスアとダルネスアはユリたちと同じで双子だね。エヴィデンスは古い。ってか古風」

そんな事をいきなり早口でまくし立てるユリ。

指を折り込みながら思い出すように、的確に聖霊の性格を言っていた。

「ユリ。性格じゃない」

「え？　じゃあ何？」

「…やっぱりお前たちが先の方がよかった」

「ははは…」

妹のその天然っぷりに、兄は辟易しながら過ちに気づく。

その呆れた雰囲気进行全面に押し出すカイに対し、シオンは乾いた笑

いしか出なかった。

「じゃあ、僕等の方を言わせてもらうね？　まあ、質問みたいだから答えやすいだろうけど」

「分かった」

「まずは聖霊の事について。僕等は代行者と選定者っていう事は聞いたけど、他には何かあるの？」

「ない」

「え？　ないんですか？」

シオンの質問に、かなりの早さでカイが即答する。

その事にシオンが少し面食らっていると、代わりにリイナが答えた。

「ないものはない。聖霊と人間の関係なんてそんなもの。選定者って言うっても、ほとんど聖霊たちの気まぐれ」

「…気まぐれで選ばれたあたしたちはどうなるのよ」

「心配ない。お前たち三人はきちんと好かれている。それに、お前については最初から決まっていたこと」

「え？　僕が？」

指を指されたシオンが少し驚いていると、カイのその言葉をユリがついだ。

「ここからはユリが話すよ。『時』は魔法の中でも異質なの。他の例えば『氷』や『風』。これらは必ず相克の関係があるでしょ？」

炎なら水。土なら風。氷なら雷。闇なら光。

ユリ言う通り、魔法は森羅万象を崩すものといっても、やはり自然の物。

メアとの共闘の際でも、シオンはその事に気づき風に氷をのせて巨大な吹雪を作った。

だからこそ、ユリの言葉はシオンたちにはすんなりと伝わっている。

「うん。それは分かる。さっきの戦闘でもそうだった」

土の棘を、風化させたように。まるで、時を早め、寿命を縮めたかのように――。

自分で魔法を放っておきながらそう思うシオンだが、実際はなぜそうなのか、自分でも知りたがっていた。

「時はすべての事象を早め、戻す力がある。だからこそ、時はすべての魔法の『上位』にあたるの。炎は燃え尽きさせちゃえばいいし、氷は戻して水にしてさらにはその存在すらもなくなるから」

そこでようやくカナとリィナは気づいたようだ。

すべての物事を早め、戻すことのできる時にかかつては、どんな魔法も無意味だということに。

——最強だということに。

「ま、その分ヤバいんだけどねー。下手したら死ぬし」

だが、その軽い感じで発せられたユリの言葉は、そう思っていたカナとリィナの声をあげさせた。

「え？　じゃあシオン君死んじやうの？」

「それは嫌です！」

「こらこらこら。下手したらって言ったじゃん。時の魔法はその魔法を大きくすればするほど、影響が大きくなる。そしてそれは、使用者の魂を削るの」

魂を削る。

口にすれば簡単だし、理解も出来そうな言葉ではある。

だが、シオンとユフィーはその事に戦慄を覚えていた。

「じゃあ、下手したら死ぬって言うことは…」

「多用すれば命が無って事なのね…」

元より、魔力は人の生命力が源だ。そして、それは『器』として体のどこかに流れている。

聖霊はその『器』を見極め、魔法を扱ってもいい人物かを見極めて

いるのだ。

そして、その『器』に流れる魔力を使用して発動するのが魔法であり、魔剣に触れることのできる防護膜なのである。

だが、時は違う。

発動の際に消費するのは、使用者の魔力と、その『器』。

それはつまり、生命力を、人の命を使っていることに等しい。

「そういうこと。だから気をつけてね？　あと、大きな力を使う時はしっかりと意識を保つこと。意識を失った瞬間にぽっくりいつちやうからね」

何とも明るい調子で言っているが、その内容はかなりとんでもないものだ。

まあ、はっきりと死ぬと言っているようなものなのだから当然なのだが。

「分かった。善処しておくよ。で、次の質問なんだけど、君たちは彼らの事を知ってるの？」

先ほどの戦闘を思い出し、少しだけ悲しそうな顔をするシオン。

その反応に、カイは対照的に淡々と答えた。

「知らない。クロスティアも、噂だけしか知らない」

「そっか…」

「あ、そうそう。体の中に『時の証』エヴィデンス・クロックとエヴィデンスがいるんですよ？」

ユリが急に何かを思い出した様で、手をポンと叩きながらシオンへと語りかける。

「うん。そう言われた。でも、慣れれば取り出すこともできるって…」

「無理だよ」

「え？ 無理って…」

「ユリは光の巫女だもん。聖霊とお話ぐらいはできるよ？ それで、エヴィデンスが言ってる。『今の君の体に心臓はまだない。取り出すのは、まだ先』だってさ」

声マネでもしているのだろうか。

その言葉の部分だけ、ユリの少しだけ高めの声が高く幼い声になっている。

だが、その言葉に驚いたシオンは自らの胸に手を当て、心音を聞く。聞こえるはずのない心音を――。

「え？ でもでも、シオン君は生きてるよ？ なんで…」

「時の聖霊が生かしてるの。この子は死んじやいけない。だって、あのクロストティアたちを止められるのはこの子しかないから」

「…うわぁ…いきなり世界の命運みたいな事とか背負っちゃったよ」

カナがそう反応するのも無理はない。

今日の前にいる男の子が、そんな命運を背負わされていることなど知らなかったのだから。

だが、当のシオンは聞こえない心音を聞いてもある程度平然としていた。

「分かっていたんだ。でも、どこか信じられなかった。…だから、僕は戦うよ」

そして急に語り出す。

今まで旅してきた仲間に向かって。最後の戦いへの誘いのために。

「体の事何かどうなってもいい。僕は助けたいんだ。分かっただけじゃないことを」

手を握り締め、『コーガディーガ』や『ヒーナス』が言った言葉を思い出すシオン。

気づいてほしいのだ。手を差し伸べてくれる者がいることに。すべてを憎むのは筋違いだということに。

希望があるということに。

「だから僕は、彼らに会いに行く。戦いになるかもしれない。殺し合いになるかもしれない。けど…僕は行かなきゃ。…未来を背負う者として」

そのシオンの決意に、一番初めに声をあげたのはやはりと言うかユフィーだった。

「そうね…。あたしはあんたに元々ついていくつもりよ。仇もいるみたいだし。大丈夫、殺しはしないわ」

「私ですよ。乗りかかった船です。最後までいかないと気持ち悪いじゃないですか」

「私はそんな大層な事もできないし、大層な事も思っていない。でも、ついていくよ。楽しそうだし」

頼もしい仲間の、友達の合意を聞いて、シオンは真っ直ぐに双子を見た。

聖霊の代行者たる双子を。すべてを教えてくれた、恩人を。

「僕等は戦う。そして、終わらせる。憎しみなんて心、人はいつまでも抱えてちゃいけないんだ」

最後への覚悟

「…御託はいい。どうやってそれを相手に認めさせる？　どうやって、あいつらに会うんだ？」

「それなら手立てがある。調べてきてもらったルナニスクルメアの組織拠点…それが書かれた地図がここに、ね？」

シオンはクーから貰った地図を広げる。胸に穴を開けられたシオンだったが、復活した際にボロボロだった服も戻っていたため、無事だったのだ。

残る五人はその地図を見つめ、その場所を確認する。

約一名、人の背中に乗ってだらしない顔をしている者は除くが。

そして、その拠点の場所を見つけたユフィーが、不敵に笑った。

「なによこれ。結構な王道って感じじゃない？」

「なんだっけ。馬鹿と何とかは高い所が好き、だっけ」

「アホ、じゃなかったですか？」

「…煙」

その場所に気づいたカナとリィナが、エスカレルニア王国に伝わる

言葉を使ってその状況を説明しようとする。

だが、結局は間違っていたようで、カイが少し呆れながら短く正解を言った。

「うん。まあ何とも分かりやすいというか、何というか…」

シオンは半ば呆れぎみに地図に書かれた場所を指差す。

その指が指し示した場所は、山。正確には、その山に築かれた砦だった。

周囲に何もない、閑散とした場所に立つ砦。

そこは明らかに、魔物を隠し研究するためにはもってこいの場所だった。

「ま、問題はそこにどうやっていくか、かしらね」

ユフィーが口元に手をやって考える。

山の上に築かれた砦が拠点ということは、そこに至るまでの道はほぼ一步通行だ。

それはつまり、熱烈な歓迎が待っているということである。

「強行突破って訳にも行かないし…んー…」

何も案が浮かばないようで、シオンは頭を抱えてしまう。

だが、そのシオンを見ながらカイが思いがけないことを口にする。

「その風に頼めばいい。風を使って浮かべばいい」

リイナをゆつくりと指差し、ある意味でそんな爆弾発言を投下するカイ。

「へ？　　そ、そんな事が出来るんですか？」

「あ、そうか。リイナが帝国に来た時もそんな風だったんだね。だから帆船も無しに大陸を渡れたんだよ」

驚くリイナに、シオンの納得した声上がる。

そのシオンの言葉を継ぐように、カイが風の使い方を伝え始めた。

「…風を足に集中させて、そのまま維持。で、その範囲を広げる。その密度をあげる」

「足に風を…」

いつの間にかカイの魔法の制御についての講義が始まってしまい、他の面々は蚊帳の外になってしまった。

「…あたしも頑張れば帆船無しに大陸を渡れるかしら？」

「ユフイー？　　急に何を言い出すんだい？」

「海を一面…いいえ、あたしの周りぐらいだけでも凍らせれば、問題ないのかしらね？」

「…さすがに無理だと思うよ…」

「えー、でも出来たらカッコいいじゃん」

「カナ…そう言う問題じゃないんだよ」

「…次の機会があれば試してみようかしら？　でも、波が厄介ね…。
凍らせ続ければ何とか…」

「ユフィー…君は何と張り合ってるんだい？」

「あたしよ。あたしはあたしと戦ってる」

「——いい心がけだね」

シオンが珍しく半眼になりながらユフィーを見つめる。

一瞬だけ話に混じったカナだったが、今はリィナの周りで渦巻く風に興味津々の様子だ。

それを見ているシオンとユフィーは、地図を改めて見直した。

「どうする？　もし仮に空からいけたとして、どういう突入をするか…」

「周りにある崖を使えばいいんじゃない？　ここから、ここ。そして、ここ」

地図にある山の周囲にあった崖を指差し、そこを基点に出発するよ

うにユフィーの指が地図を撫でる。

そして最後に指差したのは、砦の南門。つまりは裏門だった。

「なるほど。浮いていけるんなら、最初からそうやって行く方が得策か…」

「ええ。何かが飛んでくるのならあたしが潰すし」

「リィナには制御をお願いしないといけないしね」

「確かにそうだね。先陣はカナをお願いするとしても、槍一本だから」

「…だから守るわ。あんたもカナも、リィナも」

「ありがとう。でも、僕だって守るよ？ 絶対にね」

「ダメよ。あんたは万が一の事があったら死んじやうじゃない」

「死なない。確約のできなさそうな約束だけど、僕は絶対死なない」

皮肉を込めた笑みを浮かべるユフィーに、シオンは真っ直ぐに語る。

「……確約ぐらいしなさいよ。絶対なんですよ？」

間が開いた後に、ユフィーが声を震わせながら言う。

「…ごめん。何か言いたいことがバラバラだけど。でも、僕は自分が犠牲になってまでみんなを助けるなんてつもり、もうないから」

「今までは思ってたの？」

「うん。死にかけるまではね。でも、死にかけて分かったよ。僕が死んだら、結局は泣く人がいる。笑顔に出来てないってね」

薄く笑いながらシオンは語る。

感じたことを、ありのまま。

それにユフィーも合わせた。

「あたしも最近が変わってきてるわ。もちろん、ミーナを殺した奴は許せない。でも、それは相手が魔物。いくら操っているんだといってもね」

「そうだね。いくらユフィーでも、魔物を駆逐するなんてできっこないだろうし」

「試してみる？」

「やめてください」

「ふふ…。でも、シリアナ王に会って変わった。あたしの生きる意味は、そんなものじゃないんだって。もっと大きな所があるんだって」

ユフィーはシオンの目を見ながら、今までの気持ちを打ち明けていく。

その視線を、シオンも真っ向から受け止める。逃げることは出来ないと、分かっているから。

「うん。僕も変わった。帝都崩落の頃からだけどね。でも、僕の決意が、誰かを守りたいと思ったのはユフィーとミーナのおかげさ」

シオンが出会った頃を思い出す。

あの頃は、シオンは極力王子であるという事を隠しながら旅をしていた。

だが、一人で、しかも子供が簡単に生きていけるほど世界は甘くない。

そんな時に、シオンはユフィーの村に辿り着いたのだ。王子ということがバレた状態で。

その理由は、その見つけた人物が帝都にも出入りする人物で、帝都でのシオンの人気ぶりと顔を覚えていた人物だったからだ。

そこでシオンは村の人々の暖かさに触れ、ユフィーとミーナに出会った。

印象はあまり無かったが、仲のいい女の子たちだと思っていた。平穏を満喫する、民と認識していた。

しかし、そんな平穏は崩れた。魔物によって。

「あの時は、僕は本当に何も出来なかった。無力だったんだ。だから、誰かを守れる力が欲しいと、そう強く思ったんだ」

燃える家。泣く人々。

その凄惨な光景を見たシオンは、思わず立ちすくんでしまった。

稽古は受けていても、シオンは実戦などしたこともない。魔物ですらも、殺したことが無い。

そんな若い少年が、その光景を見て動けるはずが無かった。

「あの時は騎士団の到着も早くて、奇跡的に死んだ人はいなかったけど。でも、それでも僕を変えるには十分だった」

固く手を握り締め、その時の光景の歯痒さに自らを責めるシオン。

だが、今その手には優しく、そして暖かな人の手が重ねられていた

「…なにも、あんた一人で背負わなくていい。あれは、仕方のないこと。だって、誰も死んでないんだから。形ある物はまた作ればいいんだから」

「けれど僕は自分を責めた。いずれ、あの国を背負っていく者として」

手を振り解こうとはせず、ただ、握り返す。

そうしていないと、どうなるか分からなかったから。

「…なら、あたしたちにも背負わせて？　だって、仲間なんですよ？」

「：うん、分かった。でも、きちんとする所はきちんとさせてほしい」

「分かったわ」

少しだけ迷ったように間を開けたシオンだったが、最後には優しく笑いながらユフィーの手を握る。

今度は、危なっかしい雰囲気は無く、ただ、信頼するように。

仲間がいる暖かさを、確かめるように。

その握ってきた手を、ユフィーはただ優しく握り返した。

「今日はもう遅いわ。明日にしましょう？ 全てね」

始まる戦い

チュンチュンチュン：

翌朝。

「俺たちはいけないから」

「ユリたちは、ここから動いちゃいけないの。だって、こここそがユリたちのいるべき場所だからね」

双子はそう言うと同行を辞退した。

ユリは行きたいのだろうか、うずうずして体を動かしていたが、カイの一言によりその欲求もなくなったようだ。

その事に少し残念がったシオンだったが、どうすることもできないのでそこで別れることになった。

ユフィーなどはいつも通りにそっぽを向いていたが、カナはユリとは別れたくないらしく、最後までごねた。

曰く――

「あんな服もう何回も着れないんだよ!？」

「知らないわよ。周りにはほぼ強制的に着させたくせに」

「見るのはいいですけど、着るのはちよつと…」

このような女性陣の意見により、カナは終わったら会いにいくという形で折れた。

そして今現在は、拠点に向かって移動しているのだが――

「…これも王道っていうのかな？」

「面倒くさい方の、ね！ 『死氷結』！」
キラスノット

頻繁に襲いかかってくるようになった魔物の群れに、ユフィーの魔法が炸裂する。

細い縄となった死の氷は、魔物の群れを搦め捕り、結びあげ、その命を終わらせていく。

シオンはそのお零れを掃除するように、カテドラルで切り裂いていた。

「こんなの王道って言いませんよー。王道って言ったら、何か大きな人がお城で待ってるんじゃないんですか？」

風燐華を振りながらリィナがそんな愚痴をこぼす。

風を纏った攻撃ではないために少し時間がかかっているが、それでも魔力を浪費するよりはいいと考えたのだろう。

足のみを動かしているような滑らかな動きで、魔物を切り裂いていく。

「リイナちゃん。それじゃおとぎ話にある『魔王』様だよ…。っ！
はああああ！！！！」

リイナの言葉に返すことで少し油断していたのか、顔のすぐ横を通り過ぎていった死に驚くカナ。

だが、すぐに頭を切り替え、刺突の壁を繰り出す。

レストーシヨンの長さを活かし、相手の間合いに入れさせない。

凄まじい速度で繰り出される突きは、少しばかりの残像を持って魔物を突き殺していった。

「あ！ リイナ、あった！ あそこだ！」

突然声を上げ、視界の端に写った目標を指差すシオン。

シオンが指差したのは、完全に死を連想させる切り立った崖。所々に鋭利な土の突起が突き出しており、落ちている状態でぶつかればどうなるか容易に想像できた。

それを見たリイナは少し嫌そうな顔をしたが、すぐに手元にある風燐華を見て語りかける。

「…手伝ってくださいね、『風燐華』。…では、行きます！ 風よ。
渦巻きを我が足元へ。上昇せしは、己が肉体。『風華昇』^{ウィニーアップ}」

四人の足元に魔力が集中し、その魔力は風となり、足場となる。

少し心許なくなった地面の感触は次の瞬間浮き上がり、四人の体を上空へと誘う。

「よし。リイナはこのまま制御をお願い、僕が進路を言うから。カナとユフィーは何かあったときの迎撃を。結構足場が心許ないから、力があまり入らないだろうけど」

「分かりました、頼みますね」

「了解よ」

「うーん、やるだけやってみるよ。いざとなったら振り回すし」

シオンの指示に、三人は各々の反応の仕方で応える。

リイナは制御のために風に近くなるようにしゃがみ込み、ユフィーはスターレインを構え、カナはレストーションを担ぎ直す。

それを確認したシオンは、自らの役目を果たすために進行の指示を飛ばしていく。

所々突き出る土の塊を器用に避け、着々と目的地に近づくシオンたち。

「っ！ カナ、そっち頼むわ！」

「せやあ！！！」

翼を持った魔物たちはシオンたちを追いかけしており、その迎撃をユフィーとカナは慣れない足場ながらも務めていた。

ユフィーの遠距離での迎撃に、カナがその迎撃の網からもれた敵を刺し貫く。

その貫いた敵を、カナは器用にその迫る群れの中に投げていたりもした。

「シオンさん！ あれ！」

完全な逃げの強行に少し焦っていたシオンに、リイナの驚く声が上がる。

その声の雰囲気、何事かと思ったシオンだったが、その視線の先を見つけると少しだけ安堵の息を漏らした。

「あれが『ケニハルナ砦』の裏門、いや、ルナニスクルメアの本拠地か…。リイナ、あの門の前の広場に降りるよ」

「…狭くないですか？」

「まあ、少しね」

「…投げてもいいですかね？　ここからみんなで跳んだ方が早い気がするんですけど…」

「出来るの？　そんなこと」

「今の足場の魔法を弱い攻撃魔法に変えたら、それを足場にして蹴ることが出来るらしいです。カイさんが言っていました」

足場の説明をしながらリィナはシオンに提案する。

確かにリィナの言う通りで、シオンが示した降りる場所は狭い。四人全員が同時に楽に降りる場所ではなかった。

だからこそ、自らの体一つで突っ込んだ方が早いとリィナは提案したのだ。

「出来るならそっちの方がいいか……。じゃあリィナ、それで頼むよ。ユフィーは少し無理だろうから、僕が何とかするよ」

「分かりました。すぐにできるので、いきますよ?」

「分かった。カナ! 今から足場がしっかりするから、あの場所まで跳んで!」

その指示が出た頃にはだいぶ下がった所まで来ており、カナやリィナのような身体能力が高い者には何ともないような高さになっていた。

「よーし! ならば、跳ぶぞー!」

「ちょっと、あたしにそんな脚力は……」

「ごめんユフィー。黙ってないと舌嚙むよ!」

「じゃあ行きます!」
ラン・ウィニング
『風翔凜』!」

「って、キャアアア!」

リイナの魔法の呪文とユフィーの悲鳴が重なる。

それも当然だろう、一瞬だけ地面とほとんど変わらなくなった風の足場を蹴り、自らを担いだシオンが空中に飛び出したのだから。

隣を見ると、カナはありえないぐらい楽しそうに跳んでおり、リイナは追ってくる魔物に冷静に生み出した竜巻をぶつけていた。

そしてユフィー自身はと言うと――

「……………」

真っ赤になって、いわゆるお姫様抱っこという状態を満喫していた。

ジャリッ

意外と危なげなく降り立ち、シオンは腕の中のユフィーを見る。

「ごめん、ユフィー。こうやって跳ぶんだったら担ぎ方がこれしか見つからなくて…」

「え、ええ！？　い、いいえ、ベベベ、別に構わないわよ……………」

顔を赤くしながら猛然と真後ろに動くユフィー。

そして、その先には扉が。

ゴンッ

「っつ!!」

ギギィ…

当然後ろを見ていないユフィーは綺麗にぶつかり、門に体を強かに打ち付ける。

だが、怪我の功名とでも言うべきか、その人の背丈を優に越える門はゆっくりと開いていった。

「…絞まらないけど、入ろうか」

「それが私たちですよ!」

「リィナちゃん、それ意味ないから」

「……／／／」

コツコツコツ…

「…誰もいないね」

当然魔物や、ルナニスクルメアの構成員から攻撃を受けると思っていたシオンは、何もないことに驚いていた。

「…ええ、やけに静かだわ」

四人の歩く石畳から鳴る足音だけが異様に響く空間に、ユフィーは警戒の色を濃くする。

「人の気配は…あるんですけど…」

周囲に気を配りながら歩くリィナだが、掴めている気配はあるのにその存在が希薄な事に顔をしかめていた。

「お宝あるかなー…お宝、お宝、お宝…」

一人完全に趣旨がズレてきているが、それでも周囲を気にしている事に代わりはないようだ。

「…でも、これは迷うね、下手したら」

「確かにそうね。何でこんなにも同じ形の柱しかないのかしら」

「…私は何も言いませんよ…」

「うん。リィナちゃんは何も言えないね」

砦の中の風景がいつこうに変わらないことに、シオンとユフィーが悪態をつく。

それに合わせ、リィナが恨み言を吐くかのように呟いき、カナはそのリィナの呟きに、小さく突っ込みを入れた。

この四人、今から戦いを始めるというのになかなか和やかである。

バチバチバチ…

爆ぜる音が響く。

今まで和やかに進んでいた四人が、その音と共に臨戦態勢を整える。

シオンはカテドラルを、ユフィーはスターレインを、リィナは風燐華を、カナはレストーションを構え、油断なく辺りを見渡す。

バチツバチツ

電気が流れ、落ちる音がシオンたちの目の前で鳴った。

「よお。久しぶりだな、てめえら。と言っても、約一名には初めましてか？」

「あら、あなた挨拶が出来たんですか。これからもその心がけを忘れないで頂きたいですね」

「ちっ。やっぱ外にいる奴等は使えねえな」

「……………」

律儀な言葉を吐く『エルブレイア』に、『ヒーナス』が信じられないと言った声をあげる。

『コーガディーガ』は憎々しげに空を見上げながら、もう一人の黒髪の女性はただ無言でシオンたちの前に現れた。

「君たちは…！」

「…やっぱりあんたたちがいるわよね…！」

「…今度は逃しません」

「ああども、初めまして」

「「「律儀に返事をするな！」「」」

「ええ！？ 怒られるような理由あった？」

カナの台詞に、シオンたち三人が声を揃えて突っ込みを入れる。

その勢いに、カナは少々驚きながら小さくなっていく。

「はっはっはっ！！ やっぱりおもしれえな、全くよ！」

「黙って下さい。一番最初に死ぬくせに」

「んだとてめえ！ お前が死ねよ！」

大声をあげて笑う『エルブレイア』に、『ヒーナス』の辛辣な台詞が刺さる。

それに反応してしまったため、食ってかかるようにして『ヒーナス』の体を掴もう賭する『エルブレイア』。

だが、今まで無言を貫いていた黒髪の女性が、自らの隠し持っていた短剣を引き抜いてまで止めた。

いや、その威圧感に止めざるを得なかったただけなのだが。

「：私からすれば、お前たちなど全て雑魚。喚くな、黙れ」

「ぐぐ…」

「へっ！ いいじゃねえか！ いい加減に始めようぜえ！？」

『コーガディーガ』が瞬時に取り出したソルトレスターを振りかざし、石畳に向かってそれを振るう。

石畳に突き立てられたソルトレスターから魔力が流れ、石畳を変質させる。

剥がれていく石畳が鋭利な形状へ変化し、捻れ、一つ一つ歪な槍へと変化していく。

「殺せ！
『ヘル・スピアース土槍煉獄』！」

『コーガディーガ』が命じた通り、死を孕んだ歪な槍がシオンたちに迫る。

「ちっ！
『クリンミナル結晶氷陣』！」

舌打ちと共にユフィーのユターレインが輝き、一瞬にして分厚い氷の壁が出来上がる。

その氷の壁にぶつかると思われた土の槍は、急激に方向を変えて石畳へと突き刺さった。

「ざあーんねえーん。ホントはこっちだ！ 消し飛びなあ！」

ドゴオオオオン！

「なっ！ 床が！」

楽しそうに笑った『コーガディーガ』の深い笑みと共に、石畳に突き刺さった土の槍が爆発する。

岩全体を揺るがす大きな音は、絶大な破壊力を持って石畳の床を破壊した。

「うわあああ！！！」

「くっ！ シオン！」

「キャアアア！！！」

「…うわーなんかなつかしい…」

石畳の床の崩落に巻き込まれた四人は、瓦礫と自らが出した悲鳴と共に落ちていく。

そして、四人が落ちた穴を見つめながら『コーガディーガ』は言う。

「これでいいんだろ？ これでお」

「けっ！ 俺はこのままでもいいってのに、物好きだねえ…」

「上出来でしょう。それに、この方が私たちとしてはやりやすいの
でね」

「…行くぞ。奴等は必ず来る。そのための分断だ」

「へーいへい」

深緑色の翼を生やして飛ぶ黒髪の女性に、『コーガディーガ』はソルトレスターを担ぎ直して従った。

託し、託されて

ガラガラ…

「いっつ!」

落下したシオンは、少し捻ってしまった右腕を支える。

少しばかり痛みを訴えていた右腕を、自己判断だが、出来る程度で治療していくと大分痛みが引いた。

「…結構…落とされたのかな…」

自らが落ちてきた場所と、そのぽっかりと開いた穴を交互に見つめ、少し気を落とすシオン。

周りには仲間はおらず、あるのは少しだけしか辺りを照らさない蝋燭の灯。

まるで牢獄のような雰囲気通路に、シオンは落とされていた。

「…こうやっていても仕方ない。歩こうか…」

もう一度自分の体の確認をした後、シオンはゆっくりと歩き出す。

ヒュウ…

「…風が…。ならこっちだね」

薄暗い通路に吹いた風を頼りに、その風が流れてきた方向へと少しだけ足を速めた。

その歩く最中に、蠟燭を全くの暗闇にならない程度に集めていき、風の通りを見つめる。

すると、その手に持った蠟燭の火が消え、シオンの目の前には光が溢れた。

「光が…。でも、一切登ってもないし…」

警戒は解かず、その光が溢れる場所へと慎重に歩いていくシオン。

「…これは…金属が反射しているのか？　でも、何だってこんな所に…」

薄暗かった通路から一変、煌びやかな部屋はシオンの目を光の反射で迎え入れた。

そして、その部屋の中央から声が響く。

「…墓場だ。…綺麗だろう？」

深緑色の翼を生やした黒髪の女性が、シオンの目の前に現れる。

その妖艶な微笑みは、シオンが目にしてきた女性の中で最も美しく、それでいて危険だった。

「…墓場？　どういう意味だ」

カテドラルを女性に向けて構え、精一杯の気概を込めて女性を威嚇するシオン。

「そのままさ。…『時の契約者』よ。今ここで、私と戦え」

殺気を滲ませながら、シオンを見つめて笑っていた顔の表情を消す女性。

「…どうしても…なのか…？」

有無を言わせぬ雰囲気、シオンは一縷の望みを捨てずに聞く。

出来れば、誰とも戦いたくはないのだ。戦えば、人は傷つく。それが己だけではなく、相手も。そして、その相手を想っている者でさえも。

それが分かっているから。今この場で繰り広げられようとしている戦いは、殺し合いだと言うことを。

だが、女性はそんなシオンの想いなど露知らず、自らの背中に生やした翼をはためかせる。

「…我が忌み名『グリムワイバーン』。この名を捨てる為に、私は戦う。貴様の力、我らの悲願のために使わせてもらおう！」

翼を使って飛び上がった『グリムワイバーン』は、その翼で生み出した風を置き去りにして、シオンに肉薄した。

「…完全に分断させられたわね…」

薄暗い通路をユフィーは静かに歩く。

魔力の回復のために深く息を吸いながら、警戒は怠らずに周囲を油断なく見渡す。

そうしていると、彼女の所にも風が吹いた。

「…ふうん。ここが出口だ…いえ、罠かもしれないわね」

その風を肌を感じながら、ユフィーは分断されてしまった仲間のことを思う。

「…そう簡単には死なないでしょう。シオンは時の魔法を使わなければいいだけだし…『死なない』って約束したし」

どこか頼りなさそうな少年の、だが頼れる笑顔を思い出して、ユフィーは新たに足を進める。

そして、進んだ先の部屋は同じく薄暗かったが、違う所があった。

「…紅い…趣味悪いわね…」

「これは心外ですねえ。喜んでいただけるとばかり思っていましたよ」

「っ！ 『ヒーナス』！」

憎々しげにその名前を呼ぶユフィー。

所々が赤く不気味に染まった部屋に現れたヒーナスは、出会った時とは全く違う格好だが、眼鏡のずれを直すために眼鏡に手をかける様は全く変わっていないかった。

右目に大きくかかる長い茶色の髪を掻き揚げると、『ヒーナス』は笑う。

その笑いに応えるかのように、ユフィーはスターレインを構え、油断なく『ヒーナス』を睨む。

「おっと。やはり怖いですね。女性は笑顔が一番だと言うのに…」

「…あんたに言われてもね」

「まあいいです。ここで私とあなたが戦うことは、避けられないようですよ」

「ふん。凍らせてあげるわ」

スターレインが輝き、飄々と立つ『ヒーナス』に向かって氷の刃が飛来する。

その挨拶代わりの刃を、同じ氷の刃で迎え撃つ『ヒーナス』。

「なっ！」

「すみませんね、隠していて。私が魔剣『クリスフリーズ』の所持者です。さあ、氷を司る者同士、仲良く戦いましょう」

「お断り、よ！」

『ヒーナス』の手に握られた美しすぎる両刃剣と、スターレインから放たれたまったく同じ量の氷の槍は、音を立てて地面へと落ちていく。

「我が忌み名『ヒーナス』。この名を捨てる為に、私は戦わせていただきます。踊りましょう？ 氷の演舞を」

「いたたた…」

強かに打ちつけたお尻を擦りながら、リィナは少し涙の溜まった目を真っ直ぐ向ける。

薄暗い通路は蝟燭の頼りない灯に照らされ、異様な雰囲気醸し出していた。

「うう…痣になったらどうしてくれるんですかあ…」

今ここで服を脱いでも確認することが出来ないの、リィナはとりあえず祈っていた。

——青くなっているのが残ることだけは勘弁と。

そんな事を思いながらリイナが歩いていると、急に視界が晴れた。

大音量の音と、目も眩むような光と共に。

「ちっ。だから嫌なんだ。こうやって自分から行けばすむ話じゃねえか、ったく」

小言をグチグチと言いながら現れたのは『エルブレイア』。

斑模様の黄色の髪を今は完全に逆立てて、リイナを睨む。

その視線をリイナはしっかりと受け止めると、風燐華を引き抜いて構えた。

「あなたは…メアさんとコロナさんの所に来た人ですね」

「あん？ だったら何だってんだ？」

「倒します！」

風燐華を振り、生み出したのは大きな風の砲弾。

竜巻をその中に宿したかのような力を感じる砲弾は、真っ直ぐに『エルブレイア』へと向かって飛んでいく。

だが、その砲弾を軽く身を捻っただけで裂ける『エルブレイア』。

「つぶねーな。いきなりがこれかよ…。まったく、先が思いやられ

るぜ……」

「まだまだ行きますよ！」

「っ！ 休ませろよな！ 流れよ、雷。その神にも迫る速さで、我が体を運べ！ 『神ノ雷速』^{シュード・ライナ}！」

青白い光を纏った『エルブレイア』は、その呪文の言葉の通りの雷速で、リイナが放った風の砲弾をすべて避ける。

そして、その雷速でリイナに迫ると、その指でリイナの頭を突いた。

「うう……バカにしないでください！」

「がはっ！」

油断が過ぎたのだろうか。

リイナの体を中心に巻き起こった旋風が『エルブレイア』を捉え、その体を吹き飛ばす。

「……………」

追撃はせず、出方を伺うように油断なく風燐華を構え直すリイナ。

吹き飛ばされた『エルブレイア』は、口から溜まった血を吐き捨てながら、叫ぶ。

「おもしれえな、やっぱりよ！ 我が忌み名『エルブレイア』。この名を捨てる為に、俺は戦う！ 覚悟しな……！」

再び青白い光を纏った『エルブレイア』は、リイナに怒涛の勢いで迫っていった。

「あたたたた…」

落下した際に打ち付けた体を擦りながら歩くカナ。

幸い、レストーションを振るうことに関しては何の問題もないのだが、他に問題があった。

「もー、また服が千切れたよー。せっかくユリに縫ってもらったのにー」

服の傷が入った所を弄りながら、そう小言を漏らすカナ。

その千切れた部分を弄っていてはさらに千切れた所が広がるだけなのだが、カナは弄るのを止めなかった。

「ま、いいか。なーんかお宝がありそうな雰囲気のある所に落ちてきたしねー」

目を輝かせながら、薄暗い通路を隅々まで隈なく見渡す。

一応、少しは値が張るかもしれない燭台を手に握っているが、カナはそれでは満足しないようだ。

そして、辺りを見渡していたカナの目が、ある物を見つけたことにより一層輝いた。

「ん？ おお：おおおお！！ これはメルイト鉱石じゃん！ これ高く売れるんだよねー！ あ、こっちにもある！ こっちにも！ うわー、大漁だよ大漁！！」

床に転がっていた、淡い銀色の輝きを放つ塊を手にとったカナは、通路に響き渡る喜びの声をあげる。

カナが喜ぶのも無理はない。メルイト鉱石は、鍛冶屋の中では一般的に一番の良質な鉱石として重宝がられているのだ。

それはつまり、鍛冶屋が一番欲している鉱石ということ。

それはつまり、高値で売り買いが出来るということ。

その事に、カナは戦いのことなど忘れ、鉱石集めに霧中になってしまっていた。

「…ネコババしてんじゃねーよ。それは俺様たちの貴重な収入源なんだからな」

「うひゃうっ！」

そんなカナに、呆れた声を出す『コーガディーガ』が現れた。

その唐突な声に、やましい事をしているつもりがあるカナは萎縮して飛び上がってしまう。

まるで、尻尾を踏まれた猫のように。

だが、カナはそこから直ぐに怒ったりはしない。まあ、怒られる理由はあるにせよ怒る理由がないからだ。

「…まあいい。お前はここで死ぬんだとき。俺様に殺されてなあ」
手に持っていたソルトレスターを振り被り、カナへと一直線に振り下ろす。

その攻撃を後ろに飛びすさることで辛うじて避けたカナは、お返しとばかりにレストーションを下がりながらではあるが、突き出して相手の振り下ろされた剣を狙う。

ガキイイン…

「うわ、固いっ！」

「はっ！ そこら辺の武器と一緒にすんじゃねーよ！」

完全に明後日の方向に弾かれた穂先を見ながら、カナはそんな驚きの声をあげる。

それを隙と見た『コーガディーガ』は、すかさずカナに近づき、そのガラ空きの腹に蹴りを決め込んだ。

「がはっ！」

その蹴りをまともに喰らったカナは、肺の空気を全て絞り出したような声を上げ、吹き飛ぶ。

前回の戦い同様、この絞り出されたような肉のない体のどこにそんな力があるのか分からないぐらいの威力である。

「ちっ、ハズレ引いちゃったか？ 魔法も使えねえ、魔剣も使えねえ、こんな奴と戦うなんざ、俺様の趣味じゃねえっての」

「つく…。いい、じゃんか。…私、頑張るから、さ！」

起き上がったカナは、蹴られた脇腹を抑えながら『コーガディーガ』の愚痴に答える。

そして、繰り出したのは突きの弾幕。毎度お馴染みのカナの戦法だが、この速度には普通の人間はついてこれない。

——そう。普通の人間ならば。

「はあ…。…我が忌み名『コーガディーガ』。俺様は、この名を捨てるため戦う」

その突きの弾幕を見た『コーガディーガ』はため息を一つ吐いた後、自らの忌むべき体を晒す。

そして、その身体能力を持ってして掴んだ。

カナの高速で繰り出される突きを。

「うわっ！」

「さあて、楽しもうか。…『魔の無き者』よ」

「くそっ！」

「ハアッ！」

深緑色の翼を背中に生やし、自らへと凄まじい速度で突っ込んできた『グリムワイバーン』をいなす。

だが、相手はクロストティア。人外の力を持つ、忌むべき容姿を持った、疎まれる存在。

その拳に乗った憎しみの心は、シオンが受け止めるには重すぎた。

「がっ！ くそっ！」

何とか身を捻って直撃は避けたが、その余波がシオンの肩を抉る。

反撃のために繰り出したカテドラルの爪も、空中に浮いた敵には届かない。

一撃離脱の彼女の戦法に、シオンは完全に後手に回ってしまっていた。

そんなシオンを嘲笑うかのように、『グリムワイバーン』は呪文を唱える。

「清らかなる水よ。我が前に現れし脅威を、その無形の力で洗い流

せ。そして、沈めよ。『沈黙ノ水流』！」
サイレンス・カルト

交差させた状態で構えられた両手から、膨大な量の水が出現した。

その呪文によって意思を持った膨大な水は、『グリムワイバーン』の狙い通りにシオンへと迫る。

水としては綺麗そのものだが、それに飲み込まれた時の損害は尋常ではない。

迫る水の本流を前に、シオンは決断した。

命を削る覚悟を。

「（：僕は、いつまでも迷ってはいられない：だから！）：時を、我が手中へ。支配せしは、全ての流れ。巡り巡る時の流れを、全て我に委ねよ！ 『支配ノ時』！」
クロック・ア・ドミネーター

瞬間、全ての動きが止まった。

流れる水も、はためく翼も、煌めく金属も。

全ての音も、匂いも、流れ続ける物全てが制止していた。

その中でシオンは動く。自らの命を削ってでも、止めなければならぬ相手がいるから。

助けたいと思える人がいるから。

ズオオオン…

シオンが魔法を解除し、時が動き出す。

塞き止められていた水の本流が流れ、そんな重低音を響かせながら
全てを飲み込む。

その様を見て、『グリムワイバーン』は細く息を吐いた。

「…これで終わり…」

「違うよ」

「なっ！ …時の力ね…やはり、全ては貴様の掌の上という訳か」

背後を取られ、しまいには自らの翼をも封殺されて地面へと下ろされて
いた『グリムワイバーン』は、細く吐いた息を深いため息に変える。

そしてシオンは、圧倒的有利にたったこの状況でも、警戒は怠らなかった。

いや、それどころか思わぬことを『グリムワイバーン』へと問いかけた。

「…教えてほしい。君たちの忌み名ではなく、本当の名前を」

「…何？ 貴様、何を考えている」

「僕は、本当は戦いたくない。でも、戦ってしまうのは分かり合っていないからなんだ。僕は、君の本当の名前を知らない。これじゃ、

分かり合えない」

「分かり合う？ 蔑まれ、忌み嫌われてきた私たちとか？ ふつ、笑わせるな。そんなことをして何の意味が……」

「損得じゃない。僕は、君たちを助けたいんだ」

その心からの言葉に、『グリムワイバーン』の息を飲む音が響く。

信じられる者がいなかった。だから絶望するしかなかった。だから、憎むしかなかった。

自らの体を。自らと同じ姿をした魔物を。魔物がいる世界を。味方のいない、この世界を。

だから彼女達は変わらないのだ。

信じることができないから。人を、想うことが、できないから――

「君たちがこの世界を変えようとしているのは知っている。聞いたからね。でも、そのやり方は違う。間違っているんだ」

「……だからどうしろと？ 私たちはもう、どうすることもできないんだ。異常な身体能力の代償の短命。もう、命など残されていない」
自らの手を見つめながら、そう悲しみを滲ませる『グリムワイバーン』。

だが、シオンはそんな彼女の態度が許せなかった。

ドカツ！

「……っ！」

「…バカ野郎！ 命が長くないと分かっているんなら、何でこんなことをしたんだ！ なんて、助け合うことができなかったんだよ！」

シオンは告げる。

反射的に殴ってしまったことを悔やみながら、だが、気持ちを告げる。本当の気持ちを。

人を想う、心を。

「苦しいなら、言えばいいじゃないか！ 人は、分かり合えるんだ！ そうやって、ここまで文明を発展させ、多くの人々が生き永らえてきたんだ！ それを、君たちはなぜ壊そうとするんだ！！」

「…っ！ 壊すのではない、戻すのだ！ 全てを、魔物がいない平和な世に！」

「同じさ！ 今まで作り上げてきた、人々の絆の証を君たちは奪おうとしているんだ！」

「ならばどうする！ 結局は、私たちのこの体が縛り付ける！ 全て『汚らわしい』の一言に集約してな！！」

「——っ！ だったら、僕がいる！ これからは、僕が味方だ！ 君の、仲間だ！ かけがえのない、友達だ！！」

痺れを切らしたように、シオンが珍しい怒声をあげる。

それほどまでに、シオンは想っていたのだ。

彼女のことを。人々の奇異の視線から逃れるために、憎しみという名の殻に閉じこもっていた彼女のことを。

その思いを受け、彼女の体と心は揺さぶられる。

全ての根幹が揺らぐ思いに、『グリムワイバーン』と名乗る一人の女性は崩れ落ちた。

「…私は…私は…！」

初めての事に頭が混乱し、体が戦慄く。

そんな彼女に、シオンは優しく手を差し出した。

「僕は、何があっても君を助ける。だから教えて？ 本当の名を。僕という存在が、君という存在と分かり合うために」

「…私は…忌み名を捨てても…いいのか…？」

「うん。元々、持ちちゃいけなかったんだよ。人は、魔物じゃないからさ」

「…なら…捨てよう…。…私の、私の本当の名は、リュウナ・カンザキ。…よろしく頼む、我が友よ」

「よろしく、カンザキさん」

こうして、二人は手を取り合い、和解した。

リュウナは友になることで全ての憎しみが晴れ、シオンは託された。

一人の女性を救った事実を。そして、一人の友達の信頼を。

ヒュオオオ...

戦闘は激化していた。

斑模様に紅く染まっていた部屋は、今は一面の銀世界となり、美しく輝いている。

その中で、一人の少女と一人の男は、美しく舞っていた。

一人は輝く杖を振り、吹雪を生み出す。

また、一人は美しすぎる両刃剣を振り、その回転で同じ吹雪を生み出していた。

「凍える風よ。吹雪となりて、我が前の景色を白に染めよ。白銀の世界を、我が前に示せ！」
シルス・アイク・プリザード『白銀美麗華』！」

「魔剣闘技。吹雪け、氷よ。我が前の敵を凍らせろ。『アイサード』」

スターレインの宝玉が輝き、ユフイーの体を中心に猛烈な吹雪が巻き起こる。

吹雪の風に揺れる髪は美しく、金色の髪と銀色の吹雪は、そこにあるだけで映えた。

対して『ヒーナス』は魔剣、クリスフリーズをかざし、その吹雪に向かって己が魔剣を振るう。

振るわれた魔剣から生み出されたのは、同じ銀を持った風。

だが、魔剣から放たれた白銀の風は、その場へとすぐに落下した。

しかし、その風は地面を這うようにして流れ、ユフイーの足元へと向かう。

意志を持った風は、そのままユフイーの足を包み込んだ。

「ちっ！ 厄介な技ばっか使ってくるわね！」

「仕方ないでしょう？ あなたのその戦い方には、これが一番有効なのですから」

「ふん！ 小手先ばかり使われてもね！」

「ですが、このままだと決着がつかないことも事実。あなたに魔剣があれば私に勝ち目はありませんし、逆に私にあなたほどの魔力があれば、あなたに勝ち目はない」

「じゃあその魔剣を渡しなさいよ。あたしの勝ちでいいんだから」

「そうもいきませんでしょう？ あなたは聖霊に愛され、私はクロスティアというだけで魔剣を握っているのですから」

魔剣を弄んでいた手の動きを止め、自らの背中をさらけ出す『ヒーナス』。

そこには、彼の忌み名の象徴である黒い片翼の翼が生えていた。

「飛ぶことすらできず、動かすこともない。ただ身体能力が高く、短命。こんな私に、なぜ聖霊は魔剣を握らせたのでしょうかねえ？」

疲れ切った顔でそう言う『ヒーナス』に対し、ユフィーはスターレインを突きつけて叫ぶ。

「知らないわよ。でも、ここであたしはあんたを倒す！」

「いいでしょう。全力で、私はあなたの相手を努めさせていただきます！」

ユフィーの啖呵に『ヒーナス』が応える。

その勢いのいい返事に満足したのか、ユフィーは口の端を吊り上げ、にんまりと笑った。

その笑みを余裕と取った『ヒーナス』は、クリスフリーズを掲げて突進していく。

両刃剣であるクリスフリーズの真の力を発揮する動きは円運動にあ

る。

両端についた刃を振り、断続的に相手を襲う。逃げ場のない刃の応酬を、敵に食らわせるのだ。

そして、それは敵に一番接近しなければならないということ。

ユフィーはそれが分かっているからこそ、『ヒーナス』を自らの前に近づけさせはしなかった。

それが分かっているからこそ、『ヒーナス』はその時のための切り札を、魔剣に封入していた。

「…氷よ——」

「何度も同じやり方で通用するとも……」

「思っていないわよ？」

迎撃のために発しようとした呪文を防ごうと、『ヒーナス』がその切り札を出すために魔剣を振るう。

だが、その直後に彼の顔にスターレインの宝玉がめり込んだ。

グシャ

「ふげらっ！」

「あら？ ごめんなさい、思ったよりも力が入っちゃったわね」

真っ黒い笑みを浮かべながら、ユフィーは彼女のもっとも苦手とする近接戦で『ヒーナス』を殴っていく。

手、足、腹、胸、頭。思い当たる所全てを蹂躪するように、殴る。

殴られている『ヒーナス』は気づいていないだろうが、第三者がこの光景を見たとき、こう思っただろう。

悪魔の羽と尻尾を生やした人間が、片翼の堕天使を蹂躪していると。

「うぐ……。貴様ア……！」

「やっぱりね。それがあんた、本来のあんたね。気に入らなかったのよ。考え方もそうだけど、その作った感じの話し方がね！」

『ヒーナス』態度が変わったことに、ユフィーは嫌悪感を抱いたような表情になった後、最後と言わんばかりに思い切りスターレインで殴る。

「がはっ！ この女ア……いい気になってんじゃ……ぐふっ！」

「だから気に入らないって言ってるの。自分の本当の名前すら言えない、偽りしかできない奴等に、世界なんか変えられないわ！ 世界を変えられる奴って言うのわね……誰でも平等に、笑いかける事のできる奴なのよ……！」

『ヒーナス』を未だに殴りつづけているが、その中でユフィーは思う。

ルナニスクルメアの理想はいい。なぜ月を一つにすることで魔物が

いなくなるのかは知らないが、平和のためだ。

だが、そこに犠牲が出ること。そこに、笑顔がないこと。そこに、幸せを感じられないことがユフィーに取っては許せなかった。

ユフィー自身も最初はミーナの仇が取ればそれでいいと思っていた。

だが、今回の旅で様々な人の思いに触れ、感じ取り、そして、想い人の苦悩を聞いてユフィーは変わったのだ。

何が正しいのかを考える事のできる、心の余裕を持つことができたのである。

「…そんな人間、この世にいると思っていますか。…私たちのような者にも笑いかけれるんですか!？」

いつの間にかユフィーが殴ることを止めていたせいか、『ヒーナス』は冷静な口調に戻ってユフィーの言葉を糾弾する。

——自らの忌み嫌われる、堕天使の片翼を見せて。

「当たり前よ! あいつは…あいつは…そんな事で、人を変な目で見たりしない! あのバカは、どこまでも優しいのよ!」

「優しさで世界が変わると? そんな考えで、人の領域に踏み込むんですか、あなたは!？」

クリスフリーズを振り、更なる白銀の世界を生み出す『ヒーナス』。

だが、動揺している事で制御が甘くなっているのか、その吹雪の範囲は小さく、ユフイーには届かなかった。

「踏み込んでやるわよ！ あいつがそうだったように、あたしも――！」

そう言って、一步を踏み出す。

大きく、『ヒーナス』に向かって。

分かり合うための、一步を。

「――あたしは、あんたを否定しない！ 殻に閉じこもってるだけじゃ何もできない！ 何が正しいことなのかなんて、そんな事は後で考えればいい！ あたしは、あんたを救いたいのに！ あたしが救われたように！」

「…救う、ですか…。これまた面白いことを言うのですね。…ですが、悪くない」

握っていたクリスフリーズを消滅させ、やれやれと言った風に頭を振る『ヒーナス』。

そして、手を差し出しながら彼は、いつものような含んだ笑みを浮かべて言う。

「…女性が泣きそうにしているというのに、男がいつまでも頑固になっている訳にはいかないでしょう？」

「っ！ ふ、ふん！ な、なによ急に！」

『ヒーナス』に言われて初めて気づいた、頬をつたう涙。

それを必死に拭いながら、ユフィーは少し頬を赤らめて虚勢を張る。

「：では、この忌み名捨てさせていただきますしょう。私の本当の名前は、ノルディア・カステイ。：他の者たちも、救って上げてください。特に、私たちを纏めている、あの方を：」

少し悲しそうな、寂しそうに言うノルディアに、ユフィーは自信を込めて言った。

「分かってるわよ。あたしは、そのために来たんだからね」

バチバチバチ！

ドン！

「あーはっはっはっはっ！！　いいねいいねえ！　楽しい、楽しいぜえ！！！」

「下品な笑い方は、嫌いです！」

「嫌われて結構。俺達や、嫌われもんだからなあ！」

笑いながら雷速で移動していた『エルブレイア』の蹴りが、リィナを襲う。

その計り知れない速度で繰り出された蹴りは、リィナがほぼ無意識で展開している風の障壁を突き破り、しっかりとリィナに届いていた。

「つぐう！　こ、の！」

「おおっと。簡単には、喰らってやれねえな」

繰り出される突きを、青白い光を携えながらひらりひらりと避けていく。

その間にも、リィナから繰り出される風の砲弾は容赦なく空間を削り取っていった。

「…避けないでくださいよー。当たらなきゃ意味ないじゃないですかー」

「てめえ、可愛い顔してその台詞はどうかと思うぜ？」

「あなたにそんな事言われても面白くありません！」

「へえ。誰だったらいんだよ？」

「あ、あなたに何か教えません！」

照れ隠しなのだろうか、少しだけ赤く染まった頬を隠しながら、風燐華を振るうリィナ。

そこから生み出された竜巻は、その状況を楽しんでニヤニヤと笑っ

ていた『エルブレイア』を飲み込んだ。

「んなっ！　ちいっ！　轟け雷、雷雲よ。我が天空に具現せよ。啼
け、その莫大なる力を持つて！　『雷天ノ裁』！」
サンディアマ・ジャツジメント

竜巻に翻弄されながらも、呪文を唱え、魔法を行使する『エルブレイア』。

放たれた魔法は竜巻より高く、天空から降ってきた。

幾重にも束ねられた、雷の本流。それはまさしく、天からの裁きだった。

「死ね」

ドガアアアン！

「キャアアア！」

その雷は『エルブレイア』の無慈悲の一言で落下し、リィナに直撃した。

凄まじい音と光と熱量がリィナを襲い、リィナはその熱量に耐えられずに悲鳴を上げ、崩れ落ちる。

服の切れ端は炭化し、墨になっている。そんな半ば骸と化したリィナを見て、消滅した竜巻から抜け出した『エルブレイア』は笑う。

「あーっはっはっはっは！！　他愛もねえ！　やっぱり風が一番弱えよな！　俺の雷が最強だぜ！」

『エルブレイア』の言う通り、いくら魔法といっても上下互換がある。

相克の関係もそこに当てはまるが、何よりは実態を持つか持たないかが大きな分け目となるのだ。

風は所詮風。いくら強力な竜巻や嵐を巻き起こしても、所詮は軽い。だからこそ魔法の中では一番弱い。ある一点を除けば。

「うう…」

「まだ立てるのかよ。…いい加減くたばった方がいいんじゃないか！？」

呻き声を上げながら立ち上がりとうとするリィナに、『エルブレイア』は指先に集めた魔力で小さな雷を作ってリィナに飛ばす。

その小さくとも止めになるはずの威力の雷は、リィナに当たる前に、霧散した。

「ちっ。風の鎧か、厄介なもんを…」

風は軽い。だが、それは攻撃には使えないが、動き、防御という面では絶大な効果を発揮する。

風をどれだけ圧縮しても、どれだけ強固な風の障壁を張ったとしても、それは軽い。

つまりは、まったく術者の動きを阻害しないのだ。

それはリィナのような純粋な剣士にはうってつけの能力であり、望むべき能力である。

「：何かよく分からないですけど、これなら：！」

「ちいっ。ふざけんじゃねえ！」

立ち上がったリィナが、『エルブレイア』に果敢に斬りかかる。

その動きを止めようと雷を放つが、リィナが展開している障壁に全て弾かれてしまう。

今まではなかった出来事にうろたえる『エルブレイア』。

その隙を見逃さなかったリィナは、その体を袈裟斬りに斬った。

「やあっ！」

「ぐはっ！」

右腕を斬られたことで血が噴出し、その体と風燐華の刀身を紅く染める。

だが、その斬られた先の体を見たとき、リィナの体は固まってしまった。

「——っ！ 朱色の鱗：！」

「…そうだ。これが俺の忌み嫌われる体。そして、クロストティアである証だ！」

服を破り捨て、血が流れつづける体を気にせず動く。そこに現れた、皮膚ではない朱色の鱗。

斬りつけられた事で出来た右腕のそれを、憎しみのこもった目でみつめ、そして、決った。

「——っ！」

その凄惨な光景に、息を飲むリィナ。

だが、『エルブレイア』はそんな事も構わず、ただ傷口を抉る。

そして、その手が止まったと思ったとき、その傷口はぴったりと塞がっていた。

「そんな！ どうして…！」

「これが俺の忌むべき体だ。どうしてかは知らねえが、傷を弄りゃあ治んだよな」

自らの血で汚れた手を、綺麗に舐め取りながら言う『エルブレイア』。

なかなか扇情的な光景だが、リィナはその光景を見て気づく。

『エルブレイア』の体の異変に。

…グヂ…

「っ！ 腕が！」

「…限界か」

肉がずれる音が響いた後、その右腕の傷口があった場所から角が次々に飛び出す。

エルブレイアの名の通りの飛び出した三本の角は、黒く鈍く光る。

その角を見て、『エルブレイア』は少し残念そうに呟いた。

「限界？ どういうことですか？」

「そのまんまの意味だ。俺はもう死ぬのさ。…この角に食われてな」

「えっ!？」

「驚くこたあねえ。あの四人の中で、俺が一番死期が近かっただけ。それで、この力を使ったことで、その死期がさらに早まっただけだ」

クロストティアはその尋常ならざる身体能力のために短命だ。そして、その身に宿った力を使うことは、その身を削ることになる。

それほどまでに魔物の力は強大。人の身の体の大きさと、その力を扱うことは不可能なのだ。

『エルブレイア』はそれが分かっているのに、リイナと戦った。

自らの最後を、自らが好きな戦いで終える為に。

「そんな…！」

「んな悲しそうな顔してんじゃねえ。俺はこれで満足してんだ。だからよお…戦おうぜ！」

そう威勢よく叫ぶと、リイナに殴りかかろうとする『エルブレイア』。

だが、その拳はリイナに届くことはなく、リイナが出した風に阻まれ停止した。

「なぜなんですか…！」

「は？」

「なんでそんな簡単に命をあきらめられるんですか！」

感情に任せて放たれた暴風は『エルブレイア』を打ち、その斑模様の黄色の髪を揺らす。

リイナには分からなかった。『エルブレイア』のその感情が。

疲れきったその目の理由が。

「あきらめる、ねえ…。だって仕方ねえだろ？　それが運命って奴なんだからよ。その運命を俺も呪った。だからこうしてここにいるんだがなあ」

「運命って…。呪うなんて、なんでそんな事…ぐっ！」

「なぜなぜなぜうるせえな！　これは俺が決めたことだ！　お前なんかじゃ関係ねえんだよ！　ましてや、心配される理由も同情される理由もな！」

リィナの首を掴み、そのまま壁に押し付ける。

風の障壁に阻まれて完全には掴んでいないことが分かってはいるが、それでも憤りは押さえられなかった。

「でも…私は、分からないんです！　私だって、なんでこんなことになるんだろうって思ってた時期がありました！　親も恨みました！　周囲を呪いました！　でも、生きることを止めはしなかったんです！」

首を押さえられ、無意識で行っていた風の障壁の展開も、今は自覚して行う。

それほどまでに、『エルブレイア』は怯えているのだ。

リィナに心配されることを。

——同情を寄せられることを。

「これが運命だからって、そんな簡単にあきらめたら負けじゃないですか！　足掻いて足掻いて、その先に掴むものが、本当の幸せじゃ、ないんですか！」

「そんなもん分かってるよ！　でもな、足掻いても足掻いてもどう

にもならねえことぐらいあんだよ！」

ドカッ

リィナの首を絞めていた方の逆の手を、リィナに向かって思い切り振り下ろす。

だが、その拳はリィナの顔ではなく、その後ろの壁を殴っていた。礮の壁を殴ったことで、その手からは血が滲む。

しかし、そんな事はお構いなしに『エルブレイア』は言葉が続けた。

「それに俺達に本当の幸せなんか掴む必要なんかない。俺達はどうせ、遅かれ早かれ死ぬんだから……」

「っ！　だったら、なんでそんな悲しそうな目をするんですか！　死ぬことが怖いから、そんな目をするんじゃないんですか!？」

リィナは『エルブレイア』の目を覗き込みながら言う。

その瞳に宿った真剣で真っ直ぐな光は、とても眩しかった。

そして、熱かった。

「私はシオンさんたちに会うまで、きっと同じ目をしていました。でも、変わったんです。変わったんです。仲間の、友達の言葉で！　だから私はあなたに言います。『ともに生きましょう!』」

「……ふ……。やっぱり可愛い嬢ちゃんだな。そして甘い。だけど……そ

の甘さこそが俺達に必要なのかもな」

「『エルブレイア』さん…」

「俺の本当の名前はインジュ・モークスだ。もう、『エルブレイア』としての俺は終わりだ。これだけは、てめえに何と言われようが変わらねえ」

リイナを掴んでいた手を下ろし、疲れたように息を吐くインジュ。

「参ったよ、てめえの目に。やり残した事なんてものはねえが、賭けてみてやるよ。お前たちの思いによ」

「モークスさん…」

「俺の命が続くまでに、見せてくれよ？」

「はい！」

どこかまだ気だるそうだが、インジュはリイナに笑いかける。

その笑みを、リイナは受け止めた。

花が咲いた様な満面の笑顔で。

「…おい。いつまでやるつもりだ？」

「…いつまでも、だよ！　…私が、君に、勝つ、まで！」

「無理だろ」

「無理じゃ、ない！」

「どっから湧いてくんだ、その自信は…」

「ハアア！！！」

「無駄だって、言ってるだろ！」

ゴシヤ！

「くはっ！」

大振りに振られたソルトレスターを防ぐ事が出来ず、その大剣の腹にぶつかって吹き飛ばカナ。

その体は完全に満身創痍で、所々から血が流れ、その左腕は肘が嫌な方向に曲がっていた。

そんな状態でも突っ込んでくるカナに、『コーガディーガ』は苛立ちを込めて吐き捨てた。

「お前が俺様に敵うはずねえんだよ。体術でも、魔法でもな」

「そんなこと…ない！　私は、少なくとも負けてるなんて思っていない！」

「んなものの何が役に立ってんだ…」

「自分を偽ってる人間なんか、私は負けないの！」

「あ？」

カナの言葉に、『コーガディーガ』の魔力が爆発的に膨れ上がる。

だが、不幸なことに魔法が扱えないカナはそれが分からない。

堰を切ったように、カナは言葉を述べていく。

「私は偽りなんかしない。自分の思いに、正直に生きてるの。だから、私は君より強い！」

「黙れよ。お前が俺より強えだあ？ 笑わせんじゃねえ！ そう言うなら俺様を倒してみろよ！ できねえだろ！？ ええ！？」

怒りに応えるように、『コーガディーガ』の足元から土の槍が飛び出す。

その土の槍は、真っ直ぐにカナへと向かいその猛威を振るう。

痛めた体に鞭打ちながら、右手一本でレストーションを振り回し、その土の槍を迎撃するカナ。

だが、その体で全ての土の槍を迎撃するのは不可能。

カナは打ち落とした土の槍に体を突かれ、膝を落とす。そのカナに追い討ちをかけるように、無慈悲に土の槍はカナの体に降り注いだ。

「クハハハハ！ お前がそんな口利ける立場かよ！ 弱え奴はさっさと死ねばいいんだよ！ 頑張ることなんか…ちっ、まだ立ちやがるか…」

「…そりゃ、立つよ。だって私、君の笑った顔、見てないからね…」

「笑った顔だあ？ そんなもん見てどうすんだよ。それに、今も俺様は笑ってるぜ？ お前みたいな弱え奴を見てなあ！」

「そんなの、本当の笑顔じゃないじゃん！ 私は、ここまで来たのは単に楽しそうっていう理由だけだったけど、今は違う。ちゃんとした、私の考えがある！」

「へえ…。聞かせてみるよ。お前のその考えてやつを」

『コーガディーガ』はソルトレスターを壁に立てかけると、それにもたれ掛かるようにして聞く体勢を取る。

聞く態度としては最低極まりないが、今はそんな事を気にしているほどの器量はカナにはなかった。

「私には、元気しかないの。元気な事しか取りえがないし、それでいいと思ってる。だから、王様に言われて思ったの。私は元気で、笑顔を絶やさずに生きていくって」

「…で？」

興味があるのか、顎で指し示すような形ではあるが、それでもカナの話を真摯に聞く『コーガディーガ』。

「だから私は、皆に笑っていて欲しいの！ 誰もが笑っていられる世界。誰もが願うような、そんな甘い考えだけど、それでも私は願う！ 笑顔で、人を元気にさせることが出来るって！」

シリアナと話して得たカナの想いは、そんなありきたりなものだった。いや、何も持っていなかった彼女だからこそ出た答えであった。大して恵まれた環境にいるわけでもないのに、楽しく生き生きと生きられていた。シオンたちに会い、ここまで来るまで。

それは、彼女自身の笑顔があったからだ。誰もが心を開くような、そんな雰囲気を持つ笑顔が。

笑わなければ下を向いてしまう。トレジャーハンターなどという博打の様な世界で生きている彼女だからこそ、行き着いた持論だった。

だが、それでも『コーガディーガ』は納得していなかった。

ソルトレスターにもたれかかるのを止め、それと同時に掴んだその刃をカナに向ける。

しっかりと首に向けられたその刃を見て、カナは『コーガディーガ』を睨みつけた。

「願うのは結構。けどな、願うだけじゃ何もかわらねえ。『力』が無けりゃ、この世界では生きていけねえんだよ」

服の下に隠された自らの忌むべき部分。黒く染まった足を曝け出しながら、『コーガディーガ』は迫る。

彼女自身も分かっている、甘い考えに。

「そんな事分かってる。私はそうやって今まで生きてきた。でも、それは一人だった時。…今は違う。友達がいるから!」

「そんなもんがなんの役に立つってんだ。所詮は貶しあい、騙しあう。そんな関係に何の意味が…」

「そんな関係なんかじゃない! 友達は、一緒に笑いあうためにいるの! だから私は、君とも友達になる! なってみせる!! そして、本当の君と笑いあいたいから!!」

カナの想いと共に、その体の周囲が輝き始める。

濃い蒼色の光が、カナを包む。体全体を包んだ光は、カナの愛槍、レストーションにその光源を移動させ、その蒼い光が槍全体を覆った時、その光はより一層輝いた。

「な、お前! まさか!」

「私は、君に勝つ! それで、わかってもらう!! 友達は、素晴らしい人の繋がりがあってことを!!」

そのカナの変化にたじろぐ『コーガディーガ』は、次にカナが繰り出した攻撃を避けることが出来なかった。

「やあああ!!」

渾身の突き。

体全てをしならせ、唯一自由の利く右腕に全ての力を集める。

足、腰、肩、肘、手と、連動した力は槍の穂先全てに集まり、爆発した。

グサツ！

寸分変わらず放たれた槍の穂先は、吸い込まれるように『コーガディーガ』の腹を貫いた。

「ごはっ！」

「え？ な、なんで…」

「ごほっごほっ！ これが…お前の『力』か…。『魔の無き者』なんかじゃ無かったってか…これは、俺様の負けだな…」

血を吐きながら、そう言って今まで体から出していた殺気を霧散させる『コーガディーガ』。

そんな彼の様子を見て、刺した本人であるはずのカナは酷くうろたえる。

「負け？ なんて！？ あれぐらい、君なら避けれたはず…！」

「…ちっ。最後まで惚けやがって。…俺様はお前に負けた。それでいいんだよ…」

「そんなわけ無いじゃない！ 私は、君の本当の笑顔が見たいの！

そんな…こんな…！」

涙を流しながら崩れ落ちるカナ。

「これが現実だ…。ここには光の魔法が扱える魔導師も、医者もない。それに俺様はもう死ぬはずだったんだ。だから、死なせてくれ…」

「ふざけないで！　なんでそんな簡単にあきらめてるの！　私は、君に死んで欲しくないよ！　そりゃ、さしたのは私だけど…！」

「へっ…。俺様たちは元々短命。二十年も生きればいいほうなんだよ。そんな中で、俺様は力の行使も積極的に行った。そんな中で、ガタが来てねえほうがおかしいのさ…」

腹から血を流しながら自虐的に笑う『コーガディーガ』に、カナの涙が落ちる。

その涙の温もりを肌で感じながら、死を迎えようとしている男は笑った。

「…ほらよ。俺様の本当の名前、ブラデイス・ヘンナー、笑顔を受け取りやがれ」

「受け取る！　受け取るから！　だから死なないでよ！」

「ふざけんじゃねえ。俺は死にたいから死ぬ。お前の指図なんか受けねえよ。ま、お前は人を殺したことがなさそうだし、いい土産だ。せいぜい苦しめ…」

瞼を閉じ、カナの願い通り笑うブラデイス。

だが、その願い通りの彼の笑顔を見ても、カナの心は晴れるどころか曇る一方だった。

人を殺したと言う事実。魔物なら何度でもあるが、自らと同じ形をもつ生き物、『人』を殺したことは彼女には無かった。

「…ねえ…私、笑ってるよ…？　だからさ…」

涙を流しながら、カナは笑う。

引き攣ったくしゃくしゃの笑顔だが、それでも彼女は笑っていた。

自らの想いを、自らで踏みにじらない為に。

だが、彼女に科された運命は、残酷だった。

腕の中で冷たくなるブラデイスの体を握り締めながら、彼女は泣く。

自らの無力と、運命の残酷さに。

「…だからさ…笑ってよ…ねえ…？」

カナの願いは虚空へと消え、空しく響いた。

最後の信実

「ユフィーー！」

「シオン！ 無事だったのね！ って、後ろの奴は！」

「わー！！ 待った待ったユフィーー！ 彼女はもう敵じゃないから！」

合流を果たしたシオンとユフィーー。

穏やかにその再会を喜ぶものと思われたが、シオンの後ろから現れた女性を見て、ユフィーーがスターレインを構える。

だが、シオンはそんなユフィーーに体を張って止めるように指示した。

「…そう？ じゃあいいわね。こっちのも敵じゃないから」

「はい。改心させられてしまいましたから」

「…貴様もか…。…なら、他の者もそうっていそうだな」

「うん。みんな優しいから。まあ、どうなってるのか何て分からないけど」

「だからこそ私に道案内をさせているのであろう？ ここからは殆

ど一本道だ。そうそう迷うこともあるまい」

「…こっちには約一名それでも迷いそうなのがいるけどね」

「…あの子は…まあ仕方ないでしょう」

リュウナの言葉に、シオンが仲間の一人を思い出してため息を吐く。
その仲間を知るユフィーも、ありえそうだとため息を吐いた。

「まあいいや。僕等は急ごう。この先にいるんでしょ？」

「ああ。ハイアット・エンジェナー。ルナニスクルメアを作った張本人だ」

リュウナのその弦きは、しっかりとシオンとユフィーの心の中に響いた。

「なんだ。貴様はまだ生きていたのか？ てっきりくたばっているものだと思っていたが」

「勝手に殺すんじゃない！ 俺はまだ生きてるよ。残念ながらも」

「へえ…。てっきり一番弱いあなたの事ですから、命乞いでもしているのかと」

「んなもん誰がするかよクソ野郎！」

シオンたちの目の前で、そんな漫才のような遣り取りを繰り広げるクロストティアの三人。

その遣り取りが繰り広げられている後ろで、合流を果たしたリィナがシオンとユフィーに、今までの経緯を話していた。

「シオンさん！ ユフィーさん！ 無事だったんですね！？」

「君の方こそね。迷って変な所行ってるんじゃないかと思ったよ」

「うう…それはひどくないですか？」

「ひどいも何も、事実じゃないの」

「ううー…苛めないでくださいよー…」

いや、ただ単に二人がリィナを弄っているだけだった。

「で、後一人はカナなんだけど…」

「後はもう上へ上がる階段しか残っていない。奴は最後に残っていたからな。だが…」

「ユリとカイに会った時ほどではないけど、ずいぶんと臭うわね…」
再び奥へと歩き出した一行は、その先から臭うある匂いに辟易して

いた。

正直辟易しているのはクロストティア以外の面々なのだが、それでも思う。

そう。考えずにはいられなかった。

どちらも生き残っているのか。はたまた、どちらかが生き残っているのか。はたまた、両者死んでいるのか。

シオンたちとしては前者に賭けたかったが、その先から漂う気配は、その答えが間違いだと雄弁に語っていた。

「カナ！」

座り込んだまま黙ってしまっているカナを見つけ、シオンがその名を呼ぶ。

だが、その本人は何の反応も示さず、ただ下を向いているだけだった。

「……………」

「ちょっと、どうしたのよ。あんたらしくないわよ？」

「そうですよカナさん！ 笑ってくださいよ！いつものように！」

そんなカナの様子を不審に思った残りの二人は、そう励ましの言葉をかけるように言葉を発する。

その二人の言葉を受けて、ようやくカナは顔を上げた。

涙で濡れたクシャクシャの顔を。

「カナ！　いったいどうしたって…」

「死んだか…。いや、そこにいる者が殺したのだな」

「ええ。あの方なら死ぬことは無いと思っていたのですが」

「へっ。大方油断してるときにグサツといったんじゃねーか？」

シオンの心配する声を遮るように、クロストティアの面々の声が上がる。

そのかつての仲間を心配しているとは思えない言葉にシオンが軽く引いていると、その中にあった言葉にカナが反応した。

「……殺した…。私が、殺した…。…初めて、人を……。うわああああああ！」

殺したという事実を再認識したカナは、慟哭の声を上げて錯乱する。

人にとって最大の禁忌である『人殺し』。

それを犯したことによって、カナは本来の自分を塞ぎ込んでしまったのだ。

そんなカナを見て、ユフィーとリィナはどうすることもできず、ただ立ち竦むだけだった。

気持ちには分かる。だが、それもある一定のものまでだ。人を殺した経験など、二人には無いのだから。

そして、クロストティアの面々はこの事に関しては首を突っ込む事は不可能だ。

見ず知らずとまではいかないが、それでもよく知っている者にしか、この様な話は繊細過ぎて手出しはできない。

だからこそ、五人はシオンを見た。今までの経験からした、絶大な信頼を寄せる人物に。

クロストティアからは期待を、ユフィーからは当然と、リイナからは必死な。

そんな様々な視線を受けて、元よりいくつもりだったシオンはゆっくりと足を踏み出した。

「カナ…」

「っ！ し、シオン…君…」

「こう言うのが君にとって最善なのかは分からない。でも、僕はあえて言うよ。彼は『眠った』んだ」

「…眠っ…た…?」

「そうだよ。だって、こんなにいい顔で…。普通なら、こんな顔はできない。きちんと救ってあげたんだろ？ 彼の、心を」

「：分からないよ：。：私には：なにも」

最後に笑った顔のまま息絶えているブラデイスを見て、シオンはカナにそう諭す。

その言葉を聞いたカナは、頭を振りながら未だに納得していない顔を浮かべる。

だが、シオンはカナのそんな様子にお構い無く、自分の持論を展開していく。

「分からなくていいさ。それが普通なんだから。経験したことがないことを経験する、だから悩むんだ」

「初めてだから、悩む：？」

「そう。初めての事で悩まない人間なんていない。それに、僕はカナと同じ事は経験していない。でも、これだけは言える。カナは、出来ることをやったんだ」

「：やってなんか無い。だって、結局はこの人の笑顔を見てない。：私は、この人の笑顔を奪ったんだよ！」

「でも、最後は笑ってるじゃないか！ 彼の笑顔を引き出したのは君だ！ カナ自身が彼に笑いかけたから、笑って欲しいと願ったから、彼は笑って逝けたんだ！」

泣き叫ぶカナに、シオンの激が飛ぶ。

自らがなした偉業を、しっかりとその目で見てほしくて。

「…でも、でもでもでも！」

「でもない！ それに、そうやって悔いる気持ちがあるなら、彼の分まで生きるんだ！ 彼のほかに、笑っていられる人が増えるように、努力すればいいじゃないか！」

それでも悩むカナに、シオンは想いをぶつける。

その想いはほぼ彼の想いその物だったが、それでもよかった。

たったそれだけの事で、一人の少女の心が救われるのなら。

「…生きる…」

「そうだよ。生きるんだ。生きて、その事をなすんだ」

「…分かった。…ありがとう、シオン君」

「礼を言われることはしてないさ。でも、どういたしまして」

差し出されたシオンの手をカナは握り、立ち上がる。

そして笑った。

今までの彼女のように。泣き腫らした目を隠せてはいないが、なるべく自然に。

彼女らしい、元気な笑顔を。

「…ここだ。ここからが、私たちも知らない場所になる」

「そっか。ありがとう、リュウナさん」

「札など言われたくないな。ただ、私は出来ることをした。それだけだ」

「それでも。ありがとうとは言わせてもらおうよ？」

「ふん。勝手にしろ」

リュウナに案内されて辿り着いたのは、大きな扉の前。装飾が一切施されていない、大きな石の扉。

これが砦の性質上重要なものかはまったく分からないが、それでもシオンたちは感じずにはいられなかった。

その扉の先から放たれる異質な雰囲気。

「…ごちゃごちゃ言う必要は無いわ。さっさと行き…」

「その通りだ。早く来い」

「っ！」

扉を開けようとしたユフィーが、その扉の先から響いた男の声に扉

にかけた手を止めた。

そして、その手から扉が離れ、独りでに開け放たれる。

ゆっくりと鈍い音を立てながら開く石の扉に、クロストティア以外は武器を構え、戦闘態勢をとった。

「無様だな。簡単に心を許すなど」

グサッ

「ちっ！」

「がっ！」

「て、てめえ！」

突如として飛来した鉄の槍が、シオンたちの後ろにいたクロストティアたちに突き刺さる。

普段なら避けることもできたはずの早さで飛来した鉄の槍だったが、それを放った人物が問題だった。

「ゴミはいらない。簡単に心変わりをするような奴はな」

槍を投擲し終わった形跡など無いのにもかかわらず、それでもシオンたちには分かった。

この灰色のよれよれの髪を後ろに纏めた、タバコを吹かして余裕の表情を浮かべる男が、それを行ったのだと。

今の今まで仲間だった者を、平気で傷つけたのだと。

「なっ！ 何て事をしているんだ！ 仲間だったはずだろう！？」

辛うじて致命傷は避けたようだが、それでも肩や足、腕に突き刺さった槍を見ながらシオンは叫ぶ。

「仲間？ お前たちの茶番は全てその言葉で片付けるな。クッククク：笑わせてくれる」

「何を…！」

「もう分かっているんだろう？ 俺がハイアット・エンジニア。こいつらを使って色々としたもんさ。そして俺は、クロストティアじゃない」

その唐突な告白に、シオンたちはおろか、クロストティア達も度肝を抜かされる。

こんなことをしでかしているのだから、当然この黒幕風な男も、そうなのであろうと全員が思っていた。

「さて。俺が用があるのはその小僧だけだ。他はいらないな。死ね」

呟きともとれる小さな言葉とともに、今度は短剣が投げられる。

その投げられた量は計り知れず、視界全てが短剣に覆われた短剣の壁が出来上がっていた。

「くそっ！ 時を早め、その脅威を全て無へ。あるべき物を、終わらせよ！ 『速メ、無へ（スピーディア・ゼロ）』！」

シオンの体から、時の魔法特有の金色の光が放たれる。

その金色の光は、迫りくる短剣の壁以上にその光を伸ばし、その端から包み込んでいく。

そして、変化は起こった。

金色の光に包まれた短剣は錆び、風化していく。

劣化していくその様を見たハイアットは、大して驚いた風でもなく、新たな策を講じた。

「やはりな。だが、お前の体力は持つのかな？」

「はあ：はあ：はあ：。：持たせて、見せるさ」

額には玉のような汗が浮かび、見るからに苦しそうなシオン。

ユリが言ったようにしつかりと意識を保つようにはしているが、一瞬でも気を抜けば後がどうなるかが分からない。

死が待っているのかもしれないと、シオンは覚悟していた。

そして再び、短剣が小規模だが密度の濃い状態でシオンに向かって放たれた。

「く、そっ！ 時を――」

「あんただけに、重荷を負わす事はしないわ」

「そうですよ。私たちも、頼ってくださいね？」

「右腕しか使えないけど、君を守ることぐらいならできるよ！」

時の魔法で向かえ討とうとしたシオンの脇を、頼りになる仲間の少女達が通り過ぎる。

短剣を凍らせ、風でなぎ払い、槍で弾く。

頼もしい仲間の助けを得て、シオンはハイアットに向かって笑みを浮かべた。

「まだ、やる気ですか？」

「当たり前だ。これは、世界のための戦いだ。正しき世界を作るためには、今ある偽りの世界を壊すことこそが、世界のためなのだから」

「世界のため？ 彼らも言っていた。なぜ月を一つにすることが、平和になると言うんだ？」

唯一解けなかった疑問。

月の存在。これがなぜここまで重要なのか。

そして、それで本当に世界が平和になるのか。それがシオンにはま

まったく想像がつかなかった。

「…人の月、魔物の月。ならば魔物の月が無くなれば、平和になる。これが、古より伝わりし、月の伝説」

「…そんな事ができる訳ないでしょう？ 月はこの空の遥か彼方、その先にあるのよ？ どうやって手を出すっていうの？」

ユフィーがハイアットの言葉に噛みつく。

月は空に輝いている。それに手が届いた者は、この世界中どこを探してもいない。

リイナのような風の魔法を扱える者でも、どんな科学技術を持っても、その領域には誰も至ってはいないのだ。

その事を端的に示したユフィーの言葉に、ハイアットは笑う。笑いを堪えるように、下を向きながら。

だが、それもすぐに終わり、真っ直ぐにシオンを見つめた。

血走った両目で、シオンの中にある、時の力を睨むように。

「…これだから無知は嫌いだ。あるのだよ、方法がな。その時の力を…『禁忌の力』を…『失われし魔法』を使えばな」

「禁忌の力？ 失われし魔法？ 何を言っているんだ！」

「言葉の通りさ。…時の力の象徴…時の魔剣…。その力を持って、俺は世界を作り直す！ その力、『エヴィーディタイマー』を持っ

て！」

その言葉と共に、シオンとよく似た、だがどこかが、何かが決定的に違う金色の光がハイアットを包み込んだ。

悠久の時

「なに！？　こ、これは！」

「シオンと同じ光…じゃあ！？」

「いえ！　何か違います！　こう…何かが！」

「私も分かるよ。暖かくない、全然、冷たい光…」

ハイアットの声と共に出現した、金色の光。

その金色の光に狼狽えるシオンたちだったが、唯一カナだけは冷静だった。

いや、悲しそうな顔をしたまま、その光を見つめていた。

「分かる。あの光には、優しさが無い。シオン君とは違う…絶対に違う、冷たい光…」

「…！　カナ！　その光は！」

「私が、冷やしてあげる。これで！」

シオンがカナの異変に気づき、声を荒げる。

だが、どこか意識が無いような目をしたカナは、右手一本で槍を振り回した後、その槍に宿る蒼色の光に命じた。

「…水龍。走れ、伝え、踊れ、喰らえ、捕らえよ。鎖となりて、敵を締め上げる！」
『ドラゴニック・チェイン 水龍流鎖』！」

レストーションに纏った光が、絡みつく水龍となり、猛る。

そしてその龍は命を受けた通りに、ハイアットに絡みつき、締め上げた。

「…この程度か？ 興ざめだな」

体に絡みつく水龍を余裕の表情を浮かべたまま引き千切る。

その行動に驚愕を浮かべる面々に、ハイアットはただ手を掲げた。

生まれたのは、金色の光。その金色の光の性質をよく知る者たちは、その脅威に顔を歪ませる。

だが、その金色の光はすぐに霧散した。

「へ？ ど、どういうこと？」

「…俺には時の力は無い。これはただの虚像。ただ、本物を模倣しただけの劣化番だ」

「どうしてそんなものをあんたが使えるのよ。それに、そんな光なんてシオンのを見るまでは見たこともなかったわよ？」

「当たり前だ。これは俺が独自に調べ、復讐のために会得した物。だから足りない、足りないのだ。全て、俺が望む物には！」

激昂し、シオンに向かって突撃していくハイアット。

得物もなく、ただその身そのままの突貫だが、その動きは素早かった。

「くっ！ 君は、何がしたいんだ！」

「聞いていなかったのか？ 俺はただ、世界を作り直す。復讐のために」

「ふざけるな！ ただの私怨で、そんな事を行うなんて許されるはずがない！」

「許されると思っているなら、こんなことはしないと思うがね！」

ガキーン！

ハイアットが隠し持っていた短剣と、シオンのカテドラルが交差し、金属特有の嫌な音を奏でる。

その見事な鏖迫り合いに、ユフィーたちは手が出せず、見守るしかできなかった。

「だからって、何でこんな事を！ 復讐なんて、絶対に間違ってる！ 負の感情に縛られたまま生きてちゃ、絶対に笑えない！ 心から、笑うことなんかできない！」

「そんなもの必要ない！ なぜ笑わねばならない！ 何のために笑う！ お前は、何のために！」

「仲間だ！ 友達だ！ …大切な人達のために、僕は笑う！ 笑ってほしいから！！」

ギャリイン…

何とかハイアットの猛攻を弾き飛ばし、その出方を伺うシオン。

あの奇っ怪な模倣した偽者だという金色の光。あの光以外は、ハイアットの動きは普通だった。

いや、普通と呼ぶにはありえない短剣の扱いや鬼気迫る気迫、全てが一級品だった。シオンが少しでもその刃に振れていないのは、カテドラルの武器の特有性にあるだろう。

だが、それでもハイアットは諦めることはせず、再びシオンに向かって突進していく。

今度は短剣を二本、両手に携えての突進。

その突進を、飛び出したリィナが受け止めた。

先ほどのシオンのような鏢迫り合いを演じ、風燐華に魔力を集中させていく。

溢れ出す魔力は風燐華に風を纏わせ、その風を暴風へ、竜巻へと変化させる。

しかし、その竜巻を目の前にしてもハイアットの表情は変わらなかった。

「邪魔だ。失せろ」

「失せません！ あなたには、教えてほしいことがあります！」

「俺には無いな、お前に教えることなど。消えろ、風」

風燐華に風を纏わせているというのに、ハイアットは一步も引かず、逆に攻撃を繰り返してくる。

両手の短剣を振り、様々な角度から切りつけていく。

得物の長さからか、短剣の取り回しは速い。それが、リイナにとっては決定的な致命打となる。

二本の短い短剣と、長さのある風燐華の刀身。その圧倒的不利な状況をリイナは覆せず、風燐華と共にその体を弾き飛ばされた。

「リイナちゃん！　へー…君、結構強いんだね」

「覚醒したとは言っても、所詮は腕一本。お前に俺が殺せるのか？」

「…こ、殺す…」

「見ていたぞ？　先ほどの戦闘。お前に、俺が殺せるのか？」

二度目のハイアットの質問。

その質問の重みに、カナは一瞬たじろぐ。

だが、彼女にはついてくれている仲間がいる。想いを分けてくれた、恩人が。

「…殺さない。…私が殺すのは、君のその思いだよ。絶対、それは間違ってるから!」

「お前に決めつけられる同義は無い。お前も消え失せろ、水」

無意識の状態だが、それでも槍に纏わせている水は、カナの思いに応えて猛っている。

ざわざわとうごめき、放たれるのを待つ水の本流を、カナは解き放つ。

目の前に立つ、狂気を身に宿した男の、その狂気を洗い流すために。

放たれた水の本流は、前回と同様龍の形をとってハイアットに迫る。

その水龍を、ハイアットは握り潰す。その人間とは思えない芸当に、魔法が扱える身として旋律を覚えるユフィー。

だが、カナはその事が予想できていたのか、レストーションを真っ直ぐに突き刺す。

走るハイアットの足元へと突き出された槍を、ハイアットは冷静な表情のまま踏み落とした。

「なっ! これ、なら!」

「無駄だと言っている。お前はもう退場している」

「カナ！ 引きなさい！ 凍りつけ。永遠の牢獄へと、その魂を閉じ込めよ。咎を受けしは、心の闇！ 『牢獄ノ氷闇』！」
ジュエル・アイダーク

薄く濁った氷の牢獄が、ハイアットに向かって落ちる。

その牢獄は微妙な位置調節により、見事にハイアットの頭上に綺麗に落ちた。

「こんなもの！」

「簡単には壊れないわよ。だってそれ、一番固く作った奴だから」

「関係ない。全てには綻びがある。だからこそ…！」

バキヤァン！

「えっ！？ そ、そんな簡単につ！」

「お前は無用だ。魔法が無ければ、意味が無い。無くなれ、氷よ」

スターレインを構え直すユフィーだが、そのスターレインを弾き飛ばされてしまう。

簡単に蹴り飛ばされてしまったスターレインを握っていた手を見て、ユフィーは愕然とする。

「お前はそれだけしかないのだ。魔が無ければ、お前はこうすることもできない」

「そんなこと！」

「ユフイー！ いいんだ、下がってて！」

「シオン！？」

「僕がやる。大丈夫、僕は大丈夫さ」

シオンがユフイーを止める。

スターレインが手元に無い状態で戦うのはかなり無茶だが、ユフイーとしてはまだ戦えた。

魔力も残っているし、怪我もない。

だからこそユフイーは戦いたかったのだ。シオンと共に、同じ立場に。

だが、シオンはそれを止めた。後ろで待っていて欲しくて。

帰るべき場所を、守っていてほしかったから。

その想いを込めたシオンの言葉に、ユフイーは黙るしかなかった。

「さあ、始めようか。君は、僕の力が欲しいんだろ？」

「ああ。その力のためなら、俺はなんでもしてやる」

「なんでも、ね。僕は、その考えは分からない。だって、力を求めるだけでは意味ないじゃないか」

「はっ！ 意味なんか求めていたら、何も出来はしない！ だからこそ、俺は求める！ 力を！」

「復讐のために、力は使わせない！ この力は！」

シオンがそう叫び、自らの手を胸に突き入れる。

金色の光を帯びたその手を胸から引き抜き、そこからハイアットが求める力を取り出すシオン。

彼には聞こえていたのだ。

自らの中に宿った、時の聖霊エヴィデンスから。

『君の心臓が、この者が求める力、エヴィーディタイマーだ。それを見せよ』と。

「それが、エヴィーディタイマー…。世界を変える、時の力か…」

どこか陶酔したような表情で、シオンの体から生まれた金色の光を見つめるハイアット。

その金色の光は形を変え、剣の形を取っていく。

「そう。でもこの力は悠久の力。時の流れを統一し、操る禁断の力。…この力を、君の復讐何かに使わせはしない！」

剃りの強い片刃の剣を、慣れないながらも構えるシオン。

その剣を見て、ハイアットは走り出した。

「それを寄越せ！ その力があれば、俺の願いは叶う！」

「願いを叶えるためだけに、力を欲するなんて！ 与えられるだけの力に、何の意味があるっていうんだ！」

「それが持たぬ者の考えだ！ 持つ者がその想いを理解することはできない！」

「出来るさ！ それが出来るように、僕は努力してきた！ 民たちに理解され、信頼されるために僕は努力する！ お互いがお互いを求めあえる中になれるように！」

「そんな絵空事！」

取り出した短剣をぶつけ、想いと共に切りつけていくハイアット。

その動きについていくのが精一杯のシオンだが、鏢迫り合いに持っていくようにシオンは動く。

シオンは戦いたくないのだ。彼すらも、助けたいのだ。

「僕は君を助ける！ そんな復讐にとらわれた君の心を！ この時の力は、そのために手に入れたんだ！僕は、みんなが幸せで笑っていられる、そんな世界のためにこの力を使うんだ！」

暖かな光

シオンの体から、金色の光が、時の力が溢れ出す。

手元にあるエヴィーディタイマーもその力に共鳴し、その剣身をより一層輝かせる。

「…綺麗ね…」

「…やっぱり、シオンさんの光です…」

「…暖かな光…」

その金色の光を見て、少女達は呟く。

ある者は頬を赤く染め、少年の光をみつめる。またある者はその光を賞賛し、その光を少年の優しさと照らし合わせる。はたまた、ある者は光に手を伸ばし、その温もりを肌で感じている。

三者三様のその感じ方は、あながち間違いではなかった。

「…俺は…そんな物を求めてはいない！俺が求めているのは、絶対的な力！全てを覆す、真理の時の力だ！そんな光が、俺が求めたもののはずが無い！」

「いや、これが時の力だよ。聖霊と心を通わせ、魔法を最大限に発揮する、心の光。自分で言っていて恥ずかしいけどね」

「ふざけるな！ならば、俺が求めた物はどこにあるというのだ！」

「そんなもの、最初から無かったんだ。それか、君は求めていたんだよ、救いを」

「救いなどいらない！ なぜこの俺が救われなければいけないのだ！ 救われるべきは、世界なのだ！ なぜ！？」

「君も世界の一部に決まってるからじゃないか！」

シオンのその言葉に、ハイアットの顔色が変わる。

今までただ喚き散らしていた男の姿が、おとなしくなって下を向く。全てが無駄に終わってしまったのかと。

だが、シオンのその一言はハイアットの答えだった。

彼は、全てを魔物に奪われ、復讐の時を生きていた。

世界に有り様を恨み、全てを呪った。そんな時に知った月の伝承。

それこそが、自らを貶めた世界への復讐と、救いだった。

「世界の一部だから！ 君も、世界に必要な一人だから！ 誰一人、欠けちゃいけないんだ！」

「なぜそんな事が言える！ 俺が世界に必要とされているなどと！ 全てを奪われ、滑稽にも復讐を選んだ、男の事など！」

認めたくなくて。ハイアットはシオンへと突っ込んでいった。

だが、そのがむしゃらなまでの直線的な動きに、今までのキレは一切感じられず、簡単に抑えることができた。

ドカッ！

「いい加減にしろ！　なぜそうも悲観的になる必要があるんだ！　前を、明日を向いて生きてみなよ！　そしたら、絶対に世界は、綺麗に見えるはずだから！」

そんなハイアットの動きに憤りを覚えたシオンは、その憤りのままにその頬を殴っていた。

殴られたハイアットは鑪を踏み、何とか倒れまいと持ちこたえる。

そこからの反撃は無く、ただ呆然とシオンを見ていた。

「世界が綺麗に…？　ふっ…本当にお前は綺麗事を言うのだな」

「綺麗事なんかじゃない。人の想いは、そんな物では計れないんだ。だからこそ、綺麗なんだよ」

「ククク…ははは…はーっはっはっは！　そこまで言うなら従ってみてやろう。お前の綺麗事に」

タカが外れたように笑い声をあげると、急にそんな事を言うハイアット。

だが、シオンはそれでもよかった。

それでも、男の喧騒が晴れるのなら。もうこれ以上、戦わなくてもいいのなら。

「従う必要なんかないさ。ただ、分かってくれればいい。こうやって、話してくれればいい。僕が目指す世界は、『分かり合う事の出来る世界』だから」

「分かり合う、か。…俺はお前が分からない。それでもいいのか？」

「分かってもらうように努力するよ。だから君も、分かるように努力してね？」

「…善処する…」

そして、二人は手を握らないまでも和解した。

どれだけの困難があっても、それを乗り越えたときに、人は更なる絆が芽生え、その絆は強固になっていく。

初めは綻んでいてもいい。他者と他者が本当に分かり合うことなど、本来はありえないのだから。

だからこそ、シオンは手を取り合うことで分かり合おうと努力し、話し合うことで友達になるのだ。

それが、世界をいい方向に持っていく唯一の『決意の力』だと信じて――。

時は流れ、帝国では再び戴冠式が行われようとしていた。

「いやー、シオン君って本当いい所住んでるよねー」

「そりゃ王族なんだから仕方ないでしょう？ 逆に質素極まりない所に住んでる方がおかしいわよ」

「ふわー…やっぱり綺麗ですねー。高そうな物もいっぱい置いてますー」

「…皆？ 何でここにいるのかな？」

「私がお通し致しました。殿下のご友人だと聞いたもので」

「リサーナさん。それでも簡単に通しちゃダメでしょう…」

シオンの心労はかなり極まっていた。

戴冠式前のあの異様な雰囲気二度目で受けているのに、そこにいるのは前回と違った旅の仲間の姿。

なぜいるのかと問い詰めてみれば、おもしろそうだからの一点張り。

ユフィーは元々帝国領に住んでいたためにここにくるのは簡単なのだが、リイナに至っては王国の者のはずなのだ。

この場所に来るには相当の労力があつたはずなのだが――

「兄様と父様に行きたいと言ったら行ってこいと了承してくれたので来ました。シリアナ王も来たがってたみたいでしたよ？」

とのことなのである。

その事にシオンは頭を痛めたが、せっかく来てくれた友人を追い返す訳にもいかない。なので正式な客人として迎え入れていた。

そして、カナに至ってはどこからこの情報を仕入れたのか、なぜかかなりの量の食料を持ってシオンに会いにきたのだ。

曰く、「あの時の鉱石がバカみたいに売れてねー。この腕を直すのにも一役買ったばかりか、それでも十二分に余っちゃったから、お祝いのために持ってきたんだよあっはっはっはっは！」

その際にはもう持ってきていた食料を口にしていたことは割愛する。

「で？ シオンはもう行かないといけないんでしょう？ さっきから外がかなりうるさいわよ？」

「ああうん。そろそろだね。父上も待っているだろうし、行かないと…」

重い腰を上げ、ユフィーに言われた通りに出て行くこうとするシオン。

因みに、服装はあのダサさ極まりない服装ではなく、蒼を基調とした質素なロングコートに変わっていた。

リサーナがシオンの意見を取り入れて作らせたものである。

「いってらっしゃーい！ 私たちはここで見てるよ！ 特等席をありがとうね！」

「カナ、あんまりはしゃぎすぎるとまたどやされるよ？」

「う…それは勘弁…」

「私が見てますから大丈夫ですよ」

「それもそっか。じゃあユフィー、リィナ、カナをお願いね？」

「はい！」

「何か釈然としない…」

「自業自得でしょ？ まったく…。…あ…し、シオン。ちょっと待ってられない？」

「ん？ なに、ユフィー？」

「…これ／＼／」

耳まで顔を真っ赤にさせたユフィーが、シオンにある物を手渡す。

それは、彼女自身の魔力で作られた氷のペンダント。

翼を象った氷のそれは、日の光に当たって綺麗な輝きを放っていた。

「わあ…。ありがとう、ユフィー」

「：お、お祝いよ／＼。念を込めて作ったから、そうそう簡単には溶けないわ。これからは、王様になって全然会えなくなるんじゃない？」

「うん。ここ一年は会えなくなるかもね。結構忙しくなると思う。彼らに頼まれたこともあるし」

あれから、クロスティアたちはひっそりと暮らすことを選んだ。

さすがにあの砦内で暮らすことは不可能に近かったために、シオンが帝国領に招いて間借りした村の一角に住んでいる。

彼らの主張としてはそんなに長く生きられないから、こんな設備はいらないとの事だったが、シオンはそれを頑なに拒否したために少々と言った形だが。

だが、シオンはそれでよかった。彼らが望む世界を、彼らが生きていくまでに少しでも実現する。

それがシオンの今の目標なのだから。

「じゃ、行ってくるよ。これ以上長引かせる訳には行かないからね」

「ええ。いつてらっしゃい」

ユフィーは珍しい暖かな笑顔でシオンを送り出し、それを見たシオンは同じ暖かな笑顔で応え、部屋を後にした。

「あれー、ユフィーちゃんついていかなくて良かったの？」

「いいわよ。あそこからは、あたしたちが歩んでいい場所じゃない。あそこはもう、シオンの道よ」

「そうですね。あ、見えましたよ！ 何かカッコいいですねー…」

「そうだねー…。ユフィーちゃん、頑張れ！」

「え？ 何を頑張るんですか？」

「あなたは知らなくていいわよ、リィナ。…カナ？ 少しお話ししましょうかね？」

「へ？ ええええーっとおお…」

汗をだらだらと流しながら、威圧感たっぷりのユフィーの視線から逃れようとするカナ。

ユフィーはそんなカナの頭を握り、少し懲らしめてやろうとしていたが、シオンの演説が始まったことにその手を止めた。

「——ここに宣言する！ 僕は王として、あなたたちに約束しよう！ 僕が目指す世界は、『分かり合う事の出来る世界』！ そのために、僕は誓う！ 王として、僕は決して屈しない！ そのために、どんな困難が待ち受けていようとも！ 僕は、あなたたちの笑顔を守るために、戦うことを誓います！！」

わあああー！ー！ー！！！！

拍手が巻き起こり、ここに新たな王が誕生した。

フォーゲルノート帝国国王、シオン・セナ・ファルカスが。

エピローグ

「ふう…。やっと終わったよ…」

「お疲れ様。格好良かったわよ？」

「はい！　こんなに皆から好かれているなんてすごいです！」

「うん。滅多に見ないよね、あんな人気ぶりは」

戻ってきたシオンに、少女達の労いの言葉がかかる。

その労いを受けながら、シオンは椅子に座り、大きくため息を吐いた。

「はああ…。でも、ここから始まりだ。やらなきゃいけないことは、たくさんあるんだから」

「じゃあ、あたしたちも手伝うわよ？」

「はい。私は王国側ですけど、だからこそ出来る事がありますから！」

「私も私も！　絶対こっちの方が楽しいもん！　トレジャーハンターやってるより、絶対に食い扶持稼ぎやすいしね！」

「皆…」

約一名不純な考えが混じっている気もするが、それもいつもの事なので、シオンは素直に感謝していた。

一人でできることは少ない。だからこそ、協力しあうのが人間なのだ。

そうやって人は集まり、国になり、世界になる。

その事を、シオンは今まさに噛み締めていた。

「ありがとう。僕は、一人じゃないよね」

「当たり前じゃない。それに、あたしの生きる意味はあなたなのよ？ だから、あたしはあんたについていくわ」

「恩人には一生をかけて報いろって言われましたからね。これぐらいは当然ですよ！」

「うんうん。楽しくないと！ 私の決意は、シオン君がくれた。笑っていられる世界：一緒に作ろう！」

「うん！ 皆、これからよろしく！」

そして、少年と少女たちは手を取り合った。

これが大きな一歩。

これを、世界に広めていく。

それが、この世界を変えていくものだと思じて。

そして、この思いこそが『決意』。人を動かし、繋げていく。
決意こそが、『想いの力』なのだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4662z/>

アクレニア戦記 ～二つの決意～

2011年12月31日18時48分発行